

335
194

0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁶
30^m 1 2 3 4 5

始



持207
617



津
保
物
語



宇津保物語 下 目錄

藏 開 (上)	一
藏 開 (中)	一一
藏 開 (下)	一七五
國 讓 (上)	二五一
國 讓 (中)	三三五
國 讓 (下)	四四五
樓の上 (上)	五九三
樓の上 (下)	六七九

宇津保物語

藏開(上)

● 仲忠、三條京極の舊宅を修理す。寶藏の奇特。仲忠、二條大宮の院を賜はる。

● 女一宮懐胎。仁壽殿女御退出。産屋の準備。● 女一宮に消息。七夜。盛宴。● 贈物を方々に願つ。兼雅夫婦の物語。● 九日の産養。方々上りの贈物。管絃。● 産屋の事によりて集りし人々退散。贈物。産屋の物を帝に奉る。内侍のすけ。仲忠夫婦の前にて當代の男女を評す。● 正頼參内。産養の有様を奏す。● 祐澄、あて宮を訪ふ。産養の噂。● 祐澄、父母に對面。仲忠の追薦。● 大宮五十日の産養。彈正宮、大宮と物語。仲忠夫婦の物語。正頼夫婦の物語。● 正頼大將を辭す。● 仲忠兼右大將に任ぜらる。● 參内。女官等の評判。俊藤の家集を進覽すべき勅を受く。● 仲忠東宮に參る。東宮、あて宮と仲忠の噂。● 近衛府の屬僚の祝宴。

● 仲忠、三條京極の舊宅を修理す。寶藏の奇特。仲忠、二條大宮の院を賜はる。

〔語譯〕
 (一) 仲忠
 (二) 檢非違使の別當になれば華麗な服装をする譯にゆかぬとしてそれは兼ねずの意、但「田鶴村島」には檢非違使をかねたる事見えたり
 (三) 衛門督—左衛門督

藤中納言は、衛門督なれど、装束清らにせずとて、非違の別當はかけず、さてあり經給ふほどに、少かりし世のことなれど、京極など覺えければ、昔より親の傳

藏開(上)

一

はり住み給ひける所にこそありけれ、わが親の御時に無くなりたるを、我つくらせて、母北の方に奉らむと思して、霜月ばかりに、陸まじき人すこし御供にておはして見給へば、この程は野中のやうにて、人の家も見えず。さる所に、昔の寢殿一つ、めぐりはあらはにて、塗籠のかぎり見ゆ。又西北の隅に大きにいかめしき藏あり。中納言、御前したる人の馬に乗りて、めぐりて見給へば、この藏は、この地の程にも見えず。供なる人に、「この地の内か。見よ」と宣ふ。めぐりて見て、供人「此の内なり」と申す。近く寄りて見給へば、藏のめぐりに、人の屍數知らずあり。恐ろしと見つゝ、なほうち寄りて見給へば、世になくいかめしき錠かけたり。その錠の上をば、かねを捻りかけて封したり。その封の結び目に、故治部卿の主の御名、文字彫りついたり。中納言見給ひて、驚きて、これは文庫ならむ、昔累代の博士の家なりけるを、一枚の書も見えず、その道ならぬ琴などだに、世の中にも散り、此處にも残りたるものを、これ開けさせむ、と思すほど

- (一)この邸内のものとも見えず
- (二)うち寄りて「て」ナ
- (三)銅線なるべし
- (四)俊隆
- (五)我が家は

(考異)
 (二)うち寄りて「て」ナ
 (六)一枚の書も見えず一枚もよみ見えず

に、河原のほとりより、年九十ばかりにて、雪を戴きたるやうなる嫗翁、這ひに這ひ来て、老人「まづ此處去らせ給へ」と泣く。「何ぞ斯くは申す」とて御隨身の間へば、老人「なほまづ此處去らせ給へ。多くの人取り殺しつる藏なり。まづ御覽せよ、こよらの人の屍を。去らせ給ひなむ時、ある様は申さむ」と言へば、怪しがりて、うち去りて立ち給ひたり。さて、これらが申すやう、老人「此の村は、いみじく榮えて侍りし所なり。今年二十年あまり、三十年にはまだ足らぬ程になむ、斯く滅びて侍る。その故は、昔一人子を唐土にわたし給へりし人の、御殿になむありし。その子をお待ちつけ給はで亡せ給ひて後に、その子歸りいましたり。さてこの殿を、いと清らに造りて、住み給ひし程に、御女一人なむもち給へりし。その女の小さいますがかりし時より、世に聞えぬ音聲樂の聲なむ絶えざりし。その音聲樂を聴く人は、みな肝心榮えて、病あるものは病なくなり、老いたるものも若くなりしかば、京の中の人、めぐりて承りし。その女、嫁時になり給ひし

- (一)はとりほど
- (二)斯くは「は」ナシ
- (三)御隨身の「の」ナシ
- (四)俊隆をいふ
- (五)お待ちつけーお待ち得
- (六)俊隆が娘に琴を教へし時の事
- (七)病なくなり「病」ナシ
- (八)ものもーものは

〔語釋〕
(七)此邊に人の住まぬ様
になりしは如何なる故ぞ

〔考異〕

(一)世にありとも一ナン

(二)見え侍りて一見え侍
らて

(三)所に百歳に一所にな
む百歳に

(四)百歳一百年

(五)姿顔一姿の

(六)悲しきに悲しさに

かば、御門を閉して、人通はさでありしに、^(一)天皇親王、宮殿ばらの、御よば
ひの御使は、明けたてば立ちめぐりてあれど、言もえ告げでぞ侍りし。然ありし
程に母かくれ給ひ、其の後父かくれ給ひにしかば、かの御女は世にありとも聞え
給はずなりにき。然りしかば、この殿は、河原人里人入りみだりて、^(二)毀ちはてて、
一二年に斯くなり侍りにき。屋どもは萬の者ども取りしが、事も無かめりしに、
この藏ばかりは「物ども侍らむ」とてまかり寄る者はやがて倒れて、^(三)多くの人死
に侍りぬ。夜は、人にも見え侍りて、馬に乗りて来つと、弓弦打をしつと、夜め
ぐりする様になむ侍る。かく恐ろしき所に、^(四)百歳になり侍るまでこの嬭翁の見
奉り侍るに、わが國に見え給はぬ姿顔おはする。玉の男の見え給へるは、いみ
じう悲しきに、疾く告げ申さむとて、^(五)惑ひまうで来つれど、えまうで来あへず、
惑ひ侍るなり」と申す。^(六)

中納言、^(七)仲思いとよく申したり。このめぐりに住ますなりにけむは、いかである



〔語釋〕
(一)「まつりごと」は「まがごと」の誤歟

(二)前の如く開けんと試みる者あるかと

(四)屍體

(八)仲忠

〔考異〕
(三)如する―如くする

(五)四五日―四日五日

(六)ありて―あれば

(七)被し―し」ナシ

ぞ」と問はせ給へば、老人「この藏を開けむく」とし侍りつよ、「人のあしくするを、我はなど開けざらむ」と、かつ倒れ伏せるを見つよ、年月を経てし侍りし程に、みな死に侍りにき。然せし人の家には、時のまつりごとおこりつよ、にはかにほろび給ひにき」と申せば、仲忠「いと恐ろしきことかな。又開くる人やあると見侍れ」とて御衣一襲ぬぎ給ひて、一つづつ賜ひつ。仲忠「この地のうちに見ゆる屋のわたりに侍りて、この藏へ、また然の如するやあると見侍れ。さてその藏のめぐりにうたてあるもの、野邊に拂ひ棄てさせてさふらへ」とてかへり給ひぬれば、^(四) 嫗翁 老の世に、見知らぬ、芳しくうるはしき綾、かいねりの御衣どもを得て、怖惑ふこと限なし。すなはち、物詣したる人見付けて、價も限らず買ひ取りつ。かくて其の價のものを、己が孫のあたりの者にくれて、藏のめぐりを拂ひ淨めさせてさふらへば、^(五) 四五日ばかりありて殿の家司来て、幄うつ。暫しあれば、大徳たち、^(七) 陰陽師など来て、^(六) 祓し讀經するほどに、^(八) 中納言、御前いと多くて、藏あけ

〔語釋〕
(一)陰陽師などに祭文をよましむる也
(二)仲忠が幄舎の内に宿する也

(六)「あせ」は「あせぐち」の「あせ」歟

〔考異〕

(三)先祖―先代

(四)開くべき―わるべき

(五)と見む―ナシ

さすべき人などひき率ておはして、^(二) 事の由申させ、御誦經をせさせ給ひて、鍵なければ、開くべきたばかりをしつよ、藏を開けさせ給ふに、更に開かず。其處に、^(三) 二三日多くの人をひき率て、夜は車にて幄のうちに居給ひつよ、開けさせ給ふに、更に開くべうもあらず。片手を脱き折りなど、^(四) 多くの人し煩ふ。三日といふ晝つかた、御装束などし給ひて、心のうちに申し給ふやう、仲忠「承れば、この藏先祖の御領なりけり。御封を見れば、御名あり。この世に、仲忠をはなちては、^(五) 御後なし。母侍れど、これ女なり。この藏、先祖の御靈開かせ給へ」と禱り給ふ。されど開かず。人の申す様、「天下に如何にいふとも、この錠は開くべきにもあらず。壁を毀ちて開け侍らむ」と申せば、仲忠「如何なれば得開けぬぞと見む。怪しきわざかな」とうち笑ひて、藏にのほりて見給へば、いといかめしき錠なり。引きくつろがして見給へば、開きぬ。これは、^(六) けに先祖の御靈の我を待ち給ふなりけり、と思して、人を召して開けさせて見給へば、内に今一重あせ

(語釋)
(四) 俊蔭女
(七) 俊蔭

(考異)
(一) 机どもに一机にふきに

(二) 積み一つづみ

(三) 残しおき一さしおき

(五) 御文「御」ナシ

(六) 子うむ一たちむ

して錠あり。その戸には、「文殿」と印さしたり。然ればよと思して、また錠開け給へば、たゞ開きに開きぬ。見給へば、書どもうるはしき帙篋どもに包みて、唐組の紐して結び、机どもに積みてあり。その中に、沈の長櫃の辛櫃十ばかり重ね置きたり。奥の方に、よき程の柱ばかりにて赤く圓きもの、積み置きたり。たゞ口もとに、目録を書きたる書を取り給ひて、ありつる様に錠さして、多くの殿の人残しおきて歸り給ひぬ。

三條におはして、北の方に、ありつるやう申し給ひて、この御文の目録を見給へば、いとみじくあり難き寶物多かり。書どもは更にも言はず、唐土にだに、人の見知らざりける、みな書きわたしたり。醫師書、陰陽師書、人相する書、孕み子うむ人のこと言ひたる、いとかしこくて多かり。母北の方、俊蔭女、あなゆよしや。昔人は、ことさら己をば惑はさむとこそ思しけれ」中納言、仲思「いと賢くものし給ひける人なりければ、思す様こそありけめ。これらを其處に持ち給ひてば、如何にかはせ

(語釋)
(二) 「たいは」は「對」なるべし

(四) 仲忠の妻

(七) 天皇が御讓位後の御住居として定められたる御殿

(八) 後院にとて造れる家をさふ

(考異)
(一) はるべきに一さしつ

(三) 一つ一ナシ

(五) なむ一ナシ

(六) 要ある一用ある

(九) この家一この家は

させ給はまし。今までは在りなましやは」など宣ひて、すなはち國々の受領などのさるべきにたい一つづつ預け、しつべき人々にみな宣ひ預けつよつくらせ給ふ。まづ築土、二三百人の夫どもして、その年のうちに築きつ。藏の辛櫃一つに香ありといへるを、取り出でさせ給ひて、母北の方にも一の宮にも奉り給へば、この御族の香どもは、世の常ならずなむ。書どもも、要あるは取り出でて見給ふ。この殿造れば、そのめぐりに、「かく世にさかえ給ふ君住み給ひし」とて、皆家造りて來りぬ。かの出で來りし姫翁は、政所に召して、布、衣などいと多く賜ふ。

書詞

ことは京極殿。藏あけたる所

かよる事を、内裏きこしめして、後院にとて年頃造らせ給ふ、大宮の大路よりは東、二條大路よりは北に、ひろく面白き院あり、それを中納言召して賜ふとて宣ふ、朱雀「この家、かく廣き所なるを、まだ私の家なども無かなり。これを文所にして、かの始祖の、ことに隠されたらむ手など習はれむに、よかんべかなる。

〔語譯〕

(一)女一宮

(四)女一宮に與へむ

(八)産經の記せる所に隨ひて

(九)女一の傍を離れず

●女一宮懐胎。仁壽殿女御退出。産所の準備。

〔考異〕

(二)人近く「人」ナシ

(三)あへむ「あいなし

(五)今一ナシ

(六)然りぬべき「さるべき

(七)出ほして「もほして

かの御子ともろともに、琴など弾きつよきかせ給へ。人近く聞かざらむはあへなむ」とて賜ふ。(一)「その南にこれよりは小き所あり。それは一の御子に、今ものせむ」と宣ひて賜へば、中納言舞踏して賜はり給ひて、まかで給ひぬ。(四)帝女御の君に聞え給ふ、朱雀「今、女御子たちは、然りぬべき所つくらせて、相次ぎつよものせむ」など聞え給ふ。(五)

かくてかへる年の正月ばかりより、一の宮孕み給ひぬ。中納言、かの藏なる、産經などいふ書ども取り出でて、トひ給ひて、女御子にてもこそあれと思ほして、産るよ子、かたちよく、心よくなるといへるものをば参り、然らぬものも、それに隨ひてし給ふ。参り物は、刀組をさへ御前にて、手づからといふばかりにて、我なほ添ひ賄ひて参り給ふ。かくてその年は、立ち去りもし給はず、かつは女どもを見つと、夜晝學問をし給ふ。(六)かゝる程に、子うみ給ふべき期近くなりぬれば、女御の君、上に聞え給ふ、仁壽殿「一

〔語譯〕

(二)産婦をば

(三)仲忠

(四)女一宮

(五)仲忠と

(七)朱雀の第二女

(九)仁壽殿の生家なる正頼の家は

(一〇)あやかるべき人として其方も萬更でもあ

〔考異〕

(一)侍りなむ「侍らむ

(六)長く「ナシ

(八)上「君

の宮、御子産み給ふべきほど近くなりぬるを、まかで侍りなむ」上、朱雀「何時ばかりにか」女御の君、仁壽殿「十月ばかりの程になむ」上、朱雀「然るべき事にこそあなれ。さる人をば、かねてより勞りなどこそすれ。如何ならむ」女御、仁壽殿「何かは。かの朝臣、まかり歩きもせで、この頃は侍るなるを、誰もくよに疎には」上、朱雀「この御子を久しく見ぬかな。如何生ひなりにたらむ。かの人と著き並びたらむには、世に似けなうは見えざりしを」御いらへ、仁壽殿「人はいかど見奉るらむ。まことなるにや。御髪も、御覽せしよりは長く、うちぎに多くあまり侍る。大方も見るかひなくは物し給はず」上、朱雀「さて二の御子は」女御、朱雀「上に似たまひて、それもことに劣り給はず、ふくらかに氣近きこと添ひてなむ」上、朱雀「なほ所がらにや。女子生し立てらるゝ所なれば、この御子たちも、外には似ずかし。さらば平かにてを。思ふ様にて、御子をあまた平かにて持給へる肖物は、其處にも怪しうはあらじかし」と宣へばまかで給ひぬ。(二〇)

〔語釋〕

(一) 仲忠

(二) 女一を

(五)「えうし」にて盛きを
かけたる如くの意なるべし
「やうし」とかける本も
あり

(八) 俊隆女

(九)「は」衍るるべし

〔考異〕

(三) 給ひて一給ふに

目女一宮大宮を産む。仲
忠母子琴を彈く。産湯。

(四) うしろめたがりう
しろめたげに

(六) 如して一如くで

(七) 奉りつ一奉る

かくて中納言殿の出で給ひたる間に、女御の君中の大殿にわたり給ひて見奉り
給ひて、仁壽殿「いたくぞ面瘦せ給ひにける。上の然ばかりうしろめたがり聞え給ふ
ものを」とて見奉り給ふに、おもしろく盛なる櫻の朝露に濡れあえたる色あひ
にて、御髪はようしかけたる如して隙なくゆりかよりて、玉ひかる様に見え給ふ。
御衣は、赤らかなる唐綾のうちきの御衣、一かさね奉りて、御脇息におしかよ
りておはす。斯くて産屋の設、白き綾、御調度ども、銀にしかへして、殿にま
うけ給ふ。

二月ばかりかねて、うまれ給はむ日まで、不斷の修法萬の神佛にいのり申させ給
ふほどに、十月になりて、中の十日ばかりに、宮氣色ありて惱み給ふ。御座所、
東宮の宮たちの産れ給ひし所を、あるべき様にしつらはれて、わたし奉りつ。
内侍のかんのおとど、御車五つばかりして参り給へり。中納言はおろし奉りて、
宮のおはします御帳の内へ入れ奉り給ふ。大宮もわたり給へり。それは御局し

〔語釋〕

(一) 俊隆女と

(二) 仁壽殿と俊隆女と兩
人にて

(三) 兼雅

(四) 正頼

(五) 仲忠

(六) 巨勢氏曰、「女御の君
居隠れ給へば歟、仁壽殿
が女一宮を掩ひかくすな
るべし

(九)「に宮」は「宮に」なる
べし

〔考異〕

(七)に居隠れ一はひかく
れ

(八) 仲忠一仲忠は

て別におはします。女御の君は、仁壽殿「何か。相撲の節の夜、いと睦しくなりにし
かば」とて同じ御帳の内におはしまして、たゞ二所にかよりもて仕うまつり給ふ。
ことに痛くあらねど、なほ心もとなく惱み給ふ。右大將殿も参り給ひておはしま
す。あるじのおとど君たちは、簀子に弓引きつよさふらひ給ふ。御格子の内の廂
には、宮の御はらから、男宮たちおはします。御帳の前に、弓引きつよ中納言さ
ふらひ給ふ。内裏より御使、ゆきかへりあり。藤壺よりも御使あり。殿のうち方
方の上達部は、入らずもあらむと思して、町異なれば、中門を鎖しておはしまさ
ふ。

かよる程に、寅の時ばかりに生れ給うて、聲高に泣き給ふ。中納言驚きて、御帳
のかたびらをかき揚げて、仲忠「何ぞやく」と聞え給へば、かんのおとど、俊隆女「あ
なさがなや。現なり」とて女御の君に居隠れ給へば、仲忠「今夜は目も見え侍ら
ず」といふものから、女御の君に宮かより奉りて、さわぎ給ふを見れば、白き綾

(語釋)
(一) 髪(かみ)の毛(け)を耳(みみ)にはさむ
也(なり)かひ(か)ひ(か)しき(し)機(はた)也(なり)

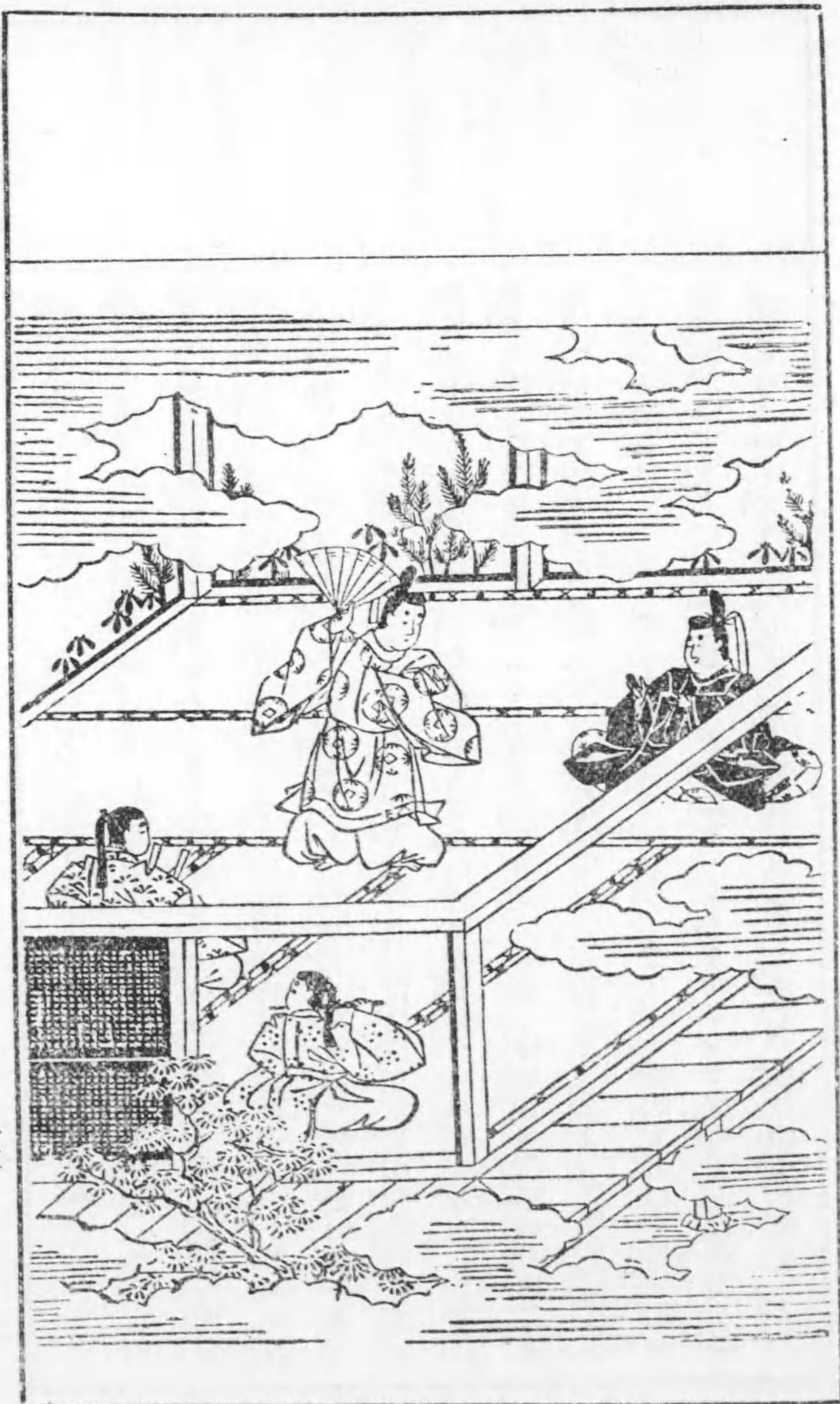
(二) 後(のち)庭(にわ)

(三) 御時(ごとき)よく即機(すなは)會(あ)ひよく
の意(い)趣(す)とときよくと
か(か)ける本(もと)もあり

(四) 仲忠(なかつち)が

(五) 老鶴(らうかく)と傍書(わらわ)せる本
あり。如何(いかん)。一本(いっぴん)もひつ
か(か)

の御衣(ごぎ)を奉(たて)りて、耳(みみ)はさみをして、惑(まど)ひおはす。いと宿德(しゆくとく)に、ものくしきも
のから、氣高(けだか)くこめきて、御髮(ごかみ)ゆりかけたり。わが親(おや)も、いづれとなくめでたし。
同じ白(おな)き御衣(ごぎ)著(き)給(たま)へり。中納言(ちうなごん)、なほ物はた籠(こも)れりける處(ところ)かなと見給(みたま)ふに、
ものもいと平(たひら)かになりぬ。中納言(ちうなごん)、仲忠(なかつち)何(なに)ぞと問(と)ひ給(たま)へば、かんのおとど、
御藤女(ごふぢや)夜目(よめ)にも著(しる)くぞと聞(き)こへば中納言(ちうなごん)、萬歳樂(まんざいらく)をれかへりく舞(ま)ひ給(たま)ふ。三
の親王(みこ)いたく笑(わら)ひ給(たま)ひて、親王(みこ)たちその樂(がく)を高麗笛(こまがえふエ)に吹(ふ)き給(たま)ふ。主(あるじ)のおとど、
正頼(ただたか)「など斯(か)くは」と聞(き)こへば、三(さん)の親王(みこ)、忠康(ちゆかう)中納言(ちうなごん)のこめ舞(ま)ひ給(たま)ふなめり」
右大將(うだいしやう)兼雅(かねみや)「たど今(いま)のすきは、あぢきなくぞ侍(はべ)る」主(あるじ)のおとど、御(ご)ときよくうち
笑(わら)ひ給(たま)へば一度(いちど)にほと笑(わら)ふ。いと心地(こころぢ)よけなり。主(あるじ)のおとど参(まゐ)り給(たま)へば、笑(わら)ひ
てつい居(ゐ)ぬ。おとど、正頼(ただたか)「萬歳樂(まんざいらく)は、果(は)たしてこそ。半(なかば)にては悪(あし)からむ」と宣(のたま)へば
又(また)立(た)ちて、無(な)き手(て)を出(い)だして舞(ま)ひ果(は)てつ。
おとど、おひづるの紋(もん)の織物(おりもの)の直衣(なほし)をかつげ給(たま)へば、かつきて舞(ま)ひ立(た)てる程(ほど)に、



〔語釋〕
(一)誤あるべし

(二)仲忠を戯に誘りていふなるべし

(四)其赤兒を下され

(五)仲忠が赤兒を

(六)頭がよくすわりそな程にて

〔考異〕

(三)物いちぢるき夜―くのいちしきよる―物いはじしき夜に

かんのおとど、生れ給ひつる君の御臍緒切り給はむとて、俊隆女「たゞ人はさふらへ。人のするわざどもこそはせめ。このもの、見苦しのかたつぶりや」と宣へば、ついで居て、仲忠「何を召すぞ」おとど、俊隆女「下なるもの一つ」と宣へば、指貫を脱ぎて奉り給へば、「否や。今一種を」と宣へば、白きあはせのはかま一かさを脱ぎて奉りて、「あな命長や」とて御衣掛のもとに立寄りて見給へば、御たち笑ふ。仲忠も、「物いちぢるき夜もや」と宣へば孫王の君、「けに、立ち走りやすくせさせ給ふめり」と聞ゆる程に、かんのおとど生れ給へる君を、いと清く拭ひて、御臍緒切りて、このはかまに押しくみて、かき抱き給ふ。中納言、御帳のもとに寄りてついで居て、仲忠「まづ賜へや」と聞え給ふ。かんのおとど、俊隆女「あなさがなや。いかでか外には」と宣へば、かたびらを引きかづきて、土居のもとにて抱き取りたれば、いと大きに、頭も居ぬべき程にて、玉光りかどやく様にて、いみじく美しけなり。いと大きなものかな、斯かればこそ、久しく悩みつるにやあらむ。

〔語釋〕
(二)琴の名

(三)いぬは此赤兒の名なれどこゝにていふは稍突然の嫌あり

(四)仲忠が入用なりといふ故

(五)兼雅が

(七)我が琴の手法を誰に傳へんかと憂ひ居たりしに後の事は知らずとにか今此兒あれば安心なり

(八)などとしてなるべし

(六)持たせて―とちせて

と思ひて、懐にさし入れつ。右のおとど、正頼「いでく」とて寄りおはすれば、仲忠「只今は更にく」とて見せ奉り給はず。おとど、正頼「今斯くも將」とて笑ひ給ふ。中納言、仲忠「かのりうかくは、賜はりて、いぬの守にし侍らむ」かんのおとど、うち笑ひて、俊隆女「いつしかとも將。さてもかやうの折には、いふ様かある」と宣へば、仲忠「大方のことは如何侍らむ。この琴の族ある所聲する所には、天人のかけりて聞き給ふなれば、添へむとて聞ゆるなり」かんのおとど、内侍のすけして、大將のおとどに、俊隆女「かの己が琴、此處に要せらるめり。取らせむ」と聞え給へば、いそぎて、三條殿にわたり給ひて、持たせておはしたり。三の宮とり給ひて、中納言にさし遣り給へば、唐の縫物の袋に入れたり。兒を懐に入れながら、琴を取り出で給ひて、仲忠「年頃、この手を如何にし侍らむと思ひ給へ歎きつるを、後は知らねど」などて「はうしやう」といふ手を、花やかに弾く。聲いとほりかに賑はしきものから、又あはれに凄し。萬の物の音多く、琴の

- (一) 語釋
- (一) そりやはじまつたの意
- (二) 御産がありしならん
- (四) 今まで袖断して居し
- (八) 仲忠
- (一〇) よう仕りませぬ
- (考異)
- (三) 所ぞかしーものから
- (五) まひろげてーまさび
- (六) これかれーたれかれ
- (七) 築土のこの方ーいとの方
- (九) 今曲一つー今一つー今こがく一つ

調べあはせたる聲、むかひて聞くよりも、遠くひどきたり。おほん方々、上達部、御子たち、「そぞやく。事なりにたるべし。かよる事はありなむと思ふ所ぞかし。我等がしどけなきぞかし」とて、あるは御履もはきあへ給はず、あるは御衣も著あへ給はず、手惑ひをしつよ走りあつまりて、御前にあたりたる東の簀子に、植ゑたる如おはしまさふ。涼の中納言は、うち休み給へる寝耳に聞きて、驚きながら、冠もうちそばめてさし入れ、指貫直衣などをひきさけて、まひろけて出で來たり。これかれ見給ひて、いみじう笑ひ給ふ。源中納言「涼物語をだにせざんなり。あなかまや」と手うちかきて、石だたみのもとにて、直衣指貫着てのほりぬ。御方の御隨身どもは御門のもとに居り。こと供人は近くも寄らず、築土のこの方に立てり。中納言、然るべき曲を音高くひくに、風いと聲あらく吹き、空の氣色さわがしけなれば、例のもの手觸れにくきぞかし、煩はしと思ひて弾きやみて、かんのおとどに申し給ふ、仲忠「今曲一つ仕うまつらむとすれど、騒がしければ、得

(二〇)

- (一) 語釋
- (五) 女一宮
- (六) 産をせぬ上りも
- (考異)
- (一) ちとーナレ
- (二) ちちへー君ー又ナン
- (三) 曲一つーたつ
- (四) 思ひに沈みたるもー思ひおちぶれたる人も
- (七) 給ひつればー給へれば
- (八) 御佩刀にーにしナシ

なむ。これに御手一つあそばして、鬼にきかせ給へ」と聞え給へば、俊藤女「いとほしたなけにぞあめる」いらへ、仲忠「仲忠が爲には、これに勝る折なむ侍るまじき」と聞え給へば、かんのおとど御床より下り給ひて琴を取り給ひて、曲一つ弾き給ふ。その音、更にいふ限なし。中納言の御手は、おもしろく、ゆよしきまで、雲風のけしき色ことなるを、この御手は、病あるもの、思に沈みたるも、これを聞けばみな忘れて、おもしろく頼もしく、齡榮ゆる心地す。かよれば宮は、御琴を聞召しつれば、たどにおはしつるよりも爽かに、わざをしつるとも思されず、苦しきことも無くて起き居給へり。中納言の君、仲忠「悪しかめり。なほ臥させ給ひて聞召せ」と申し給へば、宮、「たど今は苦しうもあらず。この御琴を聞きつれば、苦しかりつるも皆やみぬ」とて居給へり。女御君、かんのおとど、「風ひき給ひてむ」とてさわぎ、臥せ奉り給ひつ。琴は弾きはて給ひつれば、袋に入れて、宮の御枕がみ、御佩刀に添へて置きつ。かよる程に、明けはてぬれば、御格子ども

〔語釋〕
(三)仲忠に昇進の沙汰な
どもあるべき筈なれど缺
官なき故行ふを得ず

(四)勅使饗應の作法

(五)無沙汰はせぬ積なり
しを

〔考異〕
(一)し給へども一宣へど
も

(二)中將の君一「の君」ナ
シ

(六)程にはなさじ一程に
はなたじ

みな揚げわたし、御几帳たてつゝあるに、あるじの大殿、宮の御はらからの宮たち、くづれて皆下り給へば、みな人も下りぬ。おとど、宮たち、殿の君たち、竝み立ちて拜し給ふ。中納言の君に斯くし給へども、「あなかしこ」とも聞えて、なほ見抱きて居給へり。

かよる程に、内裏より頭の中將の君して、御消息あり。

(三)

朱雀珍らしき人の、平かにあなるも、ありがたき事の様々ものせらるゝなるをなむ、限なく聞召す。例あるよろこびなどもせさすべきを、たゞ今その缺などえあらで。

(三)

などあり。穢らひたれば、例の作法なし。中納言下りて拜し給ひ、御返しそうせさせ給ひつ。又内裏より藏人式部丞を御使にて、右大將のかんのおとどの許に御文賜へり。

朱雀おほつかなき程にはなさじともせしを、心にもあらで久しくなりにける

(五)

(六)

〔語釋〕
(三)俊隆女が付添ひ居る
事故女一宮も苦痛を忘る
るならんと

〔考異〕

(一)覺えしかばこそ一
「こそ」ナシ

(二)なされ一をされ

(四)つゝましく思ひ一つ
「ましろ」

を、いとあはれに珍らしかりし對面に、はつかなりし物の音も忘れがたく覺えしかばこそ、時をもまらられよとて、公になどは。されど、よくこそせいしなされためれ。こゝに、いかでと思ひし事を、様々に其處にあなるを、いと羨ましく、そのわたりの事をも如何にと思ふに、さやうにて物せらるゝなれば、惱ましきことも忘れぬらむ、と頼もしくなむ。いかで、ありきかやすくて疾くもがなとぞ、内裏わたりにはた參られざめれば。

と宣へり。かんのおとど見給ひて、御返し、

俊隆女かしまりて承りぬ。此處にさふらふことは、仲忠の朝臣の、又なき事に思ひ給ひて侍るめりしかばなむ。何の数なるべき身には侍らねど、雜役をももろともに、と思ひ給へてなむ。様々に仰せごと侍るは、何事にかは。齡くらべするがほにや。參り侍らぬことは、かよる里住にもうひくしき心地し侍れば、つゝましく思ひ給へられてなむ、いとかしこき仰せごとをぞ。

(四)

返すく聞えさせ侍る。

ときこえ給ふ。御使に祿なし。忌ませ給へばなるべし。

かよる程に、御乳まるるべき時なりぬ。御業は、父の中納言の懐にてくよめ奉

り給ふ。御乳付、左衛門佐殿の北の方、御几帳のもとにさふらひ給へば、女御の

君、かき抱きて、御衣させ奉り給ひ、襦袢につよみて御乳まるり給ふ。御乳母ど

も召しあつめたり。一人は民部大輔の女、いま一人は五位ばかりの人の女ども

なり。

御湯殿すべき時もなりぬれば、その儀式、みな生絹の白き綾をつかはれたり。御

湯殿は東宮の若宮の御迎へ湯に参り給ひし内侍のすけ、白きあやの生絹に、單襲

のうちき上に著て、あやの湯巻、御槽の底にも敷き、迎湯はかんのおとど、白き

あやのうちき一かさね、同じき裳一かさね、結び込め給へり。中納言白きあやの

うちき一かさね緑の青指貫著て、湯ひき給ふ。殿の君たち、弓引きつよおはす。

(語釋)
(一)産の穢を忌む也

(四)連澄

(考異)

(二)なるべしなり

(三)給ふ一ナン

(五)なり一ナン

(六)生絹の白き一生絹の
白がさね白き

(七)若宮一若君

(八)裳一かさね一裳ひも
かさねて

(九)緑の白きさうの

(語釋)

(三)かにばと

(四)二ヶ月も浴せしめた
る後の児の様に奇麗也

(六)私さへ居れば仔細な
し

(八)此兒は女故男子は遠
慮あるべし

(考異)

(一)如して一ごとくして

(二)中納言の一中納言に
は

(五)おはすれ一おはすめ
れ

(七)ます一まさす

(九)何か一何かは

かくて女御の君かき抱きて、さし出で給へれば、かんのおとど抱きて内侍のすけ
にわたし給ふ。いまは、御湯あむし奉る。かんのおとど、裳の上について居給ひ
て、御迎湯参り給ふ。御髪御裳に少したらぬ程にて、瑩しかけたる如して、白き
御衣に隙なくゆり掛けられたり。よれたる下うち疊なはれたる、いとめでたし。
御髪つき、姿、いふ限にあらす。たゞ今二十餘に見え給ふ。中納言の親とも見え
で年二つばかりのはらからに見ゆ。すけのおもと、「こより、昔より君たちに仕う
まつりつるに、程大きに、かにといふものゆめばかり付き給はぬこそなけれ。
月あむし奉りたる様にこそおはすれ」中納言、仲忠、見たまへ離たねば、然もあ
らむ」すけ「すけさふらひてましかば。いと畏かりけり。親にはおはしますとも。
立たせ給へや。女におはしますめれ」と聞ゆれば、仲忠「何かそは、そのわたりを
もよくつくろひ給へ」と聞えむとぞや」と宣ふ。さて、御湯殿はてぬれば、女御の
君、抱かまほしうおほせど、父おとど添ひ居給へれば、かんのおとどいだけ給ひて、

〔語釋〕
(一)女一宮に

(二)此様な男の兒を又ほし

〔考異〕
(一)おぼえぬ―おぼえ給はぬ

(四)うたて―うたても

(五)いらへもし給はず―物も宣はず

〔考異〕
御産養。あて宮より女一宮に消息。七夜。盛宴。

御几帳さよさせて入り給ひて、宮の御方かたにふせ奉り給ひつ。中納言御帳の内へ入り給へば、かんのおとど、俊隆あなあなさがな。現なるに」と宣へば、仲忠なかつ何が。かよる宮仕つかうまつる人には、内外をこそゆるし給はめ」とてつよみ聞え給はねば、女御の君外きみぞにるざり出で給ひぬ。中納言、仲忠、久しういも寝侍らねば、みだり心地いとあしう侍る。罪ゆるし給へ」とて宮の御傍かたはらにうち臥し給ひぬ。かんのおとど、俊隆、うたて物おほえぬ様し給ふめり。さて忍びてさふらひ給へ」とて出で給ひぬれば、中納言、御衾みすまひき居て聞ゆる様、仲忠、かよるものまたもがな。いと疾く、此度は、仲忠が様にてを」と聞ゆれば、うたて言ふものかな。いと恐ろしきわざにこそありけれ、と思していらへもし給はず。

かくて皆、御前ごぜんごとに物参りなどして、夜さり御湯殿例のごとしつ。御帳の西の方なる母屋に御座装ひて大宮、子持の宮の御はらからの女宮たちおはしまさふ。西の廂むらに御座装ひて、かんのおとどの御局つばねしたるにぞ、右大將の君はやがてもの

し給ふ。かんのおとどの御許ごきには、おとな十人、わらは四人、下仕四人あり。北の方御参物は、あるじの方よりして参らせ給ふ。

〔考異〕
(一)十具ばかりにて碁代の錢百貫―十具ばかり碁代百貫

(二)碁―攤

(三)同じく―同じう

(四)もとま―「もとまの」歟

(五)碁―攤

(六)給ひて―つよ

かくて御産養の三日の夜は、右大將殿し給ふ。銀の衝重十二、おなじものうちしきもの、花文繚、羅かさねたる、銀の透箱六つに、御衣御襦袢うちしき入れたり。屯食十具ばかりにて、碁代の錢百貫なむありける。籠り給へる人々、夜一夜あそび碁打ごうちなどし給ふ。又四の宮の御方よりも、いとをかしうし給へり。五日の夜、あるじの大將、同じくいかめしうし給へり。おとど御子たちも、様々にいかめしうし給へり。碁うち物かづきなどし給ふ。

かくて六日になりぬ。女御、麝香じやかうども、多く具し集めさせ給ひて、えび、丁子、鐵臼てつうすに入れて搗かせ給ふ。ねりぎぬに縮入れて、袋に縫はせ給ひて、一袋づつ入れて、間ごとに、御簾みすに添へてかけさせ給ひて、大いなる銀の狛犬こまぬ四つに、同じ火取ひとりするて、香のあはせ薫物たえず焼きて、御帳の隅々すみずみにするたり。廂のわた

(一)たきしめたれば

(二)女二宮の食ひ残し

(三)女一が

(四)誤あるべし

りには、大いなる火取に、よき程に埋みて、よき沈、あはせ薫物、多くくべて、籠掩ひつと、数多するわたしたり。御帳のかたびら、壁代などは、よき器どもに入れてしめたれば、その大殿のあたりは、餘所にもいと芳し。まして内には、更にも言はず。しるしばかりうちほのめく晝の香などは、ことにもあらず。大宮は、北の大殿にわたり給ひぬ。こよの御座所は女御の君ぞ、時々うちやすみ給ふ。大人、わらはは、みな例の装束したり。中納言は、例ものし給ふ。東の廂に儀式して、御手水ものの賄ひなどしするたれど、母屋の御簾より、頭もさし出で給はで、宮の御おろしをのみ参る。晝間の人なき折には、這入りつと宮の御傍にうち休み、これかれおはすれば、御帳の外の土居におしかよりて、居眠し給へり。夜は、弓弦はしり打ちつと寝ず。簀子には陸ましき君たち居並み給へり。七日になりて、女御の君聞え給ふ、仁尊夕さは、御湯殿すべし。起き給へ。御髪かき解かむ」と聞え給へば、起き給へり。白き御衣の張りたるに、あかきかう



藏

開(上)

- (一)「るざりいでて」歟
- (二)はじめて産婦の髪を
とくには心得あるものぞ
- (三)「などとて」なるべし
- (五)あて宮

ちたる奉りて、御床の端の方(一)にるざり入りて、東向におはす。女御の君かんの
おとどかい分けつと梳り奉り給ふ。いとおほく、美しけにて、八尺ばかりあり。
その御賄ひは、内侍のすけと御乳母と仕うまつる。「かよる時のはじめ参らする
は、する様の侍るものを」女御の君「何か。然らずとも、心もとなからぬ御髪なれ
ば」かんのおとど、「髪は、多く長き、あまた有るべしや。筋ありさまこそ難けれ。
これは有り難くぞ」などてかい分けつと見奉り給ふ。つやよかにめでたし。こ
とに損はれ給はず、少し青み給へれど、いとあてに氣高く、さすがに匂ひやかに
おはします。(四)

- (四)給へれど給ひつれど
- (六)書いて一かきつけて
- (七)すむゝる
- (八)飛びけるすみける

かよる程に、藤壺よりとて、物二斗入るばかりの甕二つ、衝重沈の折櫃十二に物
入れて、蘇枋のたかつきにするて銀の雉子二つ、腹に龍腦籠めて、雉子の皮を
きせて、大きな松の造り枝につけて、腹にかく書いて押ししたり、
あて宮むらとりの鶴のこほりにすむ雉子の松の枝にぞけふは飛びける(七)

- (語釋)
- (二)まづ第一に御祝を申
上げたく思ひしに

とて御文あり。東宮の亮の君持て参り給ひて、宮の御前に参らせ給ふ。淺緑の色
紙一かさねに包みて、五葉につけたり。宮あけさせ給ひて、み給ひて、うち笑ひ
給ふ。中納言、仲思「なにごとにか侍らむ。見侍らばや」女二人にな見せそとあれ
ば」とて見せ給はねば、仲思「わが君は、思しへだてたるこそ」とて、手をさし入
れて取りつ。見れば、かく書き給へり。

- (考異)
- (一)な見せそと一な見せ
そなど

あて宮いともく、思ふやうに珍らしかりけることは、まづと思ふ給へしを、
しばしは物おほえぬ様に侍りしかば、もし如何見苦しき、恥かくさでを御覽
ぜよと思ふ給へてなむ、今までになり侍りにける。いでやく、いと有り
難きことの、取り集め侍りけるをりしもこそあれ、近く侍らで、え承らす
なりしこそ、世になく思ひ給へらるれ。昔ながら侍らましかば、かく思ひ給
へましや、と思ふ給ふるにつけても、心憂くこそ。
もろ共に巢馴れしものを己がよよにかよれるつると餘所に聞くかな

- (三)様に一やうにて

- (五)いとも「も」ナシ

返すくもねたくこそ。わが君、かよる事ありぬべからむ折、いと難きまろが爲に必ずく。

〔語釋〕
(二)女一

(三)「あはるにて」歎、「え」は「え聞えず」の略

(四)誤あるべし

とかき給へり。君見給ひて、うち笑ひて、仲忠、久しく見給へざりつる程に、かしこくも書き習はせ給ひにけるかな。この御返は仲忠聞えむ。まだ、御手震ひて、え書かせ給はじ。さらぬ時だに侍るものを」とて、ほよ笑みつゝ見るに、あはれに昔思ひ出でられて悲しければ、ゆよしくて置きつ。さて、赤き薄様一かさねに、仲忠、御文賜はるべき人は、まだ目もおどろにてえ、なほ聞えさせよとて侍ればなむ。思ほす様にと宣はせたるは、所せき様におほされけむ。誰も恨み聞えつべしや。まこと御爲にと宣はせたるは、何事か、すよむる功德こそ侍るめれ。あぢなき御いりなりや。

〔考異〕
(一)習はせ一ならせ

おなじ巢にうつれる鶴のもろ共にたち居む世をば君のみぞ見むと聞えさせよとなむ。

とて、裏にひきかへして、

わたくしには、いでや、今は限といふなればなほこそ。

千歳をば今やとおもふ松なれば昔もそひて忘られぬかな

と書きて、同じ一かさねに包みて、おもしろき紅葉につく。宮、女「見ばや」と

宣へば、仲忠「さぞ見給へほしう侍らむ」とて出ださせつれば、召し寄せて、はた得

見給はず。女御の君いと清らなる女の装束をとり出ださせ給ひて、三の宮請じ奉

り給ひて、仁壽「これ、かよる所よりは、たどに物せざなり」とて、仁壽「この御使

に、ものし給へ」とて奉り給へば、持て出で給ひてかづけ給ふ。亮の君、おり

て拜して参り給ひぬ。中納言、奉れ給へる物どもを取り寄せて見給へば、喪に、

練りたるうちあや、一つにはねりぎぬ、いとよき、口もとまで疊み入れ、折櫃ど

もには、一つには銀の鯉、同じ鯛、一折櫃、沈の鯉つくりて入れ、一つには、

沈蘇枋をよくく切りて一折櫃、あはせ薰物三くさ、麝香のふかう、黄金のつぼ

〔語釋〕
(二)「見給はまほしう」歎

(四)麝香歎

〔考異〕
(一)こそ一ナシ

(三)中納言一中納言は

- (一) 語釋
- (二) もしるゝ
- (三) 仲忠の心
- (四) 女一
- (八) 一方に上りてありの意歎

- (考異)
- (一) あかきぬすこしあかむたいすこしあかむひすこし
- (五) 同じき「き」ナシ
- (六) 白き練一白きはうれ
- (七) うるはしくうるはしき

の大きやかなるに入れて、一折櫃、海松とかき付けて、あかきぬすこし、白きぬを、縫目はなくて、續飯などして、海松のやうにして、一折櫃、白き物を入れたり。今一つには、えび、丁子を、鏗突のけづりものやうにて入れたたり。委しく見つゝ、煩はしく、御心入りて、斯くし給ひつらむ、殿には、さりけも無かりつるものを、など思ほす。内侍のかんのおとど見給ふ。夜さりつ方になりぬれば、大宮に御湯殿まるる。宮も御湯殿し給ふ。

かよる程に、涼の中納言殿より御産養あり。子持の宮の御前に、銀の衝重十に、同じき御器すゑて、敷物の打敷、いと清らなり。衝重どもの内には、みな物あり。一つには、綾を練りて、一つには花文練、羅、一つには色々の織物、一つには白き練、一つには練貫、一つにはねり繰りたるいとすどしき絲、物うるはしく入れたたり。かさ高く入れて、おもき物をすゑたれば、押されてかたにあり。女御の君の御前には、沈の折敷、同じきたかつきにすゑて九つ。打敷、もの毎に

- (語釋)
- (二) 思雅

- (四) 連登
- (七) 此處設脱あらんか
- (考異)
- (一) 十具一ひとくだり

- (三) さまふ一ナシ
- (五) 皆一ナシ
- (六) 清らにして一清らにて

いと清らなり。沈の御衣箱、黄金の置口したる六つに、かづけもの、女の装、十具、白きうちぎ十かさね、はかま十くだり、蒔繪の御衣櫃にいれて、物五斗ばかり入るばかりの、紫檀の櫃五つに、碁代、彈碁代、かさ高く入れたたり。すみ物どもうち具し給へり。又左の大殿よりもさまふ、碁代すみもの、御前の物、いと清らかに給へり。式部卿の宮、民部卿の殿よりも、さまふしつと奉り給へり。

かくて、中のおとどの南の廂あけわたして、御座ども敷きわたしたり。あるじのおとどの君出で給ひて、左衛門佐して、右大將、式部卿の宮の御方に申し奉り給ふ、正頼「今夜、いとさうくしく侍るべき。いともく畏くとも、渡りおはしましなむや。翁、此處ならば、舞ひて御覽せさせむ」と聞え給へれば、「いみじき見物侍るべかなり」とて皆おはしましぬれば、それより下はえ籠りおはせて、皆おはして竝み居給へり。この御前よりの事ども、みな源中納言殿し給へり。いと清らにして参りわたり給ふ。御酒しひ、物などまゐりて、中務の宮、ひとねたれ

〔語釋〕
〔一〕「御夜戸出姿」歎前の仲忠の姿をきかんとて怒ひ出て來りし時の事を言ふなるべし

〔三〕振りしめて

〔四〕賢忠

〔五〕あて宮

〔六〕末詳

〔考異〕
〔二〕みよーみにーみこ

物はき給へり。式部卿の宮には、草鞋の片足をなむ。それを、例のやうにはあらでうちひがみて兵部卿の宮、「源中納言のみよとて姿こそしどけなかりし。今宵は舞の師どもには見えじ」中納言、源如何なる折にか侍りけむ、良中將の朝臣は、下のはかまを著て、皆かいわぐみて走らるめりし。それも其の道の人として、裸鶴脛にても騒がれじや」正頼正頼が男どもは、例よりも装束うるはしくして、笏とりくびりてぞ、練り出でにたりし」民部卿の宮、「あはれ、宰相の朝臣世に交らばましかば、如何なる猿樂をして一日かあらまし」あるじのおとど、正頼宮にさふらふ者いかに思ふらむ。正頼をぞ恨むらむかし。先つ頃、まかでむと物せしをまかでさせねば、いみじう怨すらむかし」左のおとど、忠雅けに然思すらむ。母かたとひあれば、忠雅らが言ふことは、所謂うしのはしるぞかし」と宣へば、一度にほとと笑ふ。

斯うて、御あそびし給ふ。琵琶、式部卿の宮、箏の琴、左のおとど、中務の宮に

〔語釋〕
〔四〕木深くか
〔六〕仲忠に比敵すべしとの喩なりしかど
〔七〕「缺ず欲み給ふ」にてさくられたる盃を一つも辭せず飲むとての意歎

〔考異〕

〔一〕指貫に「に」にナシ

〔二〕覆ね著てーかさねて

〔三〕いみじくーいみじう

〔五〕とどめてーとめて

〔八〕とてーさて

〔九〕聞え給ふー宣ふ

〔一〇〕宿ー岩

〔一一〕松はー松の

倭琴、兵部卿の宮笙のふえ、中納言横笛、權中納言大篳篥とあはせて遊ばす。藤中納言、仲忠ひがみたる様なり」とと土器とりてまかでむとて、紫苑色の織物の指貫におなじ薄色の直衣、唐綾のかいねり覆ね著て出で給ふ。この頃例よりもかたち盛なり。下がさねの尻いと長くはらひ引きて、土器とりて出で給ふ。兵部卿の宮、「あな珍らしや。いみじくもこふかく籠られたりつるかな」とて目をとどめて、皆まもり給ふ。さらに難なき帝の御聲なり。源中納言なすらひたりと言ひしかど、今はいとこよなし。中納言、式部卿の宮に御土器まるり給ふ。宮、けちずのみたふとて、斯く聞え給ふ、

中納言

仲思いさやまた蔭は知られずひめ松は年へてながき色をとぞ思ふ

中務の宮

木高くてすどしき蔭にみやびとのまとるするまで生ひよ姫松
兵部卿の宮

〔考異〕
(一)さらでーまさで

心ゆくこよちこそすれ二葉なるまつの世々のみ思ひやられて

左のおとど、
思雅二葉よりおひならひつと姫松は枝をばさらで千代はすぎなん
藤大納言

(二)うきみにーうきみを
ーうききを

忠俊岩の上に今より根ざすいその松たよはうきみにありとたのまむ
右のおとど、

正頼年ふればかしらの雪はつもれども小松のかけも待ち出てしがな
右大將

(三)たのまむーだに見む

兼雅昔生ひの松にしならふものならばまだみどりこの頼もしきかな
民部卿

實正わかみどり二葉にみゆる姫松の嵐ふきたつ世をも見てしが
平中納言

〔語釋〕

(四)誤あるべし

正明末のよの遠くもあるかな千歳ふる松の二葉に見ゆるこよひは
源中納言

(六)青海波の前につけて
舞ふ曲

涼ひめ松をはやしと生ほすこの宿にいく度ちよを敷へ來ぬらむ
權中納言

〔考異〕
(一)見てしがー見てまし
(二)來ぬらむー來つらむ

仲澄みどり子のおほかる中に二葉よりよろづ世見ゆるやどのひめ松
これより下にあれど書かず。

(三)下にー下も

(五)いづちそのこなむーいつつ
いつちのこなむーいつつ
あのこなむ

かよる程に式部卿の宮、「事はじめとこそ言ふなれ。いづらそのこなむ」あるじの
おとど、「侍りかし」とて、輪臺を、景色ばかり立ちて舞ひ給へば、御前のつかさ
づかさのあそび人ども、男ども、樂奏しつと、琴ども弾きたてつと、一度にうつ物
の音にあはせて、その樂をする程に、三の宮、黒らかなるかいねり一襲はなだ

〔語釋〕
 (三)催馬樂「吾家」の句、
 「わいへんはとばり帳を
 もかけたれば大君來ませ
 聲にせむ御着は何よけむ
 云々」

(四)三の宮が式部卿中務
 宮の次に著座せる也

(五)誤あるべし

〔考異〕

(一)見たまひて一式部卿
 の宮

(二)の人カーナン

の綺の指貫、同じ直衣、蘇枋がさねの下襲奉りて、土器とりて、中務の宮に参り給ふ。御様、長そびやかに、氣高きものから、いと匂ひやかなるもてなし、いと心憎し。御年二十三。例ありとて、闕す、三たびばかり参り給ふ。これを見たまひて右のおとど、いとめでたし、誰の人か聲にせむと思す。左のおとど、忠雅御着に何よけむ」と、箏の琴にいとおもしろくかい弾き給ふ。式部卿の宮、われも思ほす事なれば、いとをかしと思して、うちほよ笑みて見給ふ。中務の宮、御土器とりて舞ひ給へり。右のおとどに参り給ふ。御子は、をち宮たちの御座の下につき給ひぬ。かくて御土器くだる程に、右のおとど、正頼「腰かどまりたる翁をのみ、かなてさせ給ひて、たどにてやは止み給ひなむする」と宣へば、源中納言立ちて舞ひ給ふ。上下かくおもしろし。かよる程に、四の宮、あからかなる綾搔練一かさね、青鈍のさしぬき、おなじ直衣、唐綾のやなぎがさね奉りて、土器とりて、兵部卿の宮に参り給ふ。これは、いと大きやかに、ふくらかに肥え給へるが、色

〔語釋〕

(一)誤あるべし

(三)東宮の弟

(四)季明

(五)實正

(六)清正

(八)東宮の弟

〔考異〕
 (一)聞召しとり聞召し
 つとり

(七)ものをしものナシ

白く、ものくしくおはす。これも聞召しとり給ひて、舞し給ひつゝ、源中納言に賜ふ。取り給ひて三の宮に又参り給ふ。宮はつどきて著き給ふ。これは内にぞおはする。年二十二。左のおとど、忠雅「この順の舞は、知りたらむに隨ひて、此處ならぬをもあさまじ、たど一手あそばさせむ」と宣へば、御太郎の大納言立ちて、萬歳樂を舞ひ給ふ。樂おもしろくす。右のおとど、正頼「萬歳樂は、人のさして心なりける。わいても、鶴の命、老も見えじ」と宣ふ。六の宮、紅の搔練のいと濃き一かさね、櫻色の同じ直衣、指貫、えび染の下がさね奉りて、土器取りて、左のおとどに参り給ふを見れば、いと小さくひぢよかに、ふくらかに、愛敬つき給へり。御年二十。左のおほ殿にぞおはする。例の闕すに参り給ひて、大納言に賜ふ。又それ更に参り給ふ。これも舞ひ給ひぬ。藤宰相、「この君も舞ひ給ふものを」とて猿樂する人にて龜舞をす。上下一度にほとと笑ふ。人の御目ども醒めて、いと興ありと思ほす。八の宮は、淺黄のなほし、指貫、いまやう色の御衣、櫻がさね

(語釋)
(二)孔雀の服装したる舞
手也下の鶴も同じ

(三)正頼

(考異)
(一)舞ひ給ふーし給ふ

奉りて、左のおとどに土器参り給ふを見れば、いとあてにきびはにて、何心も
なき顔し給ふ。御年十七。左のおとどに、「闕す多くもな聞食しそ」とて氣色ばか
りまるり給ふ。とり給ひて、あざれ舞しつる宰相に賜ふ。賜はりて又舞ひあへる
程に右大將の君、兼雅、兼雅は、これならぬ手をば知らぬ」とて、鳥の舞を氣色ばか
り舞ひ給ふ程に、右近の幄より孔雀をいだす。左近の幄よりは鶴を出だして、そ
の樂を上下ゆすりてすれば、鳥もをれかへりて舞ふにはやされて、このおとどその
舞をし出で給ふほどに、女御の君の後にうまれ給ひし十の御子、四つばかりにて、
御髪ふりわけにて、白く美しけに肥えて、御衣は濃き綾のうちき、あはせの袴、
たすきがけにて、葡萄染の綺の直衣著て、土器とりて出で給ふ。祖父おとど、兄
宮たち、「誰にぞく」と問ひ給ふに、十宮「あらず」とて右大將の御座におはして
奉り給へば、ついる給ひてかき抱きて、膝にする奉り給ひて、土器を見給へ
ば女御の君の御手にて、

(語釋)
(二)仁壽殿をいふなるべ
し「うち」衍歟

(三)「えたべじ」なるべ
し

(四)誤あるべし

(五)「書きつくる御硯の」
なるべし

(考異)
(一)例より一例のより

仁壽殿一夜だに久してふなるあしたづのまにくく見ゆる千歳なになり
と例よりもめでたく書き給へり。大將いと珍らしく、今年二十年あまりといふに、
この御手を見るかな、いみじうかしこくもなりけるかな、と見給ひ、あはれに昔
思ほゆれば涙も落ちぬべけれど、かしこく見入れて、懐にさし入れ給へば、十宮「い
な。これに御酒入れてまるれとこそ、うち上は宣ひつれ」とて肌をさがし給へば、
兼雅「かく墨つきて汚けなるはつたえじ。これこそ白けれ」とて、御卓なる様器を
とりかへて、彼は隠し給へば、人々、「例ならず、など收められぬる」とさわぎ笑
ふ。若宮様器に、人々御つきいれさせ給ふ。兼雅「多しや」ときこえ給へど、十宮「い
なく」とてこほさでまるり給ふ。とり給ひて、宮を抱きながら、人々にはまる
り給ふ。かくて、順の和歌、行政の中將の書きつく、御硯の近きを、さらぬ様に
て、筆をとり給ひて、おほん菓物の下なる濱木綿に、かく書き給ふ。
あな珍らしや。

〔語釋〕
 (三) 仲忠をいふ歟
 (九) 産婦が蒜を用ふるなるべし

(二〇) 不審

〔考異〕

(一) 萬代は一萬代に

(二) ことを一ことは

(四) とくーとて

(五) 給ふ所に一給へるに

(六) 一日のーつもの

(七) ちもかりーちもしろかり

(八) 三ことやーまことや

(一一) たどーナシ

萬代はまにくみえむあしたづも古にしことを忘れやはする

とて奉り給へば、宮入り給ひぬ。左のおとど、季明(二)かく老學問みなせらるゝ中

に、なか衛門督の、いとまめやかにとくをさめられけむ。かうだにみだれ給ふ(三)

所に、あふこそまだしからめ「右のおとど、正類(四)何ぞは、一日の役いとおもかり(五)

き。さてもぞまことや」中務の宮、「なかはさのみ座のいたく下りたる。今夜は(六)

召し上げよや」父おとど、兼雅「早まかり著け」と宣ふ。寶子に殿上人の座に居給(七)

へり。式部卿の宮、「いまは、御簾のうちより、流の御土器賜はらばや。かの蒜(八)

さき御肴こそ、いと給べまほしけれ」左のおとど、忠雅「たどまさ、かねずみ物し(九)

給ふらむ。たどさし入れ給へや」中務の宮、「おとどの宣はねども、心にもあらず」(一〇)

兵部卿宮、さばかり高かりし御聲をなど思ひつよ、これかれ宣ふ。

ほのくくとあけ離るゝ程に、良中將下りて、陵王ををれかへり、無き手を舞ふ。

そこらの人、驚くこと限なし。「これはまだ世に無かりつる手かな。如何にしつる

〔語釋〕
 (六) 朝臣等唐樂しつゝの
 意歟

〔考異〕

(一) ぞやーやーナシ

(二) 中納言かづけ物ー中
 納言ちなにかづけ物

(三) とくーとて

(四) 人こそ一人々歟

(五) より上ー以上

(七) 二つをーをナシ

ことぞや。宮あこ君の御賀の舞は、これを傳へたるにこそありけれ。何處よりい

かでならむと思ひしは」とて騒ぐ程に、殿の君だち、かづけ物とりつよ出で給へ(二)

り。中納言、宮たち、一度に取りかづけ給ふ。そのかづけ物どもは、女の装束、

ちごの衣、襦袢添へてなり。源氏の(三)中納言、かづけ物とく取りて、舞する中將に、

砂の上に下りてかづけ給ふ様、いとなまめきてめでたし。つかさぐの(四)幄の人

こそ、「そこら興ありつる事よりも、これこそめでたけれ」など言ふ。かくてみな

人、三位中將より上には、白きうちき一襲、あはせのはかま一具、さらぬ四位、

五位には、白きうちき一襲、六位には單襲、しらはり、下仕には腰差上下の(五)もい

とをかしくてあり。

上の御遊は歇みて、つかさぐのあそら、からがくしつよ孔雀、鶴を舞はせて御

覽ぜさす。御簾のうちにもみな立騒ぎ見給ふ。内より黄金を、柑子ばかり丸かし(六)

て、(七)小さい銀の魚二つを出だし給へれば、式部卿の宮とりて賜ふ。孔雀は黄金の

〔語釋〕
〔三〕催馬樂「酒給」のはじめの句

〔四〕女一宮

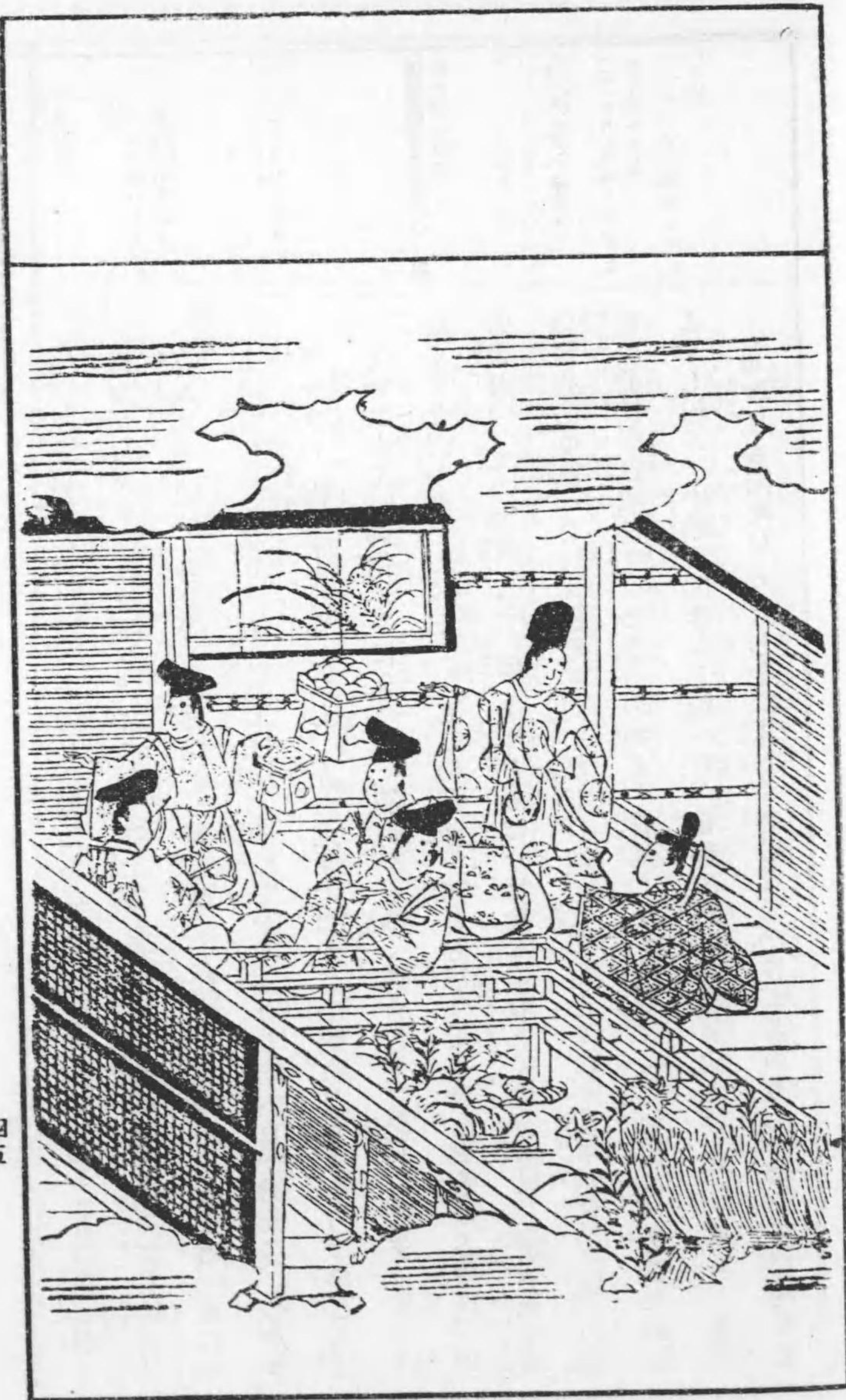
〔五〕「ひとところ」は「日頃」の誤なるべし

〔六〕誤あるべし

〔考異〕
〔一〕魚を「魚ども

〔二〕例ならず酔ひ給ひてしていのごと酔ひて

柑子をくひ、鶴どもは魚をくひて、舞ふこと限なし。孔雀に、緑の御衣、うちき、鶴には白きあやの、兒のおほん單襲（二）一くだりかづけ給ふ。かくて皆人、例ならず酔ひ給ひて、脚をさかさまに、倒れよろほひつよ、御方々におはしまさふ。おのおの、御子ども、御供の人、雲のごと付きて入り給ふ。あるじのおとどの御後に、いみじく多く立ち入り給ふ。右大將よろほひて入り給へば、中納言しどももどろに酔ひて、西の御方におほん送して、仲忠「酒をたうべてたべ酔ひて」といと面白き聲にうたひて、入りおはすれば、女御君宮かき抱きて御局に入り給ひぬ。中納言入りおはして、宮の、鳥の舞見給ふとて、御帳の柱をおさへて立ち給へるを、仲忠「あな見苦し。何ぞのやぶれ子持か物は見る」とて引きする奉りて、仲忠「ひとところ、きたない物をだに引き解かざりつる。今だに」とてひとところに臥し給ひぬ。かんのおとども、大將のたよこもり給へるとぶらはむとて、御局へおはしぬ。宮の御乳母と内侍のすけとぞ、御装束とりかづけなどしてさふらふ。



〔語釋〕

〔四〕忠俊歎

〔考異〕

〔一〕内にはめのと一内にはうんのめのとども

〔二〕やうなりーやうに

〔三〕贈物を方々に頒つ。兼雅夫婦の物語。

〔三〕取うてー取りて

〔五〕のうまるーのぞまるーのみまる

〔畫詞〕

御帳の内には、めのと、御たちなどふさにさふらふ。こよは南面。皆ながら著き並み給へり。宮たち、御土器とりて出で給へり。人々舞し給ふ。客人たち同じうちきの上に著つと、御烏帽子し給ひて、御子二ところ、左右の大臣同じやうなり。納言までは同じ姿にてかうぶりし給へり。御前に、つかさづかさの幄ども打ちわたし、左右近衛のつかさの樂所どももあり。卓ども立てわたし、御物ふさにまゐり、籠物など多く置きたり。鳥ども舞す。

かくて女御の君、よべこよかしこの御前の物ども取うてさせて御覽する中に、左の大殿の、沈の衝重十二、銀の坏どもは、皆かんのおとどの御方に、權大納言殿の淺香の衝重、おほん毬など同じ數なるは、北のおとどに、源中納言の銀の衝重、蘇枋の長櫃にするたる内の物ども皆具して、藤壺に奉れ給ふ。酔ひたれどよくし給ふ。中納言聞き臥し給へり。女御の君御文書き給ふ。

仁壽昨日も聞えむとせしを、怪しく酔ひて、のうまるめりしかば、後にとてな

〔語釋〕

〔一〕あて宮の贈物をいふ

〔二〕女一宮にあやかりて又とく皇子を生み給ふ様にとて之を奉ると也

〔五〕仁壽殿の手

〔考異〕

〔三〕とてーとぞ

〔四〕思ひー思う

む。いと煩はしけなりしわざを、一所いかでし給ひけむとなむ。さてはあえものにし給ひて、かやうなる事また疾くをとてなむ。見よけならぬも、數多あるは憎からぬものと、今宵こそ見給へつれ。

とて奉れ給ふ。藤壺見給ひて、あて宮「これこそ煩はしけなりけれ」とて御返

あて宮昨日思はずなりしかば、うしろめたくやとて。いでや、なほこそ聞えもあなれ。うちにも有りがたく珍しくし給ふことの様々に侍りけるに、離れ侍りて、承るにこそ、生けるかひなく思ひ給へ歎かるれ。さてこれは、思ほえず月さかりなる心地してなむ。憎からずみ給へりけむ、何れなりけむ。

と白き薄様一かさねに、いとめでたく書き給へり。三の宮とり給ひて、忠康よの御手や。その御手をこそ、よしと、世人も思ひためれど、これはたこよなかめり。かよる折ならでは心と得見ずなりにしはや。人に宣はすと見ましかばつらくもあらまし」女御の君、仁壽かよる習のあるまじきことなればにこそありけめ」宮、

〔語釋〕
(二)「人の」は「日の」歟

(三)女一

(四)正頼

(五)權中納言忠澄

(六)「御なからひを」なるべし

〔考異〕
(一)起き出給ひ一ナシ

夜もあけぬればつとめて、中納言、仲忠「これ昨日か今日か」と宣へば、人々いみじう笑ふ。驚きて起き出給ひ、仲忠「怪しくもありけるかな」とて物急ぎてまゐらす。かくてその日は九日なり。仲忠「かねて仕うまつる人の延びぬべきに、その日ばかり、わざとにはあらで、たゞ御肴ばかりの設して、内外のこれかれの御料など設けよ。この殿にもたゞ氣色ばかり」と宣へりければ、「物宣はぬ人のかく宣ふ」とて、よくはあらねど設けたり。夜さりつ方、かんのおとどの御髪梳りて、かいねりの御衣、御こうちぎなど奉りてわたり給へり。女御の君も、さておはしましたり。宮も起きておはします。東面の廂に御座敷きて、御褥もうち置きたり。簀子にも御座敷きたり。母屋の隅に添へて、御几帳をぞ立てわたしたりける。中納言の君、北のおとどに、「わたらせ給ひなむや」と聞え給へりければ、おとどおはしたり。宮たち例のごとおはす。殿の君たち、中納言よりはじめて、皆おはす。右のおとど三條殿に、正頼「おはしませむや。今はかゝる御ならひを」とて君

〔考異〕
(一)折敷六つづつ一折敷
御前ごとに六つづつ

だちして、かの御消息聞え給へれば、大將殿おはしたり。正頼「かしこく」とて内に入れ奉りつ。かゝる程に、中納言のまうけさせ給へりける御前の物ども、みな参りぬ。宮の御前には、白瑠璃の衝重六つ、下には銀のつき、上には瑠璃の坏などするて参りたり。内のものども、透きて見ゆめり。女御の君かんのおとどには、沈の折敷六つづつ、男宮たちには、淺香の折敷六つづつまるれり。簀子に中納言ものし給ふ。その御前には、蘇枋の卓二つ、上達部には二つ、たゞ人には一つまるれり。これは他人なし。殿の君たちの限なり。あるじのおとど、正頼「何方のぞ。中納言宣へや。誰をしるべにてか、正頼も侍らむ」中納言はさふらひてければ、あるじのおとどの、「仰ごとして請じ入れ給へ」と父おとどに申し給へば、兼雅「早まかり入れ」と宣ふ。あるじのおとど、正頼「忠澄の朝臣も今宵は猶まかり入れ」と宣へば二所ながら入りて居給ひぬ。

(語釋)
(一)梨壺

(二)魚を火にあぶりて乾したるもの
(四)「ことや」は「まことや」の誤なるべし

(考異)
(三)唐の—かうの

かよる程に、内裏の後の宮より例の銀の衝重十二、同じおほん坏どもして、上に唐綾のおほひしたり。折櫃、すみもの、いと清らにて多かり。中納言の御もとに御消息して奉り給へり。又東宮にさふらひ給ふ中納言の妹のもとよりも、物一斗ばかり入るかねの甕二つに、一つには蜜、一つには千歳汁入れて、黄ばみたる色紙おほひて、荷ひて、二尺ばかりの銀の鯉二つ、生きたるやうに造りなしたる、紅葉の造り枝に付れたり。紺瑠璃の大きやかなる餌袋三つに、銀の錢一餌袋、黒方を、ひほしのやうにしなして一餌袋、沈を小鳥のやうに造りなして一餌袋。鳥の毛をはぎあつめて、あをき薄様一かさねづつおほひて結ひたり。おほん文は、唐の紫の薄様一かさねに包みて、紫苑の造り枝につけたり。中納言見給へば、

梨壺 覺束なきままでなりにけるをなむ。久しう見え給はぬを、あやしく思ひつるに、たゞ昨日なむ理なるやうにてと承りし。ことやこの鳥は、



紫ののべのゆかりを君により草の原をももとのめつるかな
とく承らましかば、大鳥もありなましもものを。

(八語釋)
(一) 廳景殿、忠雅の長女
(四) 菜

(考異)
(二) 二斗入る―二斗ばかり入る

(三) して―そへて

(五) 給ひつる―給へる

と聞え給へり。大將のおとど、兼雅、何處よりぞや。いと艶なる文かな」中納言、仲忠「梨壺よりなり」父おとど、兼雅「いで、かれ見むや」と宣ひて、見給ひて、兼雅「如何におよすけて宣ひたりや」など宣ふほどに、左の大殿の大君、東宮にさふらひ給ふが許より、物二斗入るばかりの銀の桶二つ、同じ柄杓して、白き御粥一桶、銀の盃八つに、御粥のあはせ、魚の四種、精進の四種、大きな沈の折櫃にさし入れて、黄金の土器の大きな、小き、銀の箸あまた添へて奉り給へり。これも、中納言に御消息あり。みな御前に取りするたり。おとどたち、興じ給ひて、先この粥すよりてむ」とて、添へたる坏どもによそひて、皆まるる。かくて、梨壺の御かへり聞え給ふ。

仲忠 承りぬ。久しう参らで思ひ給ひつるになむ。昨日きこしめしきとは、誰か

は然りし。大鳥の上にはや侍りけむ。まめやかには、この御方あたりに聞召さずなりにつるこそ、疎々しけれ。

野べにすむ村とりよりも一つがひ水なる鷗めづらしきかな
とて、皆、物かづきをしたる者に祿など給ひつと、御消息ありしには御返事しつ

つ奉り給ひつ。

斯うて、今夜は、唐綾のさしぬき、直衣赤らかなる綾のうちき一襲、宮たちにも

こと人も著たまへり。南の方に寄りて、北面に宮たち、西面に向きておとどたち、

母屋の隅の外に、南東にうちそばみて中納言どのの御たち、御帳の内にはやんご

となき上臈の御許人などさふらふ。御簾の外には、左大辨宰相中將をはじめ奉

り、あるじの君たち。この程は大人をば召しつかひ給はねば、童のみなり。大人

召し出づれど、いとく参りがたくす。中納言、仲忠「例より見奉らぬ人もおは

します」など宣へば、臺盤所より参る。おとな四人、童四人、大人は赤色の唐衣、

(一) 風俗歌「大鳥のはねに白き霜降り誰か然言ふ千鳥ぞ然言ふ云々」
(三) 物を持来りし使には
(七) 諸澄祐澄

(考異)

(二) 鷗―かも

(四) 御返事しつと奉り給ひつ―御かへりしつと奉り給ひぬ

(五) 北面―北向

(六) 西面に向きて―西面母屋にむきて

(八) いとく―いと

〔考異〕
 (一)様どもなりーナン
 (二)硯の箱の蓋にー硯箱の蓋にー硯の蓋に

(三)「したまひ給ひつちめ」
 按「したまひつちめ」歟、
 「したまひ給ふちめ」とか
 きたるもあり

(四)心ばへー「ばへーナン

(五)ごとくにーどもに

(六)の具ーナン

綾のすり裳、綾かいねりのうちき著たり。かたち清けにらうくしき人様どもなり。五位ばかりの女どもなり。わらはも、赤色の五重襲の上のきぬ、繖のうへのはかま、綾かいねりの袖、三重襲のはかま著たり。髪長にあまり、姿をかしけなり。

かくて御汁物、御酒たびく参りぬ。中納言の君、「紙もがな」と宣へば、黄ばみたる色紙一卷、白き色紙一卷、硯の箱の蓋に入れて出だされたり。かの梨壺の御餌袋ども、召しよせてあけて見給ふ。主のおとど、正頼「いと珍らしうし給へる物どもかな」と宣ふ。右大將のおとど、兼雅「あはれ如何にして侍らむ。母宮こそはしたまひ給ひつちめ。いと物清らに心ばへおはせし人ぞかし」と見給ふ。斯くて、黄ばみたる一かさねに黄金の錢一包つとみ、白き色紙に銀の錢一包つとみ、白き色紙をば外にうるはしく出ださせ給ひ、黄ばみたるをばおとどたちの御前ごとに参り給ひつ。碁雙六の具参りたり。あるじのおとど、正頼「魚鳥、こよには更に無

〔語釋〕
 (一)未詳

(二)只の攤に對して東攤といふものあるか

(六)「このだけは」歟

(八)「給へば」は「給ひ」歟

(一〇)女一宮

〔考異〕
 (一)碁ー攤

(四)あづまだーあづまびーあづまごと

(五)こものーたゞの

(七)ゆうそうーいふそう

(九)御里人ー御前

(一一)はたーは

し」と宣へば、御簾の内にさし入れ給ひつ。かくて内外碁うち給ひて、御土器たびくになりて、あぶらよき程にさし給ひつ。あづまだなど、童、大人うつ。このごは、ゆうそう多くうち取りたりけるが、ひほし一つづつぞ、女房たちは賜はりける。中納言の君、宮たちは、皆うち入れつ。かよる程に、夜いたく更けぬ。中納言の君装束かれたる御琴三つ、ふえ三つ、とり出でさせ給ひつ。御笛も、一つ聲に調べ給ひて、琴に手一つづつ弾き給ふ。その音更にいふべきにもあらず。かく弾き試みて、わが御琴は、仲思「これ内わたりに」とてさし入れ給へば、「琵琶は忍びて宮わたりに、箏の琴は御里人に」と言ひつと入るれば君たち取りて参れば、女御の君、仁壽「あなうたてや。如何なるべき事にか」かんのおとど、俊隆女「さ聞ゆるごとは侍らぬものを」とて箏の琴をいとおもしろく弾き給ふ。しばし弾かせ奉り給ひて女御の君は、かの御琴をいとをかしくかき合せ給ふ。宮おこし奉り給へば、琵琶かきあはせ給ふ。いと面白し。琵琶はたな

(語釋)
(一)仲忠自身

(二)忠澄

(四)仲忠

(五)俊隆女

(考異)

(三)しぼくしぼし

(六)然あらざらむ一然せざらむ

ほ上手なりと聞召して、しばし弾かせ奉りて、横笛はみづから、笙の笛は彈正の宮、箏築は權中納言にさし奉り給ふ。中納言、笛をいと音高く吹き立てたり。他はしばく合はせて吹かず。かたぐの君たち、「これには聞えぬ笛の音かな。左衛門督にやあらむ。聞かばや。三條の北の方のわざをせさすらむ。さても、人々もあそび給ふかな」など宣ふ中に、良中將までひ出で源中納言に、行政いざ給へ、これに。此處にいとみじき物の音どもかな」とて萎えたる狩衣など著ていまして、東の對の隅と御格子との間に入り立ち給ひぬ。琴笛ども吹きあはせ給ひて、いみじくあそび給ふ。かくれ給ひて源中納言、遠いみじき横笛の音かな。箏のことは北の方のにやあらむ。いまだ聞えぬ聲す。この主、何心ありてせぬわざわなくし出で給ふらむ」中將、行政如何は然あらざらむ。物の上手は、手の至らぬばかりの憂侍らじ。琴はかよる御中にて、留まるべければにこそ侍るめれ。かくし給はずば、内裏の聞召さむにもいと物の榮なからむ」とて聞きさわぐ程に、

あそびし止みぬ。

右大將いと快く酔ひ給ひて、兼雅など今宵は、宮も出で給はぬ。さうぐし」と宣へば、宰相の君といふして、女「たど今寐てを」など聞えさせ給へれば、兼雅唐土よりは近かんめれば通辭なくとも承りぬなむ。この朝臣どもの痴者や、遊びはべるとて、制して賜はねば、まだこそ給へ酔はね。いかで御簾のうちの御土器賜はらむ」と聞え給へば宮の君がいらへ、「参り侍らむかし」大將、兼雅さかの供養は否や」など宣ふ程に、大きな土器をとりて、中納言あるじのおとどに参り給ふとて、

おとど、
仲忠みや濱の洲崎におりて鶴のこによる波たちぬきしを見せばや
おとど、
正頼もろともに洲崎の鶴しおいたらばのどけき岸もなかなからむ
とて右大將に参り給ふ。とり給ひて、

(語釋)
(三)取次を通辭と戯れていふ也

(四)「ぬ」衍なるべし

(五)酒をくれぬ故

(考異)

(一)など一などか

(二)寐てを「を」ナシ

(六)賜はねば一たばねば

(七)さかの一さるの

(八)などか一なにか

(一) 帥の宮

(二) 女一宮

(三) 女二宮

兼雅立ち出てぞ千歳も見えむ瀧の洲にかひこの見ゆる鶴は幾世ぞ

彈正の宮に奉り給ふ程に、父おとど、兼雅中納言召してきたれ」といと高く言

ふ。四の宮、「いと羨まし」と宣へば、仲思申さるよことの侍らば」と宣ふ。父お

とどうち笑ひ給ひて、兼雅「これは望む所なり。猶希有なりや」とて今一度まゐり

給ひぬ。さて宮に参り給へば、宮、

女二かへりてぞ千歳も見るべきかひの中にこもれる鶴は幾世経べきぞ

四の宮、

帥宮東路のかひのうちなる鶴なれやゆき歸りつと千歳を見るべき

六の宮、

はるかにも思ほゆるかな行きかへり千歳みるべき鶴の雛鳥

八の宮、

みづの色はいくたびすむと川の洲にかへれる鶴の行く末は見む

権中納言、

思澄洲にすめば底にも千歳ある鶴の流れてゆけど盡きずもあるかな

左大辨

諸澄まことにや千歳を経るとながき世をおきつと霜の鶴の世は見む

宰相中將、

水底の騒がぬ洲にぞ鶴のこのみづなる色に千世もすむらむ

かくて源中納言の奉り給へりしかづけ物どものいまだ使はれぬを、女御の君取

り出で給ひて、御簾のもととなる人々に一くだりづつ持たせて、うちそよめかせ給

へば、中納言内にやをら手をさし入れて取りつと、まづ主のおとどよりはじめ奉

りて、つぎくかづけ奉り給ふ。左大辨宰相中將までは女のおよそひ、それよ

り下は白張一かさね、はかま一くだりづつ。宮あこ君今はかうぶりし給ひて六位

なれば、白張一かさねかづけ給ふ。

(一) 色にちむそこれ
千世も見てしが

(二) どもの一ども一など

(三) グフーナシ

〔畫詞〕

ことは中のおとどの東面。宮たち四所なほしすがたにて参り給へり。

これは右のおとど、かたちいとあてに物々しく清らにて、愛敬づき給へり。御年五十四。されど、いと若く見え給ふ。右大將、色あひもてなし、中納言に似給へり。けぢかく、にほひやかに、清らなり。年四十二。權中納言いと清けなり。

「この鯉は生きたる様なるものかな。ほとく庵丁望まむとぞ思へる」と宣ふ。御産養のものあり。粥桶の蓋には、生絹の絲の赤みたるしりふたといふもの

の様にしなして覆ひたり。これは北面。臺盤所。後の宮より奉り給へりつる衝重、竝べするたり。ことは北のおとど。女御の君、内侍のかんのおとど、御

たちの中に物ども賜ふ。かくて又の日の晝つ方になりて、御乳付かへり給ふ。贈物いと清らにし給ふ。内侍のかんのものもかへり給ひなどして、女御の君、宮などに聞え給ふ、仁壽「かく侍りならひて、如何につれぐに思さむ。しばし斯くてもと思ひ給ふれど、旅住

かくて又の日の晝つ方になりて、御乳付かへり給ふ。贈物いと清らにし給ふ。内侍のかんのものもかへり給ひなどして、女御の君、宮などに聞え給ふ、仁壽「かく侍りならひて、如何につれぐに思さむ。しばし斯くてもと思ひ給ふれど、旅住

(語釋) (二)しりふたは「わらふた」の誤歟

(三)女一宮

(考異)

(一)四十二―四十三

(四)ならひて―ならひては

(五)と思ひ―とも思ひ

④産屋の事によりて集りし人々退散。贈物、産屋の物を帝に奉る。内侍のすり仲忠夫婦の前にて當代の男女を計す。

(語釋) (一)やがて又退出して來給

(二)「大將殿の御門へ」なるべし

くるしう侍ればなむ」大宮、「見たてまつらではえ侍らじ。今又疾くも」とて、右のおとどより、うるはしき絹百疋、御たちの中に出ださせ給ふ。かくてわたり給ふ。御前大將殿、中納言殿とりあはせて、四位五位いと多かり。大將殿門へ行き著きたれば、御車どもはこの殿の御門にあり。近さは一町あまりばかりあり。中納言も御送し給ふ。かくてわたり給ひぬる後、あるじのおとど、いみじう名高き乗馬二つ、鷹二つ、大將殿に奉れ給ふ。御消息、

正頼「これは、御供にさふらはせむとしつるを、急がせてわたり給ひにければなむ。又北のおとどより、蒔繪の御衣櫃五かけ、蘇枋の臺、枋さして、きぬ二かけ、唐綾の絢房かけ、えび一つ、丁子一つ入れて、大宮の御文、かんのおとどの御許に、大宮近くものし給ひつるほどにだに、聞えまほしかりつるを、騒がしくのみありつればなむ。いと嬉しく、残り少く思ほえつるを、ゆく先長くなる心地して、

(語釋)
(五)仲忠が送りゆきて
まだ歸らぬ中に此の使が
來たる也

(考異)
(一)留守の—ナシ

(二)なむ—ナシ

(三)ども—ナシ

(四)せまほしくを—「を」
ナシ

物の音のいともく哀なるをなむ、蓬萊といふなる所は近かりけると思ふ。

さてこれは留守の人々に賜へとてなむ。

などあり。宮の御方よりは、後の宮よりありし衝重のうちの物入れながら、蒔繪

の置口の衣篋に、夏冬の御装束二よそひづつ、夜の二かさね、同じ御髪箱四つ、

一つには沈、一つには黄金、一つには瑠璃の壺、四つにあはせ薰物入れて、今

一つには黄金のつほに薬ども入れて、麝香一臍づつ入る、黄金のつほ十ずるて、

清らなる包どもにつよみて、宮の御消息にて、陸奥紙に女御かき給ふ。

女みづから聞えむとすれど、手振はれてなむ。日頃はいと頼もしく覺えつる

を、今よりはいとつれづれになむ。物覺えず、苦しかりし心地、すなはちや

め給ひてし物の音の、いと忘れ難さに、慕ひもせまほしくをとなむ。これは

犬の尿に濡れ給ひぬめるを、脱ぎかへ給へとてなむ。

とあり。中納言まだものし給ふほどにあり。北の方の、女御の御文見給ふを中納言

(語釋)

(一)「見給へね」なるべし

(二)先日わが見し藤壺の文は

(六)后宮と仁壽殿との中は

(二〇)仁壽殿

(二一)東宮が

(考異)
(三)見給へりしは—見給へりしかば

(四)悉く—悉くも

(五)かな—よき

(七)こそは—「は」ナシ

(八)ちと—ナシ

(九)事々しく—事々しく
(一〇)何心に—何心と—
何心も

も、仲忠「まだこそ見給はね」とて見給ふ。仲忠「これもいとよき御手にこそ」父お

とど、兼雅「昔より名取り給ひつる上手にて、藤壺の物せしに劣らざるらむ」中納

言、仲忠「一日見給へりしは、これに勝りてこそ侍りしか」など宣ふ。奉り給へ

る物ども、御前に並めする御馬どもひかせて見給ひて、おとど、兼雅「煩はしく、疎

からむ人の様にもはた、後の宮よりも、悉くせさせ給へりけるかな。御息所の御

中は、よろしくもあらぬを、そこによりてせさせ給へるにこそはあらめ」中納言、

仲忠「仲忠が許になむ御消息聞え給へることなどあまた侍りき」おとど、兼雅「いと

煩はしう、人々の事々しくし給へるこそいとほしけれ」中納言、仲忠「いとかめ

しきこと、多くし給へりつるかな。彼處にも、立たむ月ばかりにはかゝる事は侍

るべかなるを、訪はではえ侍らじ。そが中にも、梨壺のいとあはれにて訪はせ給

へりしこそ、いかでなりけむと見給へりしが」おとど、兼雅「そがいと哀なりしを

ぞ見しや。其處をばよしとも宣はじを、宮何心に思ひてし出し給へりけむ。宮

〔語釋〕
〔一〕引張つて歸る人、兼雅をいふ

〔三〕留守の人々に賜へとありし返事也

〔考異〕
〔二〕と一とま

の御心いかでかはありけむ」中納言、仲忠「時々参り侍る。更にさる御氣色もなく、御心うつくしくなむ、御前に召して宣はする」おとど、兼雅「猶人はさふらふや。如何に思すらん、つよましかりつるを、よべこそいと哀に覺えしか」と宣ふ。北の方大宮の御返きこえ給ふ。

俊隆女かしこまりて承りぬ。しばしもさふらはむと思ひ給へるを、むづかしきひきさけ人の急ぎ侍りつればなん。いとあはれなる人も、見奉らではおほつかなく侍るべければ、いとむづかしきまでなむ、参り來べき。さてこれは、宿守のぞむ人おほく侍るべかめる。まことや「山ちかく」と宣はせたるは鹿の音にや侍りつらむ。

と聞えさせ給ふ。女御の君の御返も、かやうになむ。御使どもなんどに、かつけ物、祿など賜ひて御返聞え給ひつ。中納言、「今彼處にもさふらはむ」などとしてかへり給ひぬ。

〔語釋〕
〔一〕「大將殿の」衍文なるべし、この女御は仁壽殿なり
〔五〕河内の交野は當時の御獵地なり
〔七〕鏝のやうにこしらへたる意歟

〔考異〕
〔二〕供御を「を」ナシ
〔三〕聞えず―聞えずも
〔四〕給ひて―給へ
〔六〕かひ―ひつ

大將殿の女御の君、梨壺より奉れ給ひし黄金の甕に、供御を入れかへて、それに添へたりし鯉、小鳥、ひほし、餌袋に入れながら、藤壺より奉れ給へりし雉子そへて、内裏に奉れ給ふとて、志ありて仕うまつる鞆負の乳母といふが許に御文つかはす。

仁壽日頃物さわがしくて聞えずなりにければ、などかそれよりも訪ひ給はぬ。さてこれは、子持の御残り物なり。いとさむき頃なめるを、風もやらひ給へとてなむ。この雉子などは、上にまゐらせ給ひて、交野にも御覽じくらべさせ給へ。とて、乳母のもとには、沈のたかつき五つ、銀のつほの小きに、黒方入れ、蜜入れたる黄金のかひ五つばかり、沈のかつほ造りにしたる一包、青き色紙どもにつつみて、五葉につけて奉り給へれば、乳母たち、臺盤所にさふらふ折にて、見れば、こと命婦たち、「何處よりあるぞ。興ある物どもかな」と言ひさわぐ。乳母、「仁壽殿の女御の君の女一の宮の御産屋の残り物とて賜へるぞや」とて引き開け

〔語釋〕
(一)「ちもとたちは」歟

(二)賜はせての意歟

〔考異〕
(三)様々に―いと様々に

(四)なむ―ナシ

つよ見て、乳母「いとをかしくしたりける物どもかな。理ぞや、内侍のかんの君の御産屋の物、いかでかは斯からざらむ」など言ひあへり。靱負の乳母、「おとどたちは、この乾物を一きりづつうち割り給へ」とて、「他物は風薬にせむ」とて取りつ。

かくて奉れ給へるもの、御文などもて参りて御覽せさせば上御覽じて、朱雀「わざと麗しくしたりける物どもかな。靱負が語りつらむは何事ぞ」と宣ふ。靱負「このかつほづくりをたばはせて切り侍りてこれかれにたばはせつ」と申す。朱雀「様にかしくしたりける物どもかな」と宣ひて、御袋は後の宮に、朱雀「女一の宮の残り物とてものし給へるなり」とて奉れ給ひつ。御雉子などは、この頃御子産み給へる、時の更衣の御許に奉り給へり。朱雀「御文はわれ書かむ」と宣ひて、朱雀「これより聞えむとしつる程になむ、靱負がもとに宣へるを、今は参り給ひねかし。世の中のはかなくのみ覺ゆるを、御子たちをしばく見ぬなむ。

〔評釋〕
(一)女一宮

〔考異〕
(二)つらにぞ―つらき心に

(三)これをこそ―これこそ

参り給はむ時は、御子たち、女御子、ゐて参り給へ。かの子持も、久しくなりにけりや。おとなしくなりたらむこそいぶかしけれ。まことや交野の鳥のつらにぞなさるよか。されど、これをこそ。とて、

朱雀「餘所ながらなかよどみする淀川にありけるこひをひとつ見るかななほ疾くを。」

と宣へり。乳母のは、

乳母かしこまりて承りぬ。みづからも参りて聞えさせむと思ふ給へつるを、御あえ物のゆよしき程に、すぐし侍るとてなむ。賜はせつる風薬なむまうけまほしく侍りき。御消息、斯くなむと奏し侍りつれば、御時よく御覽じて、御文侍り。他事は、みづから聞えさせむ。

と聞えたり。女御の君見給ひて、仁壽「内裏よりかくなむ宣はせたる」とて一の宮

〔語釋〕
(一)女一を妻内せしめん
(二)仲忠との婚姻は

(四)頂戴す

〔考異〕
(二)ころよくころよく

(五)宮の人若く一宮の御人なるに若く

(六)生みれ一生み給へる

(七)なりーにてあり

に奉り給ふ。中納言見給ひて、仲忠「けにいかで参らせ奉らむ。こよろよく直り給ひなば参り給へかし」宮、「女宮」あな恥かし。さらぬ時だにつれくとまもり給ふものを、今はいかでか見え奉らむ」きみ、仲忠「過やはし給ひつる。御心とありしことかは。あなあぢきな御物恥や。仲忠をも、参る時は、御前に召して、さぞ御覽するや。いかに思召すにかあらむ、うちほとゑませ給ふ時多けれど、つれなくもてなしてぞ候ふや」など聞え給ふ。

御座所も、奥なる所も、照りかどやきて見ゆる。御調度など更なり。御産屋どもはみな人おろす。御帳のかたびら、御衣どもも、よきは内侍のすけ、さらぬ物ども、一つづつおろす。この内侍のすけは院の太后の宮の人、若くより、かくよき人の御子生みに仕うまつり給ふ人なり。年は六十餘ばかりなり。中納言は、内裏にもをさく参り給はず、ありきもし給はず、宮と犬宮とを抱きうつくしみて、居給へり。内侍のすけ、御前に居て、内侍「今の程は、何とも見奉り給ふまじき

〔語釋〕

(二)あて宮出生の時

(三)正頼

(四)女一宮出生の時

(六)あて宮女一の様な美人にしてくれよ

(七)兒は湯のつかはせ様によりて美しくも醜くもなるといふ謎のありしなるべし

〔考異〕

(一)はてむーはてむ

(五)嬉しかりなむ一嬉しかなり

(八)遣りてーいでて

ものを、うまれ給ひしすなはちより、御懐離ち奉り給はず、御尿にそほちおはします。萬のこと、居立ちてし奉り給ふを見奉り給へれば、嬬もいとあはれに悲しくなむ見奉る。御湯殿は嬬仕うまつりはてむ。こよら斯かる所の宮仕し侍りつれど、御迎湯参り、その行事をこそ仕れ。たゞ藤壺の御局になむ、大殿の「あまた出で來ぬる中に、これはいとかなしく」など宣はせしかば、御湯殿参り侍りし。この宮の御時には、御迎へ湯をなむ参り侍りし」と聞ゆ。中納言仲忠「いと嬉しかりなむ。なほ然し出で給へ。女子は、見るかひなくおひ出で給はくち惜しかるべし。湯浴しがらとかいふなるものを、し出で給へらば慶びもかしこまりも聞えむ。あまた人には見せじとなむ思ふ」と宣ふ程に、父君に尿多にしかけつ。宮に、仲忠「これ抱き給へ」とてさし奉り給へば、女「あなむつかし」とて押し遣りて、うちそむき給ひぬ。君、仲忠「頼もしけなの人の親や」とて内侍のすけにさし取らせて拭はせ給ふ。宮、女「宮」いかに香臭からむ。あなむつかしや」

〔語釋〕

- (一)此兒もあて宮の如く帝に仕へて寵を専らにすべき美人になるべし
- (二)此様な赤兒がやがて成人して、あて宮をいふ
- (四)東宮
- (六)あて宮の髪は美しさを形容する也
- (七)懐胎の御様子と見え

〔考異〕

- (三)今はいとみじやー今はいみじー今いといみじや
- (五)竝ばせー竝び

とてむつかり給ふ。内侍のすけ、「この御子よ。藤壺の御方の兒顔に似奉り給へるかな。かれは少し小くぞおはせし。これはいと大きなりや。嬪おのづから思ふやう、上仕うまつり給ふべき人などは、又も出で來給ひぬべかめり。かよりし人こそは、おひ出で給ひて、萬の人まどひはてさせ給ひしか。今はいとみじや。御年加はり給ふまよに、あてに上臈しさのみまさりて、突きもし奉らば亡せもしつべきおほん顔つきにて、花を織りたるごとぞなりまさり給ふ。宮のつい竝ばせ給へば花のかたはらの常磐木のやうに見え給ふこそ。先つ頃参りて侍りしかば、更に御宮仕のやうにもあらで、たどの人の御中らひの様にぞおはしますや。宮おはしまして、何事にかありけむ、聞え給へりしかば、うちむつかりおはしまして、御髪を繰り出でて、御座のまよにうち添へさせ給へりしを、見奉りしかば、しかけたる如して、筋も見えず、隙もなく、同じやうに見え給ひしかば、萬のこゝと忘れて齡延ばはる心地こそし侍りしか。さるはこの頃、御氣色にやあらむ、例の

〔語釋〕

- (一)女一の
- (二)藤壺の常は美しく見ゆるは傍なる東宮に比較する故一層見まきりするなるべしとの意歟
- (四)仲忠
- (五)仲忠が女一の前居る故女一が見劣りする也
- (六)「殿下」は「天下」「えうち」は「えかち」にて藤壺に對しては流石の仲忠も之を壓倒する譯にはゆくまじの意なるべし
- (七)「うたれ」は「かたれ」歟
- (八)俊薩女
- (一)女一
- (二)「など」と「なるべし」

〔考異〕

- (三)見まきりに見まきりしに
- (九)一一に
- (一〇)一一に
- (一一)めれーめる歟
- (一二)めれーめる歟

やうにも思したらざめり」中納言、仲忠、長さは、この御髪と如何に」すけ、「然ばかりにやおはしますらむ」宮、女「われは人か。かの君はいとみじきものを。金の漆のやうにこそあれ。同じ所にありし時、常にくらべて見しかば、かの御髪は、色と筋とは殊なりしものを」すけ、「宮斯くばかりこそはおはしますまめ。嬪がつくりごと聞えさするにやは。なほ見奉り給へかし。それを、かの御方の、いと恐ろしくおはしますは、ついまさり給へれば、見まきりにこそはおはすれ。又おとどの君の恐ろしくおはしますは、宮の御前におはすれば、宮の氣劣らせ給ふこそ。藤壺の方はしも、殿下のおとぞえうち奉らせ給はじ」おとぞ、仲忠、忝くはいかでかうたれ給はむ」すけ、「否や。まことはいとぞいみじきや。たど今の人、三條殿の北の方一、藤壺二、宮三にぞおはすめれ。男は御前ぞ一におはしますめれ」中納言、仲忠、まばゆくも宣ふかな。そこにあらば、心地すぎぬべけれ」と宣へば、すけ、「さては思ほえずかし、傍ほとりも」などて、「罷り立ちなむ。今しばしもさ

- (語釋)
- (一)「なご」として「なるべし」
- (二)俊隆女
- (三)「中納言もの」「も」衍なるべし
- (五)あて宮を見たらば上もや唯にては濟まされまじ
- (七)あて宮をいふ
- (九)正頼
- (考異)
- (四)うたていと—御前そ
- (六)からむ—からむかし
- (八)取りもて去にもしたる—取りもいかにもしたる

ふらはど、又聞え過しもし侍る」などて、犬宮かき抱きて入りぬ。中納言、宮に、仲忠「いみじうも物言ふものかな。別(一)いても、里人を譽むるぞ空目なる。藤壺の御方(二)まかで給はど必ず見せ給へ。内侍のすけの言ひつること、まことかと思くらべ奉(三)らむ」宮、女「まことぞ。いとよく物言ふかな。かの君は、見るまよによくなりまさり、我は日々(四)に怪しくぞなるや。昔だにこよなかりけり」中納言も、仲忠「いみじき御かたはにもあるかな。見なしにやあらむ、うたていと恐ろしけにおはすとは見奉(五)らぬを、さなることは必ず見せ奉らせ給へ」宮、女「いでそことだに(六)はあらじ。事引き出でて騒(七)がれば、聞きにくからむ」君、仲忠「よしと見奉るとも、今は何(八)ごにか。昔だに、ひき出でずなりにしことを。上達部の御女の、ゆるし給はぬことを強(九)ひて取りもて去にもしたる人をば公は何の罪にかあて給ふ。又殿も、仲忠をころし給はではやみ給はずこそあらましか。それも、琴一聲(一〇)かい弾きて聞かせ奉(一一)らましかば、憎(一二)みもはて給はざらまし。然りし時だに、過たず

- (語釋)
- (一)女一をいふ
- (二)自分が人らしき女ならぬ故
- (四)あて宮
- (五)女一宮をいふ
- (八)あて宮腹
- (九)仁壽殿
- (一〇)女一が仁壽殿に
- (一一)仁壽殿の
- (考異)
- (三)こそは—は「ナシ
- (六)には—に「ナシ
- (七)宮こそ—宮にこそ
- (一)給へりけるかな—給へりけりな

なりにしものを。いとよく然りぬべき折もありしかば、帝の御女も賜はらずやありける」宮、女「それは、わが人にもあらねば、御子の數にも思(一)さで、たごに棄つとこそは思しけめ。昔は鬼にもこそは賜ひけれ。たご人なれど、この君は、親(二)のさばかり思ひかしづき給ひしを、天下に思ふとも、何業(三)かせまし」仲忠「そはかしづき女をこそ、かゝる事し給ひけりな。さらば唯棄てられ給へるなり。さても、志(四)淺きにはあらざなり。なすらひ給ふべきわが身にもあなりや。まことには、恐ろしきものは、彈正の宮こそおはすめれ。物も宜はず、御妻もなくて、年月(五)を経給ふに、何心を思すらむ。よし、見給へよ。これぞ事は引き出で給はむ」女「この東(六)の對におはします。東宮の若宮たちこそ、恐ろしきものは世にあめれ。如何やうに生ひ出で給はむとすらむ。今ゆくさきの君がねにやはあらぬ」仲忠「まことに、女御の君を、騒(七)がしかりし曉に見奉(八)りしはや。いとよく似奉(九)り給へりけるかな。内侍のすけのよそへ残し奉(一〇)りつることをかしけれ。その御容貌は、けに氣(一一)

〔語釋〕
〔三〕源中納言は「右」の誤なるべし

〔正頼參内、鹿養の有様を奏す。〕

〔考異〕
〔一〕いと自然はあらねど
―いときはあらねど
〔二〕中にも…恐ろしの―
中に見にくものぬし恐ろ
しの
〔四〕事も―事にも
〔五〕なむ―いと

高く優れたること、いと自然はあらねど、見まほしう抱かまほしけなることは又無
かめるを、さればこそ内裏の上は、籠り臥しがちにはおはしますめれ」宮、女「さ
ばかりの心地は、何處にかものし給はぬ。源中納言の今こそは藤壺にもことに劣
らぬぞかし。内裏の上こそ中にも似るものなくものし給ふれ」仲忠「恐ろしの事や。
な宣ひそ。心地騒がし」など御物語しつと、御張のうちに籠り臥し給へり。

源中納言のおとど内裏に参り給ひて、御前にさふらひ給ふ。うへ、朱雀「久しく参
られざりつるかな」おとど、正頼「侍る所に觸穢のさぶらひつれば。尙かの後は勞
りどころの侍りしかば」うへ、朱雀「然りけむ。その程の事どもは如何ありけむ。
此頃、上の男どもは、其處の興ありしことを、様々いふめる。涼の朝臣と行政と
を笑ふなるは如何なることぞ」おとど、正頼「何でふ事も侍らざりき。右大將の朝
臣の内侍のかみなど、琴弾き侍りし程なむ、興侍りしや。いと有難かりける事ぞ
や」うへ、朱雀「その琴はいづれぞ」おとど、正頼「内侍のかみの昔より弾き侍りけ

〔語釋〕
〔一〕犬宮

〔二〕生れたりと聞きて
〔四〕誤あらんか
〔五〕誤あらんか
〔九〕誤あらんか
〔一〇〕大宮に

〔考異〕
〔三〕舞をなむし侍りし―
舞なむ侍りにし
〔六〕あだなけれ―あなだ
けれ
〔七〕けるは如何にせしぞ―
―ける如何にせし
〔八〕もとと―ナ

る、りうかくとなむ承りし。それはなむ、かの兒になむ取らせ侍りにける」う
へ、朱雀「いといみじき物得たりける女子にもあるかな」と宣ふ。正頼「然に侍るな
り」正頼「さてかの朝臣は、如何思ひたる。らうたしとは思ひたらむや」おとど、
正頼「知らず。いかに思ひて侍るにか侍らむ。然聞きて侍りしすなはち、舞をなむ
し侍りし。日頃は、夜晝懷離たなむ侍るなる」うへ、笑はせ給ひて、朱雀「思
ふ様なりかし。何かはしらむかの親族は。女子も、よろしきは悪からぬものぞか
し。さりけもなき人の子をもるらむこそあだなけれ。いかでこれに慶もせさせ
てしがな。さて、九日に當りける夜になむ遊ばれけるは、如何にせしぞ」。おと
ど、正頼「琴ども三つ、一つ聲にしらべて、一つづつなむ弾き侍りし。さうがの家
のうちに、琵琶は女一の宮、賜はせし御琴倭琴は、侍るところに嵯峨の院より賜
はせためりしきりかせといひ侍る。さて、女方に入れて侍りし笛どもは、これか
れに賜ひて、自らは横笛をなむ吹き侍りし」うへ、朱雀「いみじかりけることかな。

〔語釋〕

(一)誤脱あるべし

(二)誤あらんか

(五)祐澄

(六)女一宮の身上を記する也

(七)仲忠

〔考異〕

(三)をぞしをナシ

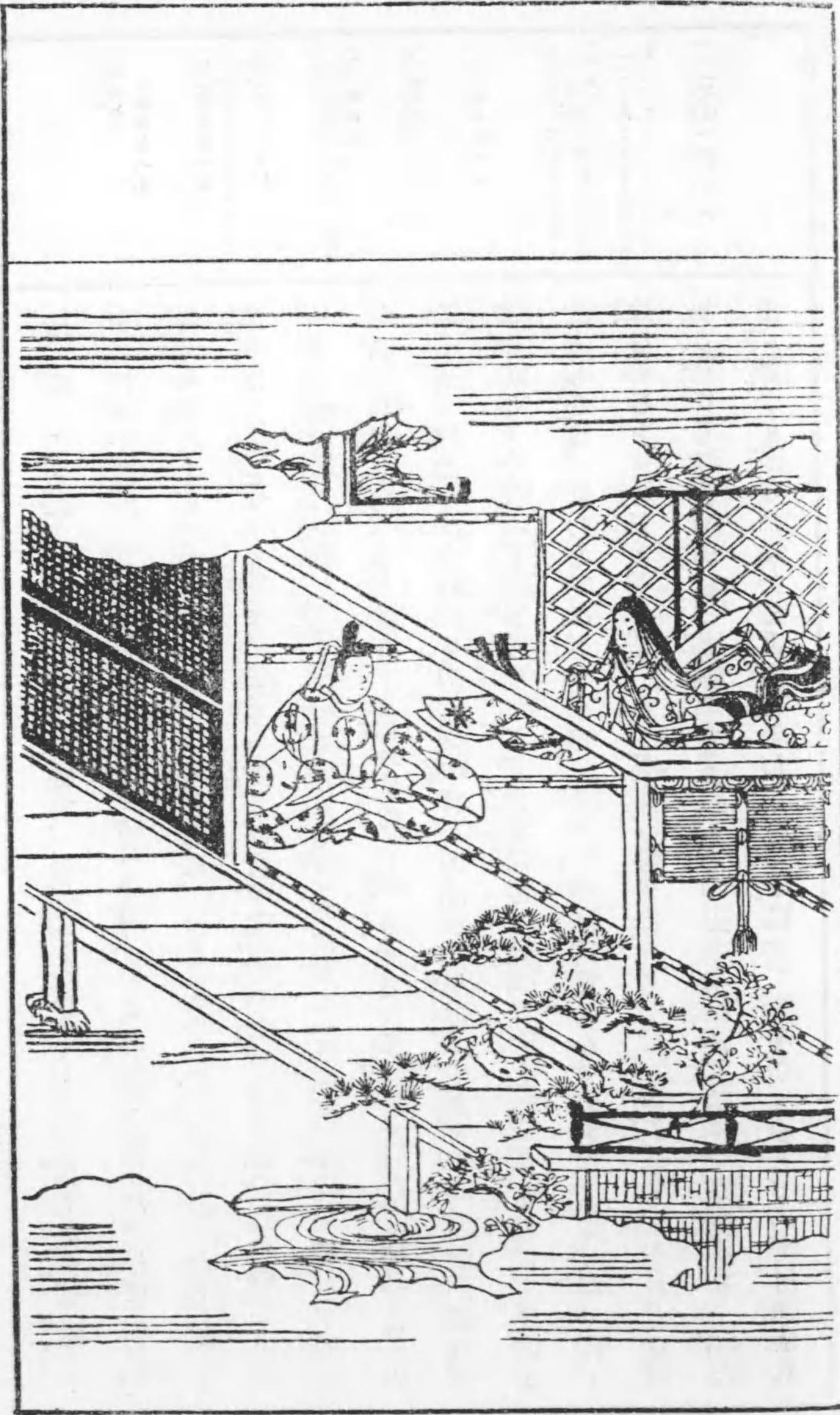
(四)と宣ふーなど宣ふ

(八)すみ給ふれーナシ

祐澄あて官を訪ふ。産養の禮。

心こころに入れてせぬわざく、無くしけるは、この子こを嬉うれしと思ふにこそはあなれ。手傳へむとや思おもふらむ」おとど、正頼まさたのり然さ申し侍はべりき。「この手てを如何いかにせむと思おもひ侍はべりつるに」と申し侍はべりき」うへ、朱雀すざくかぎりなかりき。したり顔がほに然さぞ言いふめる。興けいあること。出いで來くべき御家みいへなども、思おもふやうならば、その家いへは、かうぶりも得えつべき所ところぞや。倭琴わごん、琵琶びわは誰たれか弾ひきし。箏そうの笛ふえなどは誰たれか吹ふきし」など委くしく問とはせ給たまふ。正頼まさたのり笙さうは彈正だんじやうの宮みやなむ。琴ことどもは誰たれにか侍はべりけむ。一つにあそびて、ことに違たがはず侍はべりつるなりき」朱雀すざくさやうのものをぞ、子持こもちの臥ふしながら琵琶びわひきたる」とて笑わらはせ給たまふ。朱雀すざく仁壽殿にじゆうでん、倭琴わごんは名高なだかきぞかし。すべていといみじかりける夜よかな。これを聞ききたらましかば」と宣のたまふ。おとどまかで給たまひぬ。

宰相さいしやう中將ちゆうしやう藤壺とうげにまうで給たまひて、有ありし御物語ものがたりし給たまふ。君きみあて宮みや中々なかなかいとよしや。世よに心こころにくく思おもひたる人ひとにつき給たまひて、一所ひとところ心こころやすくすみ給たまふれ。己おのれこそ、かよるおほたかりに出いだし放はなたれて、かにかくにまがくしき事ことを聞きき見み



藏 開(上)

- (一)誤あるべし
- (二)誤あるべし
- (三)誤あるべし
- (四)誤あるべし
- (五)昔懸想したりし多くの男の中に
- (六)仲忠
- (七)誤あるべし
- (八)見給へむ一ナシ

給へば、ことに花やかにも見え給はず、むづかしきまよに、目も見合せ奉らず、むづかれば、心よからずと思されためり。いと心よなけれ。里にありし昔のみ戀しくて、「あらしものを、何せむに、かく出だし立てられてあらむ」と思へば、心憂く、悲しきことも多くなむ」宰相の君、祐道「あやしき御心にこそあれ。宮は、御心才も猶ことにはあひおはします。御み遊びなども、誰にかは、し劣り給へる。宮仕し給ふ人は、敵多かるこそはよけれ。羨やましきこそは、悪しうはすれ。昔の人の中に、あはれと思ほすやありし。左衛門督なりけむかし。それにぞ、下臈なれど、返事などし給ふなりし」あて寫「それは、手のよかりしかば、見むとてにぞ」宰相、祐道「今やは御覽せぬ。いとかしこくなりて侍るめるを」君、あて寫「さて見しかば宮に聞えたりしかば、かしこも、かれぞかり奉りて返事かきし」宰相、祐道「いでその返事し給ふ文給へ。見給へむ。論なう私ごと侍りけむかし。物聞えし人々の中には、誰をかは心とどめては思ほし

- (一)誤あるべし
- (二)誤あるべし
- (三)誤あるべし
- (四)誤あるべし
- (五)昔懸想したりし多くの男の中に
- (六)仲忠
- (七)誤あるべし
- (八)見給へむ一ナシ

し」君、あて寫「さ思ふべき人こそなけれ。誰をかは。源宰相こそ、今に恨み言ふなれ。まことに思ひけりとは聞け。さてはまことの心ありける人し無ければ、然思ふもなし」祐道「右大將殿は、さ宣ひてこそは、ものし給はずなりにしか」君、あて寫「然らずとも、それはあからめし給ふべき人ならばこそ」祐道「いで祐澄を制し給はじやは。左衛門督なども、いたく溢りしを、制し宣ひなどして、おとどのし給へるぞかし。今は思ひなぐさみ給ふべかめり。此頃はいと警策なりや。ねびもてゆくまよに、光をぞ放つべき」君、あて寫「久しく此のわたりに見え給はず。こよには、月の宴し給ひし時に、消息言はせ給へりし」祐道「いで、今さへ御消息あぢきなかり。なほ人の歎きは生すらむかし。彈正宮も思し倦じにたるにや、これもおはせとのみあめれど、斯くてのみ見え給ふは」あて寫「今一つ、人には聞えで心地にはいみじく悲しと思ふこともありや」宰相、祐道「何事か。もし祐澄が、氣色見給へりし事か」あて寫「いで、いかでか見給へむ。人の知るべきにあらずや」

- (一) 語釋
- (二) 仲澄
- (三) 御徳にぞ
- (四) 「女御」
- (五) 「見え給ふや」
- (六) 兄弟多けれども
- (七) 「心」は「ころ」の
- (八) 御徳にぞ
- (九) 御徳にこそ
- (一〇) 見まほしう

祐澄「いで、されどいとよく知りて侍り。然ば聞えむかし。侍従の上に侍らずや
つねに然見給へき。御徳にぞそこなひ給ひてし人ぞかし」女御ぎみ、あて宮「つねに
夢にぞ見給ふや」と宣ふまよに泣き給ふ。宰相の君も泣き給ひて、祐澄「つねに聞
えむと思ひ給へれど、事の序もなく、常に人騒がしかりつれば、聞えざりつひこ
そ。如何なりし折に如何に聞えそめしぞ」君、あて宮「いでや、いみじく恥ぢ隠し給
ひしを、人に聞ゆなと亡きかけにてもこそ見給へ」祐澄「祐澄をば、數多あれども、
そが中に親子の契なしたりしかば、然も思さじ」あて宮「何かは、知り給へれば。ま
だ少かりし時、箏の琴ならはしよ心なむ、怪しく思はぬ様なる氣色なむ見えし。さ
て、年頃泣きうらみ給ひしかど、見知らぬやうにて歌みにしを、参りて後にも、か
かる文をなむ奉りし」と取出でて見せ奉り給ひて、あて宮「これを持て来て、
すなはちなむ、然は言ひに來たりし。これを心一つに思ふなむいみじう悲しき」
とて泣き給ふ。宰相「祐澄心の、いと見まほしう、かしこかりしかば、身を徒ら

- (一) 語釋
- (二) 誤あらんか
- (三) あて宮の如き女を得たしと
- (四) 仲澄
- (五) 「など」となるべし
- (六) 女一宮への贈物なども私に仰せ付けて下さればよかりしに
- (七) 腰あるべし、一本こそしなし
- (八) 東宮
- (九) 陸奥は古より金を出せり
- (一〇) 考異
- (一一) いかで
- (一二) 足らざりしかば

になして、言も出ださずなりにけるにこそ。祐澄しかことのおほえぬわ
ざわざはしてまし。あるはまだ宮に参り給はざりしその年の秋の頃、さやうなら
む人もがな、とは思ひ侍りし」と宣へば、君うち笑ひ給ひて、あて宮「なき人の御様
にこそ。かの君は、物を思ひしけにやあらむ、見苦しきことなむ見え給ふ」と宣
へば、祐澄「あはれの事や」などて、祐澄「常にもとぶらはむとすれど、流石にもの
騒がしくてのみなむ。大方をばさるものにて、思しかけむことなどは、なか宣
はぬ。かの宮に侍りし物どもも、いかでかは、なか斯うなども宣はせざりし」
あて宮「それは、かねてより「さやうのこと、思はむにこそさせむ」と宮の宣ひしか
ば任せ奉りてなむ」宰相の君、祐澄「金などのいと多く侍りしを、いかでさせ
給ひけむ」あて宮「それをなむ、し煩はせ給ふ。上に奏せさせ給ひ、上にさふらふ陸
奥國の守などに召しつとなむ。さても足らざりければ、下には他物入れさせぬと
なむ聞きし。人や見けむ」祐澄「中納言こそ取り寄せつといとくはしく見給ひけれ」

君、あて宮「恥かしの事や」と宣ふ。宰相の君まかで給ひぬ。

畫詞 ことばは藤壺。

①祐澄父母に對面、仲澄の追薦。

〔語釋〕
(一)誤あるべし、「たのため」とも又「たのため」

(二)仲忠
(三)東宮をも
(四)仲忠をらふ
(五)仲忠を

(六)「外にまかり通ふ所なくて侍りしか」歟

(七)俊隆女は一人子なれど仲忠をあの様に立派に養ひ立てたり

かくて北のおとどにまうで給ひて、祐澄事の序に藤壺にまうで侍りしかば、しかじかの事を宣ひしはや」大宮「かの産屋の折のことを思ひたるなより。天下にいふとも、たゞ人は限あるものを。あねにはたのためとおほえなむとおほえさふらひて、かたち心するわざに心つくものなれば、左衛門督をぞ、ねたくなと思ふらむ。さて、宮をも心に入れ奉らぬなるべし。あれにはまた目ざましき人にはたあり」宰相、祐澄「男に侍る祐澄だに、憎くも侍らざりし人なり。故侍従は、これを妻子のやうにてこそ、これにまかり通ふ所ならず侍りしか。男だちだに然る心ありし人を、この事侍らで夜晝さぶらはせ給ふなること侍るらむ、と思ふこそいと不便なれ」大宮、「うたて近き所に聞えもこそあれ」宰相、祐澄「空言を申し侍らばこそは侍らぬ。よくも知りて侍るかな」とこそ聞召さめ。人は一人なれど、かやうにこそ子

は養ひ立て給へ。此のわたりこそ、豚の侍らむやうに、物の用にすべきものなく、

稀々よろしかりしは、はかなくてまかり隠れにしかば。まめやかには、故侍従の藤

壺の御夢に思の罪に、途ならぬやうに見え侍る」など申し給ふ。おとど、正頼「何

事をかは然思ひけむ。我等をつらしと思ふこともあらじ。官爵のことは限あれ

ば」御いらへ、祐澄「男は女につけてのみこそは」正頼「此の中には誰かは」祐澄「中

のおとどの宮たちの中にこそは」大宮、心を得給ひて、然ば然なりけりと思ほし

て、いみじう泣き給ふ。おとど、正頼「など然る氣色見給ひしや」宮、大宮「否や。

然もあらずや。なほ然るらむ。かよる氣色ぞやみ給ふ。すべて、よくもあれ悪し

くもあれ、男女にてぞあるべかりける。中の大殿にて、夜晝ありて、憎けな

き人々のあまたものし給ひしかば、さやうなるにやありけむ」おとど、正頼「一の

宮なりけむ。それぞ人に思はれぬべき様し給へる」宰相の君、をかしと思へど、

かたはらいたければ申し給はず。この君、一の宮をいかでと思しける。今は二の

〔語釋〕
(一)仲澄

(二)行くべき處へ行かれぬ様に

(三)誤あるべし

(四)女一宮、仲忠の妻

(五)祐澄

〔語釋〕

(一)仲澄

(二)「なむど」は「なご」

(三)「ある人」は「あてこそ」歟

(六)仁壽殿

(八)正頼

〔考異〕

(四)中らひに―中らひなるに

(五)こと―ナレ

(七)斯う―か

〔大宮五十日の産後、正宮大宮と物語・仲澄夫婦の物語。正頼夫婦の物語。〕

宮をいかでかと思せど、聞え寄るべくもあらねば、心一つに思す。さて、誦經(一)の人の爲めに、なほ誦經などせさせ給へ。その誦經の文には、「なほ思ひの罪免(二)かし給へ」と右大辨季英の朝臣に仰せごと賜ひて、願文書きてせさせ給へ」と聞えて立ち給ひぬ。おとど、正頼「この朝臣、そよめきたりけるは。いとまめなりと見るものを、なむどたはことは多くしつる」宮、大宮「ある人をぞ、年頃けしきありて聞えけるや。それを今はと思ひて、言葉散らすなめり」おとど、正頼「うたて、疎(三)からぬ中らひに、かよる事どものありけること」と宣ふ。かくて待従の君の爲に四十九日の内に、布七匹づつ誦經にせさせ給ふ。

〔畫詞〕 ことば北の大殿。

かくて大宮の御五十日は、女御の君し給ふべきと、内裏に聞召して、これより忍びて奉らむと思して、頭中將實頼に、朱雀(六)斯う―思す事なむある。かの右の大(八)臣の家にはあらぬ所にて、そのこと物せよ。その具の物どもは、納殿

〔語釋〕

(一)實頼の父季明

(二)實頼に贈る

(三)實頼が注文して

(八)かざりにつけたる造り枝

〔考異〕

(四)ことなりければ―ことなりそれは

(五)無くては―なちでは

(六)同じき―同じ

(七)敷物―ナレ

にあらむ物どもを、用に随ひてものせよ」とおほせ給へば、大政大臣の曹司にて、銀の鍛冶、鑄物師など召して、急ぎせさせ給ふ。「仰せごとにて、かよる事し給ふなり」とて、所々より、檜割籠手をつくして奉り給ふ。さもしつべき人々には「かよる事なむある」と言ひて、せぬ所なく、この事急がす。

かくて其の日になりぬ、女御の君、大宮の御方に、仁壽「犬に餅くはすべき日になむ侍りける。如何にすべきわざにか」と聞え給へり。大宮、「人に知らせでするやうに、いと多かることなりければ、ことよにのみなむ。わいてもろく無くてはせぬ事になむ」女御の君、仁壽「いかでかは。いと多くさふらひたり。其方にやは参るべき」と聞え給へれば、大宮「今其處にを」とて、大宮「今日だにわたりて見む」とておはしましたり。頭中將、御前どもの物など参らせ給ひぬ。大宮の御前には、銀の折敷、同じきたかつきにすゑて十二、御器どもは、わたり三寸の沈を、轆轤に挽けるなり。餅四折敷、からもの四折敷、くだもの四折敷、敷物心葉、い

と清らなり、又、御前どもの料に、淺香の折敷十二づつしたり。檜割籠五十荷、皆沈、蘇枋、紫檀などなり。臺枋なども同じ物、袋しき物のくより緒などもいと清らなり。いり物は、皆まるり物、かたへはかさね割籠一かけ、御前に参るばかりしたり。たどの割籠五十荷そへて参れり。御前の折敷どもは、大宮、一の宮、女御の君の御前に参る。重ね割籠、中とりて、宮、中納言などには参る。内侍のすけ、大輔の乳母よりはじめて、御たちまでなり。檜割籠三十荷、たどの五十荷そへて、内侍のかんの殿に、女御の君御消息して、

仁壽日頃聞えざりつる程に、かよる日までもなむ。それより。

仁壽これは、

いかくときよわたれども今日をこそ餅くふひとわきて知りぬれ
 とて奉り給ふ。藤壺に同じ敷に奉り給ふ。かくて餅参るべき時なれば、その

(考異)
 (一)からくしてーからう
 じて

(二)すくよかになりー
 「に」ナシ

(三)いとーナシ

時になりぬれば「疾くく」とあれば、兒君いと出だし立て難くし給ふ。からくして御湯殿などして、綾の御衣一かさね著せ奉りて大輔の乳母といふ抱きて参りたり。女御の君かき抱きて見せ奉り給ふ。大宮見給へば、いと大きにて、頸もすくよかになり、白ききぬに柑子をつよめる様に見えて、いと白く美しけなり。(三)
 大宮「これを今まで見せ給はざりける。かよる人いと多く見つる中に、これはまだ見ぬ様なり。かよらぬだに、さてもありぬべくなるを、いとをかしかめり」女御の君、「いざ、見にくし」とて隠さるれば宮、大宮「されど、親たちにも勝り奉りぬべかめり」とて餅参り給ふ御折敷見給へば、洲濱に、高き松の下に、鶴二つ立てり。一つは箸一つは比くひたり。松の下に、黄金の匕して、帝の御手してかよせ給へり、

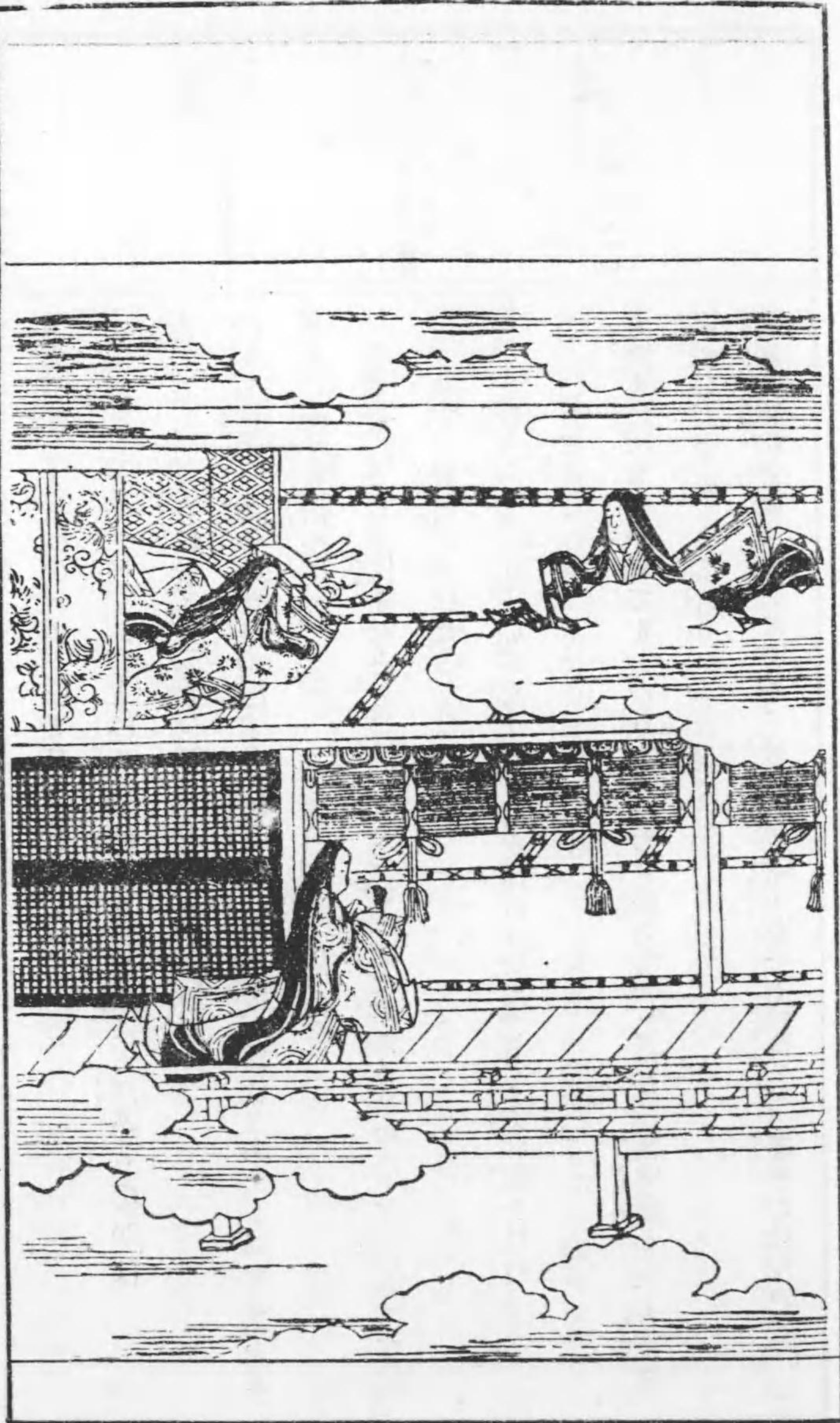
朱雀みどりごは松の餅をくひそめて千代々々とのみ今はいはなむ
 とあるを大宮見給ひて、白き薄様に書きておしつけ給ふ。

〔考異〕
（一）ちとらやーをとして

大宮我をりて松のもちひをくはすれば千歳もつきておいよとぞ思ふ
女御の君に、大宮「かよる事ありけりや」とて奉り給へば、書きておしつけ給ふ。
仁壽おいのよに千代をのみ知れみとり兒のまつ餅をいとどくふらむ
とて一の宮に奉り給へば、物も宣はず。これかれ、「いかでか」など宣へば、
まなくひそむる今日や千代をならふらむ松の餅に心うつりて
とかき給へれば女御の君、折敷ながら中納言の御許にさし出で給へば、取りて見
るやうにて、

仲忠千歳ふるまつ餅はくひつめり今はみかさのおとらでもがな
とかき給ふを、彈正の宮、「見む」と聞え給へば、仲忠「いとかしこき御手はべれば、
え見給はじ」とてさし入れつ。宮、忠康「許されざらむ人のやうに」とて御簾の内
にはひ入りて見給ひて、忠康「暇なしや。」

忠康ひめ松も鶴もならびて見ゆるにはいつかはみるのあらむとすらむ



藏

開(上)

と書き給ふ。大軸の乳母、ほとりに押し付く。

大輔みどりごの千代てふことは人ごとにならびて誰にと思ふものかはとあるを人々見給ひて、「乳母ことわりや」とて笑ひ給ふ。

かよる程に、内侍のかみの殿より御返あり。御使は、白きうちき、はかまかづきたり。御文見給へば、

俊隆女これよりも聞えむと思ひ給へるを、日頃は聞えさせぬことの侍りてなむ。

さても聞召しつけたるをなむ。

聲かへすいかといふ兒をいかでかはけふのなごりと人の聞きけむ

いと耳敏なりや。

と聞え給へり。かくてもちひ五十日物など参りて、これかれ物聞食して、大宮は、乳母いだき奉りて入りぬ。

大宮彈正の宮に、大宮「などか、彼方にも時々わたり給はぬ。數多おはすれど、か

〔語釋〕
(一)五十日の當日を

(二)五十日を小兒の泣聲の「いか」にかけたり

〔考異〕

(三)五十日物一まゐり物

〔語釋〕
(一)忠康をいふ

(二)「などか」歎

(三)君を聲にとり奉りたく思ひ居るやうなるに

(四)忠康の了簡

(五)母の仁壽殿にいふ也

(七)あて宮

(一〇)仲忠

〔考異〕
(六)なくかう一なくは

(八)人を一人をば

(九)志ある一志しぬる

たじけなければ、一所をばことこそは思ひ聞えしか。いと疎々しくこそ思ひたれ」三の宮、忠康年頃は、身の數ならぬを思ひ給へつよみてなむ」大宮、「などは旅住のやうにては、これもかれも、さてあらせ奉らまほしけに思はれたるを。見給ひつべきも、いとよう聞ゆるや」三の宮、忠康昔より數にも侍らぬ身なれば、誰かは然思ひ侍らむ」大宮、「などかは然思さるよ」女御の君、「いざや、この御心にぞ見給へわびぬる。藤壺の里におはせし時、はかなきことを聞え給ひけるに、いらへ給はざりき、とてそれを倦じて、法師のあらむ様にてのみ、歎きわたり給ひて、ある時は「きんちが拙く、我を人氣なくかう生み出だしたる」とさへぞ宣ふや」大宮、「更に承らざりし。かの人を、兵部卿の宮も然宣ひき。さてはあるまじきことなり、と三條の大將さ宣ふと聞きき。源宰相こそ、志あるやうにきよ侍りしか。更にこそ知らざりけれ」御いらへ、忠康多くも聞召し残したりけるかな。いとみじき事ども多く侍りしものを。まづは彼處ぞ」とて中納言を見やり

- (語釋) (四)あて宮の事を
- (一)東宮
- (一)給へちめ給ひつちめ
- (二)三の宮—彈正の宮
- (三)とは—とこそは
- (五)多かなれば—多かんなれば
- (六)とかく—とくも
- (七)同じ—をかしき
- (八)文通はし—文あるはかへし通はし
- (九)ものは—は—ナシ
- (一〇)給へりし—給へる

給ひて、思康^{おも}こよにこそ、同じ所^{おな}にて、よくは知り給へらめ。然^{しか}宣^{のたま}ひけることもや、思^{おも}しあはする事^{こと}も侍らむかしと宣^{のたま}へば、宮^{みや}をかしとおほす。中納言^{ちゅうなごんごん}苦^{くる}しとおほす。三^{さん}の宮^{みや}、思康^{おも}さればこそは、なほ昔^{むかし}より數^{かず}ならずとは「大宮^{だいみや}、」など、はかばかしく斯^かくななどは宣^{のたま}はずなりにし。然^さらましかば、ともかくも聞^きえてましもものを。宮仕^{みやつかへ}にとて出^いだし立^たてたれど、思^{おも}ふやうにもあらず、後^{うしろ}やすく頼^{たの}み聞^きえし人^{ひと}さへ許^{ゆる}さず、心憂^{こころ}きことども多^{おほ}かなれば、常^{つね}に思^{おも}ひなけくと聞^きき侍^われば、いとうたてくなむ。なほ心安^{こころ}くてあらずべかりけるものを、と思^{おも}う給^{たま}へつるに「三^{さん}の宮^{みや}、思康^{おも}」いとあるまじきことかな。何^{なに}かとかく思^{おも}う給^{たま}へざりき。たゞ答^{こた}へ給^{たま}はざりしをのみなむ。今^{いま}に心憂^{こころ}くなむ。同^{おな}じやうに文通^{ぶんかう}はしなどし給^{たま}へりし人も、まめやかなる心^{こころ}あるものは無^なかめれど、こよには、志^{こころ}をだに昔^{むかし}ながらにとてなむ。年頃^{としごろ}は何^{なに}にか思^{おも}ほし志^{こころ}して參^まらせ奉^{たてまつ}り給^{たま}へりしかひありて、宮^{みや}はたこと御心^{ごころ}の無^なかめれば、いとよかめり。さいつ頃^{ころ}召^めありしかば、内裏^{うち}に參^まり侍^わりしついでに、

- (語釋) (一)あて宮
- (二)東宮が
- (四)今宮の産は何時ぞ
- (三)にぞ—に—ナシ
- (五)にかは—ぞ
- (六)なしや—なかりき

かの御局^{ごきよ}にまうでたりしにも、いと思^{おも}ふ様^{やう}にておはすめりき。多^{おほ}くの人の惑^{まど}ふめりし御身^{ごみ}を。一^{ひと}所^{ところ}見^み奉^{たてまつ}り給^{たま}へば、然^さらではかひなからむかし。かの君^{きみ}も、今^{いま}はよづき給^{たま}ひにければ、まうでたりしにも、いと氣^け近^{ぢか}くものなど宣^{のたま}ひき。早^{はや}う斯^かうにてこそはおはすべかりけれ、となむ思^{おも}ひ給^{たま}へりし。御容^{ごよう}貌^{ぼう}もこよなくなりまさり給^{たま}ひにけり。さは言^いへど、やんごとなき人^{ひと}につき奉^{たてまつ}り給^{たま}ひて、こよなくもてなされ給^{たま}ひにけり、とぞ見^み奉^{たてまつ}りし」大宮^{だいみや}、「何^{なに}かそれは、常^{つね}に物^{もの}を思^{おも}ふなれば、むかしの様^{やう}にだにえあらじや。いと久^{ひさ}しく見^み侍^わらずや。去年^{こぞ}の秋^{あき}あからさまにまかでさせて侍^わりしかば、「あなすりて籠^こめするゑたり」などいと憎^{にく}けに宣^{のたま}ひしかば、煩^{わづら}はしさに參^まらせてき。常^{つね}にまかでむと宣^{のたま}はすれど、まかでさせねば、いみじく恨^{うら}むるや。この晦^{つごもり}ばかりにぞ、然^させむと思^{おも}ひ給^{たま}ふる」女御^{にみ}の君^{きみ}、「源^{げん}中^{ちゅう}納言^{なごん}のはまた何時^{いづ}ばかりにかは」大宮^{だいみや}「いさ、この頃^{ころ}とぞありしかど、まだ然^さりけもなしや。それこそいとようなりにたれ。髪^{かみ}などもいとよう生^おひたためれ、さるは、苦^{くる}しけな

〔語釋〕
 (一)今宮をこそ忠康に奉らんと思ひ居しに不意に涼に與ふべき勅命ありしかば本意を遂げざりき
 (二)「家の處分」にて財産處分の様なりといふ意歟
 (四)大宮
 (五)大宮
 (七)多くの子を見たる目
 (九)我女一と夫婦にならざりしならば今も彈正宮の様な心持で居るならん
 (一〇)女一なちては我があて宮に對する戀を忘れさするものはあるまじ

〔考異〕
 (三)御物語―御物語など
 (六)宣ひつる―宣へる
 (八)とか―とかや―とや
 (一〇)失はせ給ひつるこそ―失はさせ給へるこそ

る程なめれど。それをこそ、昔は然も聞えむと思ひしか。思はぬ様なることの出で來にしかば「三の宮、忠康」それも、え然も侍らざらまし。いへのさうぶのやうにこそ」など暮るよまで御物語し給ひて、大宮もわたり給ひぬ。女御の君も御方々へおはしぬ。宮、もののはじめなり、とて例のごと取り散らせ給はず。
 かくて中納言、内に這ひ入りて、犬宮かき抱きて、仲忠、犬をば、宮はいかど宣ひつる。おほくの御目に恥かしくこそ」宮、女「見せざりけりなどこそ」仲忠「見にくしとやありつらむ」女「親どもには勝りぬべしとか」君、仲忠、仲忠、宮とあるは、さもや見し。さては怪しうはあるまじきものなより」宮、女「よしとこそは思ひけれ」君、仲忠、内侍のすけの言ひしかばこそ。さればこそ聞かせつべしとは聞えしか。彈正の宮の御物語、承りつるこそ、然ることぞと思ひ給へつれば、哀なれ。こよにさふらはざらましかば、かく思う給へてぞ侍らまし。その御心を失はせ給ひつるこそ、吾が君はいと嬉しくおほえ給へ。他人はかく思ひ消たせざら

〔語釋〕
 (二)あて宮
 (三)此處誤あるべし
 (五)あて宮を見たる人は氣狂の御になるが常故
 (考異)
 (一)初は―ものを
 (四)あらむ―侍らむ
 (六)いまそがり―いますがり
 (七)何とかは―とナシ
 (八)こちたくともなほこそは―こちたくともかれをこそは

まし。初は、いとこそ佗しかりしか、こよにまうで來し夜までは。見奉りしかば忘れ侍りにき。今はた犬など侍れば、然思ひ侍りけむとこそ。たど御心のつらからむにこそ、彼にまさりても。たどかの御方に御志なく思されたるなむ、恥かしくいとほしくは、さて侍りても何の効かあらむ。源宰相などのあはれにて物し給ふめるも、たど今は取り分きたる事もなかり。疎からぬ御中にこそ、かくおはしたるもよけれ。物思し知らざりけむ昔こそ然りけめ、今は世の中もの思し知りたれば、折あらむ時は、とかく聞え給ひつよもなぐさめ給ひけむ。餘所人にとても何のかひかは。さてまかで給ふべかなるを、この聞えしこと必ず」宮、女「言ひしやうに、見たる人の物狂ほしきやうなれば、其處にも然やと思ふにぞ」君、仲忠「何か、今は天女いまそがりとも、何とかは見給へむ。たど斯かる中らひに侍るを、さる志もありしに、覺束なからじ、とてこそ。もし初はこちたくとも、なほこそは。そのかみは、御前を他人取り奉らば同じ事ぞや」宮、女「怪しの

- (一)あて宮
- (二)あて宮
- (三)あて宮
- (四)あて宮
- (五)あて宮
- (六)あて宮
- (七)あて宮
- (八)あて宮
- (九)あて宮
- (一〇)あて宮
- (一一)あて宮
- (一二)あて宮
- (一三)あて宮
- (一四)あて宮
- (一五)あて宮
- (一六)あて宮
- (一七)あて宮
- (一八)あて宮
- (一九)あて宮
- (二〇)あて宮
- (二一)あて宮
- (二二)あて宮
- (二三)あて宮
- (二四)あて宮
- (二五)あて宮
- (二六)あて宮
- (二七)あて宮
- (二八)あて宮
- (二九)あて宮
- (三〇)あて宮
- (三一)あて宮
- (三二)あて宮
- (三三)あて宮
- (三四)あて宮
- (三五)あて宮
- (三六)あて宮
- (三七)あて宮
- (三八)あて宮
- (三九)あて宮
- (四〇)あて宮
- (四一)あて宮
- (四二)あて宮
- (四三)あて宮
- (四四)あて宮
- (四五)あて宮
- (四六)あて宮
- (四七)あて宮
- (四八)あて宮
- (四九)あて宮
- (五〇)あて宮
- (五一)あて宮
- (五二)あて宮
- (五三)あて宮
- (五四)あて宮
- (五五)あて宮
- (五六)あて宮
- (五七)あて宮
- (五八)あて宮
- (五九)あて宮
- (六〇)あて宮
- (六一)あて宮
- (六二)あて宮
- (六三)あて宮
- (六四)あて宮
- (六五)あて宮
- (六六)あて宮
- (六七)あて宮
- (六八)あて宮
- (六九)あて宮
- (七〇)あて宮
- (七一)あて宮
- (七二)あて宮
- (七三)あて宮
- (七四)あて宮
- (七五)あて宮
- (七六)あて宮
- (七七)あて宮
- (七八)あて宮
- (七九)あて宮
- (八〇)あて宮
- (八一)あて宮
- (八二)あて宮
- (八三)あて宮
- (八四)あて宮
- (八五)あて宮
- (八六)あて宮
- (八七)あて宮
- (八八)あて宮
- (八九)あて宮
- (九〇)あて宮
- (九一)あて宮
- (九二)あて宮
- (九三)あて宮
- (九四)あて宮
- (九五)あて宮
- (九六)あて宮
- (九七)あて宮
- (九八)あて宮
- (九九)あて宮
- (一〇〇)あて宮

人がはりや。かの君は、我だに、同じ所(一)にありならひて、所々(二)になりしかば、いと戀(三)しくて、常に歎(四)かるれ。え然(五)はあらぬものから、仲頼(六)などが様(七)にあるは、見苦(八)しくこそは「ぬし、仲忠(九)いとゆよしき事(一〇)。よし見給(一一)へ、必ず(一二)」など聞えて大殿(一三)ごもりぬ。

宮に、おとどの聞え給ふ、正頼(一四)犬は如何(一五)ありつる」大宮(一六)「いみじく生(一七)ひ出(一八)でぬべき者(一九)にこそあめれ。宮(二〇)のぞかやうにありしかど、これはいと氣色(二一)殊(二二)にこそ見えつるや」おとど、正頼(二三)「父主(二四)の、今(二五)からいと心(二六)にくよもてなすめるは、如何(二七)におほし立てむとすらむ。世(二八)の中にありにしがな」と宣(二九)ふ。

かくておとど、年(三〇)も老いぬ、慎(三一)むべき様(三二)にも言(三三)ふを、と思(三四)して、大將(三五)「辭(三六)し給ふ御表(三七)、一度(三八)は奉(三九)らせ給ひてしかど、返(四〇)されたれば、又(四一)奉(四二)らせ給ふ。此度(四三)も留(四四)められず。右大辨(四五)季英(四六)を召(四七)して、正頼(四八)「かうく、公(四九)に申(五〇)せども、納(五一)められぬ。實(五二)に思(五三)して留(五四)めらるべく、御心(五五)とどめられよ。このしきは、留(五六)められれば、論(五七)なうこの(五八)」

- (一)あて宮
- (二)あて宮
- (三)あて宮
- (四)あて宮
- (五)あて宮
- (六)あて宮
- (七)あて宮
- (八)あて宮
- (九)あて宮
- (一〇)あて宮
- (一一)あて宮
- (一二)あて宮
- (一三)あて宮
- (一四)あて宮
- (一五)あて宮
- (一六)あて宮
- (一七)あて宮
- (一八)あて宮
- (一九)あて宮
- (二〇)あて宮
- (二一)あて宮
- (二二)あて宮
- (二三)あて宮
- (二四)あて宮
- (二五)あて宮
- (二六)あて宮
- (二七)あて宮
- (二八)あて宮
- (二九)あて宮
- (三〇)あて宮
- (三一)あて宮
- (三二)あて宮
- (三三)あて宮
- (三四)あて宮
- (三五)あて宮
- (三六)あて宮
- (三七)あて宮
- (三八)あて宮
- (三九)あて宮
- (四〇)あて宮
- (四一)あて宮
- (四二)あて宮
- (四三)あて宮
- (四四)あて宮
- (四五)あて宮
- (四六)あて宮
- (四七)あて宮
- (四八)あて宮
- (四九)あて宮
- (五〇)あて宮
- (五一)あて宮
- (五二)あて宮
- (五三)あて宮
- (五四)あて宮
- (五五)あて宮
- (五六)あて宮
- (五七)あて宮
- (五八)あて宮
- (五九)あて宮
- (六〇)あて宮
- (六一)あて宮
- (六二)あて宮
- (六三)あて宮
- (六四)あて宮
- (六五)あて宮
- (六六)あて宮
- (六七)あて宮
- (六八)あて宮
- (六九)あて宮
- (七〇)あて宮
- (七一)あて宮
- (七二)あて宮
- (七三)あて宮
- (七四)あて宮
- (七五)あて宮
- (七六)あて宮
- (七七)あて宮
- (七八)あて宮
- (七九)あて宮
- (八〇)あて宮
- (八一)あて宮
- (八二)あて宮
- (八三)あて宮
- (八四)あて宮
- (八五)あて宮
- (八六)あて宮
- (八七)あて宮
- (八八)あて宮
- (八九)あて宮
- (九〇)あて宮
- (九一)あて宮
- (九二)あて宮
- (九三)あて宮
- (九四)あて宮
- (九五)あて宮
- (九六)あて宮
- (九七)あて宮
- (九八)あて宮
- (九九)あて宮
- (一〇〇)あて宮

わたりにぞあらむ。そのこと藤中納言(一)の朝臣(二)にもがな、と思(三)ふを、その心(四)を思(五)ひて、かの朝臣(六)に譲(七)りけなる氣色(八)とらせてを」と宣(九)へば、すなはち御前(一〇)にて綴(一一)り、書(一二)きて奉(一三)る。見給(一四)ひて、正頼(一五)「思(一六)ふやうなり」と宣(一七)へば、此度(一八)はとどまりなむ、とて奉(一九)らせ給ひぬ。

かよる程(二〇)に、内裏(二一)より中納言(二二)の君(二三)の御許(二四)に、大將(二五)かけ給ふべき御消息(二六)あり。おとど、宮(二七)に、仲忠(二八)「かうく、の事(二九)なむ、仰(三〇)せられたりつる。設(三一)の物(三二)などせさせ給へ」と申し給ふ。かよる程(三三)に、内裏(三四)より御辛櫃(三五)一(三六)よるひに、唐綾(三七)やまと綾(三八)織物(三九)、一つにはきぬ入れて、「これ、かの日の設(四〇)のものにし給へ」とて宮(四一)の御許(四二)に、奉(四三)り給へり。又源中納言(四四)の北(四五)の方(四六)の御もとより、あか色の織物(四七)の唐衣(四八)、から裳(四九)、すり裳(五〇)、繚(五一)のほそなが、三重(五二)がさねのはかま添(五三)へたる、女(五四)のよそひ五(五五)くだり、置口(五六)の衣箱(五七)にたよみ入れて奉(五八)れ給へり。こよかしこより、皆(五九)かやうにし奉(六〇)り給へり。ここにもまうけ給ふ。花紋(六一)繚(六二)など皆具(六三)せられたり。

自仲忠兼右大將に任せらる。参内。女官等の評判。俊隆の家集を推覽すべき勅を受く。

(一) 右大將兼左大將に轉じ仲忠兼右大將となる

(二) 正頼

(四) 今宮に

(五) 相手のなき意歎

(三) 唐衣濃き一唐衣それも濃き

かくてその日になりて右は左にうつり給ひ、中納言の君右大將かけ給ひつ。御よろこびとて、御装束、蘇枋がさね、繚のうへのはかまなど、あり難きうつしに入れ染めて、装束きて出で給ふまよに、宮をがみ奉り給ひ、北のおとどなどによろこび申し給ひて、右のおとどの御方にまかで給ふ。御供には四位八人、五位十餘人、六位三十人ばかり、御隨身ども、御前すべき人然らぬも多かり。方々の御前をわたりておはすれば、「あなめでたや」など言ひさわぐ。源中納言殿の方を見やり給へば、青色の簾に綺の端さして、懸けわたしたり。勾欄におしかよりて、簀子に童八人ばかり、青色に蘇枋がさね、繚のうへのはかま、濃きあこめ著て並み居たり。御簾の内に、四間五間にあか色の唐衣、濃きうちきども著たる人居並みたり。大將立ち留まりて、仲忠君はおはすや」童へ申す、「今朝内裏へ参らせ給ひぬ」おとど、仲忠御方に聞えさせ給へ。よろこび申しになむ。此度はかたきなき心地するを、かつは聞えさする」とて、遣水のほとりよりおはし過ぐれば、う

(一) 風俗の謠ひ物なるべし

(二) 兼雅也、右は「左」の誤なるべし

(三) 「心」は「こと」にの誤歟

(四) 方々の女に關係せし仲忠を

(五) 「の」衍文なるべし

(六) 女一宮をいふ

(七) たりたる

(八) 東宮にせず

(九) 仁壽殿は猶侍々他の妃たちに帝の寵を争はるる缺點あり

なるども扇をたよきて、「名取川に鮎釣るおとどの」と詠ひあへり。大將見やりて、仲忠「さ宜ふとも、え知らずや」とておはしぬ。右のおほ殿によるこび申させ給ひて、それより車まはさせ給ひて、内侍のかんの殿にまうで給ひぬ。それより内裏へ参り給ひぬ。かくて陣入り給ふより人々めづらしがる。女御、更衣の御局の前わたり給へば、人々、「いと珍らしく参り給へるかな。久しく見ざりつる程に、めでたくもなり勝り給ふかな。猶女一の宮こそいと心憎けれ。そこと心人に知らせざりつれども、物言ひ觸れぬなかりしものを、あからめもせさせで持給へるよ。仁壽殿の女御の、思ふやうにめでたき人なり。宮仕は、同じき帝と聞ゆれど、上にかぎりなく時めかされ奉りたり、女は、かく世に類なき人に、一つなく思はせたり。めでたし。男御子たちは、いと美しく、容貌よく、人に譽められつよ、あまた持たり。たゞ后にする、坊にするすといふばかりにこそはあめれ」又他人のいふ、「されど、こ

- (一) ありて宮
- (二) 東宮になるべき皇子は有ちたり
- (三) 承香殿、嵯峨院の女四宮
- (四) ありて宮をいふ
- (五) 嵯峨院等
- (六) 季明の女、昭陽殿
- (七) 「藏人どもして上に」なるべし
- (八) 朱雀の心
- (九) 仲忠が女一を何と思ひ居るならん
- (十) 此方(こなた)にを「を」をナシ

れは時々人まうのほりなどす。東宮のこそいみじかなれ。又二つ人あるものとも知り給はで、年頃になりぬ。などか、坊がねは持たり、いみじきものなめりかし。院の御方は、夜晝音をぞ泣き給ふなる。「昨日今日、兒みどりごと聞きつる人によりて、わがかよる恥を見つること。さりとして院にあらむとすれば、過もして寄せられぬやうに、上たちも思すべし。交らへば心肝安からぬこと」とこそは歎き給ふなれ」誰々も皆然にこそは。おほき大殿の君はた、大聲をはなちて、夜晝拜みのろひ泣きのよしり給ふれ。慰め聞ゆれども聞き入れ給はずとや」など局々言ひさわぎ給ふ。

大將の君、藏人ども上によるこび奏させ給ふ。上朱雀「斯く、よろこびは正しくなりにけるを、なほ此方にを」と仰せらるれば舞踏し給ひて、上りてさふらひ給ふ。上とばかり物も宣はで御覽するやう、わが女を、いと怪しうはあらじとてこそ取らせしか、いとこよなくもなり勝りにけるかな、如何に見給ふらむ、など思はし

- (一) 語釋
- (二) 仲忠とは聖舅の關係なるをいふ
- (三) 「世間のこと知られ侍らぬ」などなるべし
- (四) 傍の意歎
- (五) 「りさう」は「家集」を音便に「かさう」といへるより誤れるに倣陸の事ならんと春海翁の説なり
- (六) 考異
- (七) 久しくは「は」ナシ
- (八) がたうて「がたくて
- (九) ものども其處に「ものどもなし藤英がため殊に輕しやことなるもなければそこに

入りて、とばかり思ひし給ひて、朱雀などかいと久しくは。先つ頃節會などありしに、参られやすと思ひしに、然もあらざりしかば、いとさうへしくなむありし。人よりは睦しかるべき心地するを、疎き上達部などよりは。されば、物せられむこそよからめ」大將かしこまりて、仲忠「日々参り來べく侍るを、月頃仲忠が先祖に侍る人のし置きて侍りける書どもなどの、いと侍りがたき所に、棄てたるやうにて侍りけるを、さすが人のえ取り失はで侍りけるを、いと見捨てがたうて、取り出でて侍る、累代の書の抄物といふ物見給ふとてなむ。文書といふもの見給へつきぬれば、世間のこと侍らぬものなりければ、籠り侍りぬる」上、朱雀「よき事にこそはあなれ。學問など心に入れてものせらるよは、公の爲にもいと頼もしき事なり。高麗人も來年は來べき程なるを、博士の男どもとても、昔の如く賢きものども殊に少ければ、藤英がたへ殊に輕しや。其處にありつぎては、りさうの朝臣をこそは頼もしきことには。それをばなちては、賢しと思ふ者どもぞあ

〔語釋〕
(一)「それをば然るものにて」なるべし

(四)俊隆の父

(七)なくりーなり

(八)文書に―ふみの序に

〔考異〕

(一)無き書なく侍りけり―なき書などは侍らざりけり

(三)朝臣―朝臣の

(五)その―ナン

(六)俊隆―俊隆の朝臣

らぬと思ふに、さる文書、文などをさへ尋ね出でられたらむ、いとかしこき事。萬の書どもなど、具して皆ありや」仲忠「みな具して、無き書なく侍りけり。俊隆の朝臣の、手かき侍りける人なりける盛に有識に侍りける、それが皆、書き讀みて侍りける、またく細にして侍るめり。それをぞ然るものにて、いといみじき物をなむ見給へつけたる」上、朱雀「如何なるものぞ」大將、仲忠「家の古集のやうなる物に侍り。俊隆の朝臣唐土に渡りける日より、父の朝臣の日記せし一つ。詩、和歌しるせし一つ。その亡せ侍りける日まで、日づけしなどして置きて侍りけるを、俊隆歸りまうでける日まで、作れることも、その人の日記などなむ、その中に侍りし。それを見給ふるなむ、いみじう悲しう侍る」など奏し給ふ。上、朱雀「なかいか今まで物せられざりつる。有識どもの、いみじき悲びをなしてし置きたる物、けに如何ならむ。なほ朝臣は、ありがたきもの領せむと成れる人にこそあれ。疾く見るべき物なより」大將、仲忠「見給へしすなはち奏すべく侍るを、かの文書にい

〔語釋〕
(一)唐土一本「もたう」に作る、「もたう」は「渡唐」の誤歟

(四)近衛府の官人などを擁護する等なるべければ

〔考異〕

(二)つゝみて―つゝしみて

(三)祟なきじ―祟はなきじ

(五)時―時に

ひて侍るやうは、「唐土のあひだの記は、俊隆の朝臣のまうで来るまでは、他人見るべからず。その間、靈添ひてまもる」と申したり。俊隆の朝臣の遺言に、「この書は、俊隆後侍らず。文書のこととは、はかなき女子知るべきにあらず。二三代の間にも後出でまうで來ば、そが爲なり。その間、靈よりて守らむ」となむ申して侍る。それにつゝみて今まで奏せ侍りつる」上、朱雀「賢かりし人なれば、朝臣を後に得べしと知りたるにこそは」大將、仲忠「けにその文書をおきて侍りける所、年頃は、あたりにまかり寄る人は皆死に侍りける。その藏開かせ侍りしかば、ほとりに侍りしもの、「いとおどろくしき事せさすめり。多くの人々徒らになりぬ」と怖ぢ侍りし」上、朱雀「朝臣の讀みて聞かせむには、その靈ども、よも祟なきじ。今日はつかさのものども勞ることあらむを、今日過して、しめやかならむ時、その家の集どもも、詩の抄物どもも持たせて物せられよ」と宣ふ。承りて立ちたまひて、後の宮に參り給ふ。

④仲忠東宮に参る。東宮あて宮と仲忠の噂。

(一)仲忠は前にも近衛の中將なりしをいふ

(二)此仲忠の詞誤脱あらんか

(四)引歌未詳

(六)「ば」の「へ」衍文歟

(考異)
(一)今も一そも

(五)君よりそとみくには大方こそ一君よりそもみにもおぼえんこそ

それより東宮に参り給ひて、まづ上によるこび申させ給へば、藤壺になむおはし
ましけるを、出で給ふとて、藤壺にまうで給ひて、孫王の君して御消息など申さ
せ給ふ、仲忠「久しくさふらはざりつるを、今日はよろこびになむ。わいても閑召
し古りたらむに、珍らしけなくや」と聞え給ふ。孫王の君、御前に聞ゆれば、宮
裏宮「そや、右大將の御消息あめりや」とて告げおどろかし奉り給へば君、あて宮年
頃ちかきまもりに聞き侍りつるを、今もかけ離れ給はざるを、喜び聞えさせむ。
珍らしくなむと承るを、今日の御心地のやうに」と言はせ給ふ。大將、仲忠「今
日のやうに思されば、いとおほかるべき日になど聞え給ふよとて忘れはて給ひた
らむなと」孫王の君、「誰がならばしの」といふ。いらへ、仲忠「君よりそとみよ
には、大方こそともかくもあらめ。私心をあらむものを、などか思し棄てたる一
孫王の君「それも今はなぞ」大將、仲忠「むかし思しなすか、萬忘れずながらこそ。
いかにぞ宮の御心ばへ」孫王「昔ながら、今はまして立ちまさりもし給はでぞ、む

(語釋)
(一)あて宮が

(四)仲忠の舊情を思出し
てか時々むやみに怒りて
我を憎むは、あて宮にい
ふ也

(五)「給ふはや」なるべ
し

(六)容貌變動などは我非
常に仲忠に劣りたれども

(考異)
(二)それを「を」ナシ

(三)給ふ日も一給ひひる
も

つかられおはしますめる。よからぬ事の様々に聞ゆるまよに、御心もゆかで、
かでて心をだにやらむ」と聞え給へど、ゆるし奉り給はねば、夜晝ぞむつかりお
はします」仲忠「このよからぬ事の筋には、梨壺のも安からざらむかし。これを思
ふこそ、かたはらいたけれ」孫王「いで、それをのみぞ。いさよかなる御事は、聞
え給はず、思し隔てたる御氣色なくて、時々まうのほらせ給ふ日も、わたらせ給
ふ時あるまでは、憂きことのみ」君、仲忠「まことにや、ことばは聞えぬばかり給
はる」孫王の君「何しに侍らむ。まづ御後見はこならぬこととこそ」仲忠「いで
自らのよろこびよりも、先これを申さむ」孫王「あひなうすかせ給ひて、そがよろ
こびをせさせ給ふらむよ」など立ちながら宣ふを、宮御簾の内に立ち給ひて見給
ひつよ、東宮「いと警策にもなり勝りにける人かな。如何にあらむとて、斯くある
らむ。いとかよるをも親などはゆよしと見るらむかし。この昔の心おほし出でた
る時か、取りも敢へず、たどむつかりにむつかりて憎み給ふてや。かたち、する

〔語釋〕
(一)東宮ともある者は女一人を守るものにはあらざれども

(二)他の女を寵することなし

(四)仲忠、梨壺と仲忠とは兄妹也

(五)どの妃たちをも前々の様に寵愛ありてこそ

(七)正頼

(八)大宮なるべし

〔考異〕
(二)ゆく先―ゆく末

(六)こそは―は―ナシ

わざこそ、こよなからめ、志はならぶ人あらじ、とぞ思ふや。かやうにてある人は、一人につきてはあらざなれど、其處に人をならべては見せ奉らじとこそ、今もゆく先も思へ。参り給ひて後はことに然る事もなし。梨壺ばかりこそ、心もおいらかに、見る目もきたなけなきうちに、親なども心ある人なり。この朝臣の聞くやなど思ひて、時々まうのほらせ、渡りて見などもすれ。それも、然なせそ、と思さば、さも爲じかし」君、あて宮、いと怪しきこと。誰も、早うおはしけむ様にておはせばこそ、さふらひよからめ。さらではいと聞きにくよなむ」宮、東宮、さ覺えざらむ事をば如何せむ。そこばかり、もの思はせ給ふ人こそなけれ。里にものし給ひし時も、夜晝こそは思ひしか。やむごとなき事ありて、まかで給ひても、長居をのみし給へば、いかどは思ふ。すべてまかでなし給ひそ」君、あて宮、いとわりなき事。いかでか小き人々を見奉らでは」宮、東宮、それは、呼びにやりて見給へ。此處にも見む。おほいまうち君などは、ことにて逢ひ給ふめり。今一所は、

〔語釋〕
(一)「あるじし給へれば」歟

近衛府の慶賀の祝宴。

〔考異〕
(二)上中下―中―ナシ

(三)まかで給ひける―上達部などは立ち給ひける

文して萬のこと聞え給へ。里住し給ふ時は、つれく〜にいと便なくて、物も食はれずなむ」など更に許さじとぞ思し給へる。

畫詞 ことよは藤壺。

かくて大將殿は、梨壺にまうで給ひて、物など聞え給ひてまかで給ふまよに、御つかさの人待ちうけ奉りて、おし立てて遊びて、殿におはす。殿には、あるべき様に御座所しつらはれたり。例の中のおとどの南の廂に、幄ども打ちわたしたり。中將少將参らぬ人なし。いといかめしくし給ひて、夜一夜あそぶ。さる物の上手のあるじとなれば、いかで難なく聞かれ奉らむとて、遊ぶこと限なし。曉がたに皆、少將よりはじめて、上達部、物かづき給ふ。上達部は、例はかよるわざなきを、はじめの度なれば、上中下、別の祿など賜ひわたして、明くるまで遊びてなむまかで給ひける。

藏開(中)

梗概

● 仲忠祖先の遺文を進覽す。東宮以下列席。俊蔭が入唐の日記。仲忠退出。仁壽殿女帝の東宮に對する教訓。仲忠帶を賜はる。● 仲忠退出。仁壽殿女帝に帝の仰を傳ふ。恩賜の帶を正頼に示す。正頼帶の來歴を語る。● 今宮男子を産む。仲忠母の許に招かる。● 仲忠父と語る。梨壺懐胎の事を告ぐ。父の妻妾を一所に集めん事を乞ふ。涼に産養の物を贈る。● 仲忠、女三宮の邸へ父の使にゆく。女官に菓實を投げつけらる。● 復命。菓物の中の文。兼雅の述懐。女三宮等を迎ふべき準備。● 涼の家の産養。

● 仲忠祖先の遺文を進覽す。東宮以下列席。俊蔭が入唐の日記。帝の東宮に對する教訓。仲忠帶を賜はる。
 (一) 仲忠
 (二) 見ゆれば一見ゆるは

かくて一二日ありて、大將殿内裏の仰せられし文ども持たせて参り給ひて、其の由奏せさせ給ふ。帝、朱雀「此の朝臣に見ゆるこそ恥かしけれ。警策に心憎くて、見るに神さびたる翁にて見ゆれば、女一の御子の面伏なりや」と宣ひて、うち假粧じ給ひて、晝の御座におはしまして、召し入れて、朱雀「いづら」と宣へば、沈の文箱一よろひ、淺香の小辛櫃一よろひ、蘇枋の覆したる一よろひ持て参れり。

藏

開(中)

〔考異〕
 (一) 切りて一おしきりて
 (二) 厚さ一づつありナ
 (三) 手づから點し一みづ
 (四) 讀ませ一讀ませ
 (五) 七八枚一七八枚のふ

明けさせて文箱を御覽すれば、文箱には、唐錦を二つに切りて瑩じたる、厚さ二寸ばかりにつくれる一箱づつあり。俊蔭の主の集、其の手にてまな文に書けり。今一つには、俊蔭の主の父式部大輔の集、草にかけり。朱雀手づから點し、讀みて聞かせよ」と宣へば、文机の上にて讀む。例の花の宴などの講師の聲よりは、少しみそかに讀ませ給ふ。七八枚讀みて、やがて一度は訓に、一度は聲に讀ませ給ひて、面白しと聞召すをば誦せさせ給ふ。何事し給ふにも聲いと面白き人の誦したれば、いと面白く悲しければ、聞召す帝も御しほたれ給ふ。大將も涙を流しつと仕うまつり給ふ。悲しき所をばうち泣かせ給ひ、興ある所をば興じ給ひ、可笑しきをば打笑はせ給ひつと、こと御心なく聞召しくらす。上達部、殿上人等は、大將の、仰にて御文講せさせ給ふとて、参り集ひ給へり。されど、人に聞かせじとて、高くも讀まず、御前には人も参らせ給はず。誦せさせ給ふばかりをぞ僅かに聞きける。

〔語釋〕
 (一) 女一宮に
 (二) 「西の御方」歟
 (三) 君と隔りて寐る夜はせめて衣とて誦らひて慰むべしといふ意歟

〔考異〕
 (一) しめやかなれば夜一なりぬまた
 (四) ちかにもといふこと侍るなりといふこと侍るなりといふこと侍るなりといふこと侍るなり
 (五) わびても一わびても
 (七) 置口の一置口かりの
 (八) 下袴一下袴を

かくて仕うまつり暮らす。上、朱雀此の頃は夜長にしめやかなれば、夜聞かむ。なまかでそ」と宣へば、夕暮に殿上に出で給ひて、宮に御文奉れ給ふ。仲思まかで侍りなむとすれど、御書聞召しして、夜仕うまつれと仰せらるればなむ。夜寒を如何にとなむ。南の御方おはしまさせ給ひて、諸共にを。犬召して御前にさふらはせ給へ。まかで侍るまでは、御帳の内出でさせ給ふな。おいらかにもといふこと侍るなり。誠や宿直物賜はせよ。わびても、衣だにと語らひて。なめし。中務の君讀み聞え給へ。

とて奉り給へば、あか色の織物も、たどの綾も綿入れて、白き綾のうちき重ねて、六尺ばかりの貂の裘、あやの裏つけて、綿入れたる、御包に包ませ給ひ、置口の御衣箱三よろひに、いと赤らかなる綾、かいねりのうちき一重、同じ綾のうちき重ねて、三重がさねの夜の御袴、織物の直衣指貫、かいねりがさねの下袴入れ、包に包みたり。色香掃目、世になくめでたし。はなちの箱、泔坏の具など奉

れ給ふ。御返は中務の君、

斯くなど聞えさせつれば、御宿直物奉らせ給ふ。夜寒は、何ともまだ思し知らずとなむ。犬宮は然おはします、と聞えさせよ、となむ。

とて奉れ給へば、大將見給ひて、「あぢきな宣旨書や」と獨言ちて宿直装束しかへて、召あれば参り給ひぬ。

夜さりのおもの参る。朱雀「勅負やある」と召し出でて、朱雀「此の朝臣勞れや。里にてうしろめたく思ふらむ。此處にておろしを物せよ」とておろさせ給ふ。朱雀「これ

れを彼を」など御覽じつどけさせ給ふ。后腹の宮にさふらひ給ひけるに、酒殿に御酒召して、朱雀「書は酒こそはやせ。近衛は酒はなれては何業かせむ」と宣ひ

て賜ふ。五宮に、朱雀「くしは」など宣へば、五宮「檜割籠侍り」上、朱雀「さらば強ひよや。去ぬる年の十五夜に、そこたち強ひためり。此處にても」と宣ひて御覽じて、「斯ばかりに」とて賜へば、兎も角も聞えて、賜ふ限り飲みたる、いと良きほ

〔語釋〕
(一) 勅負の命婦

(二) 帝の御膳部のおさがりを戴かせよ

(三) 「五宮の」なるべし

〔考異〕
(一) 里にてーさぎ

(二) くしはーくしそ

〔語釋〕
(一) 以下朱雀の心

(二) 我が手前をかねて質は愛せねども愛する振をするのか知らぬと
(三) 私の琴が俊儀の様に上手ならばよからんに
(四) 「言ひ」なるべし
(五) 夜警の武士のいふ也

〔考異〕

(一) 呑み果ててー呑みて
(二) 人にこそありけれー人にぞありける
(三) 女御参りー女御更衣参り
(四) 沈みにしぞかしー沈みつき大臣にもえならずなりにしぞかし

どなり。酒などうち呑み果てて、文に對ひたる火影、顔ありさま、いとめでたし。上、見る目よりも近まさりする人にこそありけれ、一の宮まことに志ありてや思ふらむ、又我が心を思ひたるにやあらむと思す。斯くて書讀ませて聞召す女御参り給へり。其の夜は承香殿の御宿直なり。夜更け行く儘に、文讀む聲誦する聲も、いと哀に面白し。上は琴の琴かき合せつと、誦せさせ給ひつと、聞召す。朱雀「あはれ、此の朝臣の、昔琴を習はしたりましたかば、如何によからまし。此の事によりて、身も沈みにしぞかし。大臣にもなりなましものを」大將、仲思「いとあぢきなう侍る人にこそ」上、朱雀「あなにく、もどきしにこそ」大將、仲思「其の朝臣のやうならましかば。かれはいといみじう侍りけるものを」上、朱雀「空言かな。彼の朝臣には、音もこよなく勝りたりと聞きたる人も言へ、聞きしに然こそあれ」と宣ふ程に、「丑の前」と申せば、朱雀「夜更けにけり。暫し打休みて、つとめてこそ」と宣ひて入らせ給ひぬ。

〔語釋〕
(一)仲忠
(二)「牛の機にては」歟

〔考異〕
(三)何なり―何なる―な
りけり

(四)と―とて

大將の君は殿上に臥し給へり。此の君さふらひ給ふとて、殿上人いと多かり。寢入らで身じろき臥し給へれば頭中將、實頼昔は寐ぎたなくおはせし殿の、なかうしの様にてはさふらひ給ひにたるぞや」と宣へば、仲忠「そへに」といらへて臥し給へり。

つとめてになりて、上、起きさせ給ひて、殿上の方にみそかにおはしまして垣間見をし給へば、大將殿、人の見ぬかたとて、奥に向きて文書き給ふ。

仲忠昨夜ばなどか御返は宣はせざりけむ。覺束なくなむ。宿直物賜はせたりしにつけても、

から衣たちならしてしもよしきの袖こほりつる今宵何なり

いかでうちはへて、とこそ思ひ給へつれ。今日もや宣旨書は、いみじうこそ思ほしおとしたれ。

と白き色紙に書きて、咲きたる梅の花につけて、主殿司に、仲忠「宿直所に男ども

〔語釋〕

(一)祐澄

(三)仲忠が女一宮を

(四)仲忠が

(九)人に見らるるかと思ひて自筆では書かざりき

〔考異〕

(二)とて―といひて

(五)書き―あかき

(六)捧げて―て―ナシ

(七)御返とて―御返事と

(八)思ひ給ふめり―思ふめり

あらむ。取らせよ」とて賜へば、宰相の中將の君の御子、宮はたと言ひて八つばかりにて殿上にあり、それ、宮はた「まるをつかひ給へ」とて、奪ひ取れば、仲忠「な

ど斯くは宣ふ」と宣へば宮はた、「宮の御もとなれば」と言ふ。大將、仲忠「其をばなど」と宣ふ。宮はた「父君の思ひ奉れ給へばまるも」と取りて、殿上口に立

る侍の人に取らせつ。上は、疎には思はぬなめり、つとめて文やるは、と見給ひて、やをら入らせ給ひて、例の御座所におはしまして、暫しありて召せば、装束して参り給ひぬ。五の宮も御前にさふらひ給ふ。

さて御書仕うまつる程に宮はた、青き色紙に書きて、呉竹につけたる文を捧げてきて、宮はた「宮の御返」として持て騒ぐを大將殿、仲忠「暫し今」と言へば上、朱雀持

て来や」として取らせ給へば大將殿いとかたはらいたく、苦しと思ひ給ふめり。上御覽すれば、

女一昨夜は散らされもやするとてなむ。思ひおしたりとかありし。其のわたり

(語釋)
 (一)朱雀の心
 (二)か又をに作る、これによれば「こ」は衍文歟

(七)私の所へ参りて

(考異)
 (二)御手に似て一御手の

(四)たゞに一だに

(五)ざなり一ざんなり

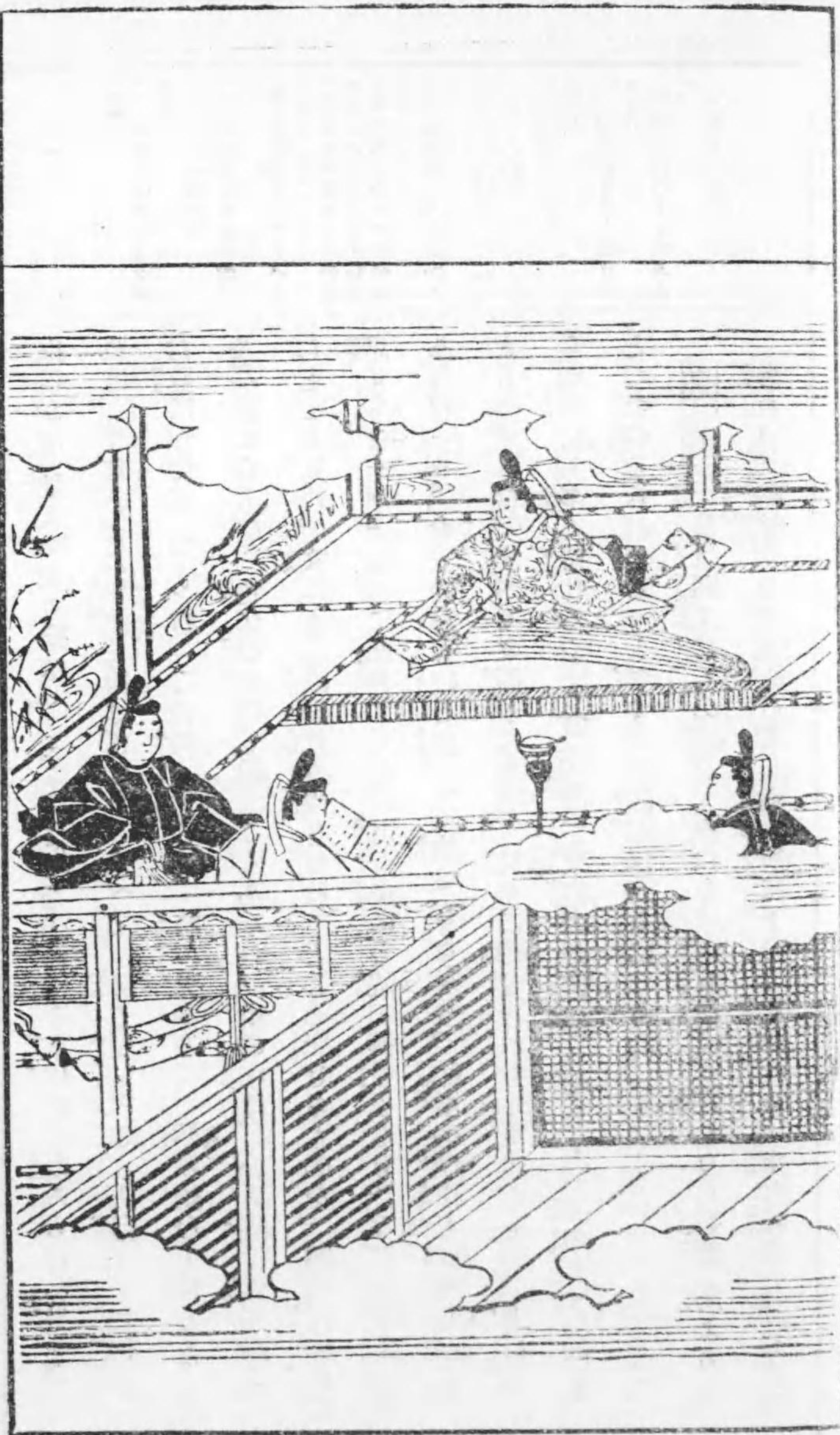
(六)ざなれば一ざんなれば

(八)にかあらむ一にかはあらむ

にては、

消えずのみ見ゆる思ひもあるものを何か袂の凍りしもせむ
 誠や装束どもも物せさす、昨日のが見苦しかりしかば。これも殊更にぞあなる。

といとをかしげに書き給へり。女御の君の御手に似てあてに若くは見ゆれど、おとなしくも後見おこするかな、と思して、押し巻きて投げ遣はしつ。大將賜はりて見て、仲愚何事にか侍らむ」とて懐に入れつ。上、東宮に、五の宮を御使にて、朱雀昨日よりいと有り難き書をなむ、右大將に讀ませて聞き侍る。わたりて聞き給へ」と聞え給ふ。五の宮打笑ひ給ひて、五宮えのほり給はじ。更にたどにおはせざなり。吾が所に籠りおはして、上にも物し給はざなれば、男ども侍る所に(五)まうで來つよ、「此の月頃御前にさふらはぬ事。すべておほん顔なむ見奉らぬ」と(六)なむ嘆き侘び申す」上、何處に物せらるよにかあらむ」五宮、藤壺ならでは何(七)



〔語釋〕
 (一)嵯峨院第四の皇女承香殿
 (二)仲忠の妹梨壺
 (三)承香殿は嵯峨の愛子なり
 (四)嵯峨の皇女なるべし
 (五)祐澄は前々より仲忠の妻たる女一の宮に心を寄せ居る故女三に冷淡なる也
 (六)夫を持たぬがよからぬ
 (七)「大將は」は「こは」の誤歟

〔考異〕
 (一)給はざなり給はざるなり
 (二)孕み給ひてにんして
 (三)など一と

處にかは。他人を知り給はどこそあらめ」朱雀「御子を如何にし奉らむ」宮、五宮「それは、今年いまだ對面し給はざなり。すべて、誰も見奉ること難く、如何ならむ隙にか侍りつらむ、この御妹こそ、時々見奉りて、孕み給ひて侍るなり」朱雀「あたら人の、色の心ものし給ふこそあなれ。世の中は、いと能く保ち給ふべしとこそ見れ。文にも「酒を好み内を好む」とこそ記せるものを。四の宮如何に思すらむ」五宮「如何に聞召すらむ。其が中にも院の御愛子なり。など言痛くのみあらむ」朱雀「女三の宮もいと哀にて物せらるなり。祐澄の朝臣も如何しなむともものすらむ。すべて女御子たちは、たどに物せられむこそよからめ。身に良からぬ宮たち多く持たるや」と宣ふ程に、東宮の御使歸り來りて、「唯今まうのほる、となむ仰せられつる」と奏す。巳四刻ばかりになりぬ。

〔畫詞〕大將は殿上にももの調じするたり。宿直所に、宮よりも臺盤所よりも、参れり。御前より立ち給ひて、宿直所に下りて居給へり。來り物ども調じする

〔語釋〕
 (一)東宮と云

〔考異〕
 (一)大將を召せど暫し一六將目をしばし

たり。御装束は 蘇枋がさね、線の上のはかまなどにて、いと清らにかうばし

くて奉れ給へり。四位、五位數多参れり。装束解きひろけて臥し給へり。

午の時ばかりに東宮いみじく清らに装束き給ひて、まうのほり給へり。御褥など参りて、御前におはします。大將を召せど暫し休むとて、まうのほり給はず。御

装束しかへて参り給へり。物の色うつくしき類なく、匂深く、例の御書仕う

まつる。聞召しくらして、暗くなりて、まだ御殿油まるらぬ程に、大將下り給

ひて、藏人して奏せさせ給ふ。仲忠「まかで侍りて、つとめて参らむは、如何侍ら

む」と奏せさせ給ふ。上、朱雀「暮れ難く明けやすきうちに、夜なむいと興ある。参

でられずやよからむ。また客人の物し給ふを」と宣ふ。大將いたく歎きて、宮に

御文奉れ給ふ。

仲忠「今朝は喜びてなむ。すなはちと思ふ給へれど、「まかでなむ」と侍りつれど、許させ給はねば。其のわたりにとか侍りつるは、あな古めかしや。」

〔語釋〕
(三)「心にもあらで世にながらへば」の歌は三條院の御歌也時代可考

〔考異〕
(一)昔のみきくにしものを一昔へはきえにしものを一昔へときくにしものを

(二)左右に奉りたりさちたてたりさち奉る

(四)とも一とも一とぞ

昔のみきくにしものを程もなき戀にぞそではいろ燃えぬべき
昨日は今日こそ侘しきものとは。誠や、きたなきものは賜はり侍りぬ。犬は如何。聞えたりし様にや。

とて、昨日の御装束どもは奉れ給ひつ。暗き程になりて御返なし。

上よりしきりに召せば、物など参りてまゐり給ひぬ。上、朱雀書は、夜なむいと

興ある。今宵は此處に聞き給へ」と東宮に聞え給ふ程に、雪少し高くなり、御殿

油まゐりて、短き燈臺左右に奉りたり。上の御前に琴の御琴、東宮の御前に箏

の御琴、五の宮琵琶、御前ごとにうち置きて、大將は書讀み給ふ。上あからさま

に入らせ給へる程に、大將書の點直すとてある筆を、東宮取らせ給ひて、御懷

紙にかく書きて、藤壺に奉り給ふ。

東宮今宵は書聞けとのたまへば、心にもあらでなむ。ながらふともいふなるもの

を、

〔語釋〕
(二)宮はたは

(三)「すとて」は「すなり」歟、一本「するなりとて」

(四)あて宮

(五)「何ならむ」歟

(七)東宮の心

(八)異あるべし

(九)あて宮の事をあきらめては居れど

(一一)東宮が

〔考異〕

(一)侘しき一はかなさ

(六)にては「は」ナン

(二〇)騒げば一騒がれて

(一一)多くすべきを一すべきに

白雪のふればはかなき世の中を獨りあかさむことの侘しさ
あらむ世の限だにこそ。

とて宮はたに取らせ給ふ。これは藤壺をおやにし奉りて、東宮の殿上もすとて、
持て参りて奉れば君、白き紙に、

あて宮うきことのまだ白雪の下消えてふれどとまらぬ世の中はなぞ

憂からぬはとこそ。何かならむ、思ひ給へられず。

とて宮はたに、あて宮上、大將などの御前にては、な奉りそ」と宣ふ。参りて、宮

の御後にさふらふ程に、御書讀むさかりに、上あからめし給へる間に、宮取りて

見給ひて、世の中を心憂しとも思ひたるかな、心に身を任せば、人の心ごとによ

りて、などうち涙ぐみ給ひて見給へるを、大將見合せ給ひて思ひやみにしかど心

地うち騒げば、鎮むとすれどひが讀を多くすべきを、點一つも讀み誤たぬを、怪

しと思して、打ちほよ笑み給ふを、大將見奉りて笑ひぬ。上もえ念じ給はで笑は

(語釋)
 (三)解しがたし
 (四)誤あるべし
 (五)俊隆
 (六)「手こそ」は「こゝそ」歟

(考異)
 (一)面白し聲うちしづめて面白くあり聲うちしづめて面白しうちしづめて
 (二)雲居をうがちて一雲居にとほりて

せ給ひぬ。大將いとほしと思ひて、かい直して、いと面白く讀みなす。其の聲いと面白し。聲うちしづめて、いと高く面白く誦する聲、鈴を振りたる様にて、雲居をうがちて、面白きこと限なし。御前なる御琴ども掻き合せ給ひて、朱雀書の祿に何よかりなむ」と宣へば、五の宮、「又はいかですか。此の度にはまかりならばや」上、朱雀いと難からむ。文才には何かは」とて御時よく笑はせ給ふ。朱雀「さて、是はしばし斯くて、此の冊子を讀まむ」と宣ひて、今一箱のをはじめて讀ませ給ふ。これはいと讀みてあり、あはれに面白さも優れり。上、「文才はなほ此の朝臣のは優れりけり。怪しく此の族の手こそ優るなるかな」と宣ひて、夜一夜面白き句ある所を誦せさせ給ひて、御琴どもに合せさせ給ふ。曉方に、いと面白き所あり。大將に誦せさせ給ひ我も誦じ給ふ。五の宮に、朱雀「誦せよ」と宣へば、ともかくも宣はで、打出でて誦じ給ふ聲いと面白し。東宮誦し給はず。かくて、曉方になりぬ。東宮に、朱雀「なほ明日ばかりは此方にを。いと御心つき

(語釋)
 (一)祐澄は其方の姉を愛するか
 (二)女三の宮祐澄の妻
 (三)女三が
 (四)父は何れの宮を得たしといふぞ
 (六)父が彼處の外に思ふ所なしといふ故仁壽殿へ行きてみればといふ事歟
 (八)「よし」は「さかし」歟

ぬべきもの侍り。それ見せ奉らむ」とて御几帳たてておはしませ給ふ。上は入らせ給ひぬ。五の宮は、臺盤所に入り給ひて、藏人たちの中に御殿籠りぬ。大將は、侍に出で給へば、宮はたともに往ぬ。大將臥し給ひて、宮はたを懷に臥させ給ひて、語らふ。仲忠「姉君は、大きになり給へりや」宮はた、「大きにもなり給はず。小さくもおはせず」と言へば、仲忠「御髪は長しや」宮はた「いと長けなり」大將、仲忠「父君は、うつくしうし給ふや」宮はた「いさ知らず。弟宮をこそ、夜晝抱き給へ」仲忠「いで弟宮は、幾らほど大きにおはする」宮はた、「今ぞ立つめる。いとをかしけなり」と言ふ。大將、「など父君は、宮をば思ひ奉り給ぬぞ」宮はた「いさ、南の方に出で居て、餘所人に見なし奉りつる、とて泣きなどこそし給へ」大將、仲忠「何れの宮をとか宣ふ」宮はた、「そこをおきていづれかはと言へば、内裏の上の御許にまうづれば、いと清らにて常に見え給ふぞかし」大將、仲忠「さて其をば思ひ奉るぞ。見奉らむとや」と言へば、「よし」と言ふ。仲忠「さて御文は取り入る

〔語釋〕
(一)あて宮に

(四)「なきこと」は「なきこと」歟

(五)仲忠

(七)女一宮

(八)仲忠が

〔考異〕

(一)女に―女房に

(三)給ひつる―給へる

(六)よかなる―よかなる

(九)よべは―は―ナシ

るか」宮はた、「然ぞかし」大將いみじう笑ひて、仲忠「我も得させむに物な思ひそ。さて藤壺に参らば、仲忠なむ然聞ゆる」とて、「日頃さふらへど、暇の侍らねば、え参り侍らぬ」と申し給へ」など言ふに、つとめてになりぬ。
宮はた起くれば、頭かいつくろひ、装束せさせて遣りつ。藤壺に参りたれば、御たち、「あな芳しや。此の君は、女の懐にぞ寝給ひける」宮はた「然かし。右大將のおとどの御懐にぞ寝たりつる」御たち、「女にこそは」と言ふ。上に申し給ひつること聞ゆれば、君、あて宮「さふらひ給ふと承れば、頼もしき心地なむ。御暇の頃は、然いふ様あなり」と言はせ給へば大將、仲忠「いとけやくも、よからぬことなきこと」など聞え給ふ。藤壺、「此の君は何處なるぞ」と問ひ給へば、「殿上に」と言ふ。藤壺、孫王の君に、あて宮「彼の言ひしことは、今の間にぞよかなる」と宣ふ程に、宮の御文あり。見給へば、
(七)女よべは思はぬ様に有りしかば、夜もすがらなむ。何事をか然までは。
(九)

ふるかひの何かなからむあわ雪も積れば山とならぬものかは

とて、

女「つらからぬをのみこそ。然らぬ事をばな思しそ。暫しとあればなむ。對面に

を。

とあり。御返は、

仲忠山となる雪ぞのよしく思ほゆるたえて越路のものとこそ聞け

其れをこそ思ふ給へあるまじけれ。

と聞え給ふ。

かよる程に雪高く降りぬ。大將の君、宮の御許にかく聞え奉り給ふ。

仲忠夜の間は如何。御返も給はせざりしかば、覺束なくもなむ。更に散らし侍ら

ぬものを。

かくばかり見ねば戀しき君をいかで知らで昔をわが過しけむ

(二)な思しを暫しと―なほほほぞらにはと

(三)御返は―御返りごと

(四)ゆきしく―ゆきしく

(五)なくも―なくと

(六)いかで―おきて

〔語釋〕
(六)涼、藤英、忠澄。「中納言」は「權中納言」なるべし

〔考異〕
(一)思しや知らむと一思し知るちむと一思しや出るちむと

(二)犬こそ一犬こそこそ

(三)御返一御返事

(四)には一へは

(五)思して一おもはして

(七)此の一ナシ

(八)夜に「夜」ナシ

(九)得ぞ「ぞ」ナシ

(一〇)あがりし一あがりし

と聞えさするも思しや知らむ、と思ふ給ふるこそ。かつは犬こそいと戀しう侍れ。我が君、御懐に抱かせ給へ。今朝の雪こそいと寒けなれ。
と聞えて御返見て御前には参らむ、昨日の様にこそぞ持て騒ぐ、と思して、暫し参り給はず。

殿上には、源中納言、右大辨、中納言、他人もいと多かり。右のおほい殿の君たち、數多ものし給ふ。源中納言、大將の君に申し給ふ様、萬などか君は、昔よりいかばかりかは契り聞ゆる。此の御書を承らむとて、妻子の懐を捨てて、斯く寒き夜に、ふるふくうちはへさふらふ効なく、一文字をだに聞かせ給はぬ。少し高くだにやは仕うまつり給はぬ」大將、仲思「仰せごとあれば、高くは得ぞ。そが中に、苦しう侍れば、聲も出でず」中納言、涼さて、いかで昨夜は、一度は雲をうがちて、空にはあがりし。此の主こそは、我が世の末の博士とは思ひつれ。それすら、酒を参りて、惑ふまで、讀みのよしらせ給ひしかども、腸の斷えしか

〔語釋〕

(五)未詳

(七)未詳

(一二)奉り給へり」行歟

〔考異〕

(一)立ちやすき御腹一たやすき御耳

(二)よろしからめ一よろしくは

(三)給ふと一給へと

(四)出で來まじき事どもなり一出づまじき事なり

(六)げにばうぞくのけけんかしぞくの

(八)おももの一いを

(九)同じき一き」ナシ

(一〇)むすび袋一すき袋

(一一)地黄煎一ざかうせん

ば、御聲の限をこそ聞き侍りしか。文字一つも覺えぬは、すべて君は、涼をぞまどはし給ふ。琴彈き給ひては、はだか鶴脛にて走らせ給ひて、殿上まで笑はせ奉り給ふ」大將、仲思「立ちやすき御腹にこそあれ。今も聞い給ふまではえ仕うまつらじや」中納言、涼「なほ物の底にな讀み入れ給ふぞよろしからめ」大將、仲思「石の辛櫃に入るとぞかし」右大辨、藤英「壁の中に納めさせ給ふとにやあらむ」大將、仲思「さては、主ぞ埋もれ給はむ」中將、行政「明王の御世に出で來まじき事どもなり。此の御書祕せらるよよし、行政こそ承りつけたれ。理なり。けにばうぞくの身こそあぢきなけれ。誰か聞き知りたらむ」など言ふ程に、藤壺より、大きやかなるしふたいの程なる瑠璃の甕におもの一盛、同じき平坏に生物、凹坏に干物盛りて、同じき瓶の大きなるに御酒入れて、銀のむすび袋に、信濃梨、干棗など入れて、銀の銚子に、地黄煎一調子入れて、奉り給へり。炭取に小野の炭入れて奉り給へり。集まりて興じて、皆取りすゑて参る程に、大いなる銀の提子に、

〔詠釋〕
〔一〕取手

〔三〕誤あらん歟

〔四〕「こくち」は「こくち」歟

〔考異〕
〔二〕羹―あつしも

〔五〕こくちしあらむ―こくちもあらぬ

〔六〕なかりしと―なかりしかど

若菜の羹一鍋、蓋には黒方を大いなる土器の樣につくりくほめて、覆ひたり。
取所には、女の一人若菜摘みたる形をつくり、それに、孫王の君の手してかく書きたり、

孫王君が爲春日の野邊の雪間わけ今日の若菜をひとり摘みつる

羹をば、かくなむ仕うまつりなりたる。聞召しつべしや。

と書きつけて、小き黄金のなりひさごを奉り、雉子の脚、おり物に高く盛りて

添へ奉り給へり。集まりて笑ひのよしれば、上、朱雀など、此の朝臣の、今日

は遅く出で来て、かく言ふは」とて例の所よりのぞかせ給へば、臺盤に物するて

取りなしつとまるる。御酒などまるる程に、例の宮はた、陸奥紙のいと清らなる

に、雪降りかよりたる枝に文を付けたる持て来て、宮はた「宮の御文」と捧けてひろめ

かす。源中納言、遠こちしあらむ御文を斯うして、悪しかめりや「大將、仲忠、今

日はいとよしや。昨日御前にて斯くしたりしこそ淵瀬もなかりし。いとらうがは

しう」とて取りて見給ふ。後より上も御覽すれば、

女二覺束なしとかあるは、御前にとのみ聞けば、上もこそ見給へとてなむ。思ひ

出でむとや。

かぎりなくありし昔の見えしかば今も我にはあらじと思ふ

とてぞ聞えにくきや。からうじて物思ひ知られたりけるかな。問ひ給るへ人

は、あなたの御懐にのみぞあなる。

とあるをいとよう見給ひて、度々文遣りなどするは、いと蔑にはあらぬなめり、

いかで今暫しするて、せむ様見む、と思して御心地おちる給ひぬ。還りおはして、

つれなくて居給へり。

上には、酒飲みのよしりて、彼の鍋の蓋の返事は、物取り食ふ翁の形を、食物を

丸かして造りするて、それにかく書き給ふ、

仲忠 白妙の雪間かきわけ袖ひぢて摘める若菜をひとり食へとや

〔詠釋〕
〔二〕仁壽殿の

〔三〕朱雀の推量

〔四〕殿上の間にては

〔考異〕
〔二〕後より―後に

〔語釋〕
〔三〕食器を取集めてよこしたる故にいふ

〔考異〕
〔一〕あつもの―あつもの

〔二〕此の―ナシ

〔四〕雜役に―さにくを

〔五〕「など」とて「なるべし」

〔六〕薰衣香―くまかろ

あつもの時は未だ過ぎ侍らざりけり。

とて奉れ給ふ。物など食ひ果てて大將、此の奉れ給へる物どもを、さながら取り集めて返し奉り給ふとて、孫王の君の御許に、仲思「これをいと全く返し奉るは、明日にもいと疾く賜はらむとて。器物侍らすば、求めさせ給はむほど遅くや、とてなむ」と宣へり。孫王の君などいみじく笑ひ給ふ。孫王「空言人にて、今さへもそらごとし給へるかな」とて、孫王「いとよき御厨子所の雜仕なりけり。わきても土器をぞ一つ失ひたりける。衣の袖解かれぬべう」と聞えたれば集まりて笑ふ。大將、仲思「いまふるを雜役に奉らむ」などとて、酔ひて臥し給へり。上より、遅しとて召せば、仲思「涼の朝臣、酒を強ひて給ひ侍りつるに、前後も知らでなむ」と空酔をし、空言をして参り給はず。帝、休むならむと思して、暫し召さず。かくて巳の時うち下りての程に、青鈍の縁のはかま柳がさねなどいと清らにて、今日のうつしは、麝香たきもの、薰衣香、物ごとにし盡したり。さてまうのほり

〔考異〕
〔一〕今日は―よめの

〔二〕ばかりよりは―ばかりには

〔三〕つくりて―つかりて

〔四〕日ごととに―ひとに

〔五〕心してを―心せよ

給へば、今日は俊陰の主の集を讀ませ給ふ。讀みくらして暗うなりぬ。上、朱雀いと日高うはじめつ。更にな立ちそ」と宣ひて、御殿油いと疾くまゐりて、讀ませ給ふ。亥の時ばかりよりは、これは暫時止めさせ給ひて、小辛櫃開けさせて御覽すれば、唐の色紙を、中よりおし折りて、大の冊子につくりて、厚さ三寸ばかりにて、一つには例の女の手、二行に一歌書き、一つには草行、同じこと、一つには片假名、一つは草手。先づ例の手を讀ませさせ給ふ。めでたきこと限なし。

四所さし向ひて、日ごとに讀ませて聞召す。今宵は後の宮まうのほり給へり。此方の御たちいと多かり。斯かる事ありとて、御簾のもとに後の宮おはせば、上は、大將に御目くはせて、密に讀ませさせ給ふ。後の宮、「御たちこそ聞かせ給はざらめ、講師は心してを」と宣へば、え讀まで、瓜くひもてさふらふ。上、朱雀いと悪き朝臣なりけり。かくな憶せられそ。唯言ふに隨ひて讀め。これは誰もく讀みつべけれど、さらに他人の讀むまじき由のあれば、まづ讀まするぞ」と宣へ

〔語釋〕
 (一)字音のまゝに上む也
 (二)后宮が聞きて解する也

〔考異〕
 (一)聲にも「ずん聲」にも

(四)所々一所

(五)所々一所

(六)今宵と一今宵も

(七)京に歸りまうて来て女の「京の女の

(八)彼には「は」ナシ

ば、すこし高く讀む。所々は聲にも讀む。後の宮、いみじう憎み給ふ。されどいとよく聞召す。他人はえ聞き知らず。聞召し知りたる限は、上も東宮も、泣き給ふ。したる様は、唯有りつることを、物語の様に書きしるしつと、其の折の歌どもを付けたり。おもしろき所々も悲しき所々も有り。かくて曉方になりて、上、朱雀「かよる理なり。此の母御子は昔名高かりける姫、手かき、歌よみなりけり。院の御妹、女御腹なりけり。然りける人の、さる折々にし置きたりける事なれば、かくいみじきなり。是は、女一の宮には見せたりや」大將、仲忠「見給へつけし所にて、外題ばかりをなむ。さては今宵となむ、開きては見給ふ」上、朱雀「彼處にて講ぜらるべきものなり」とて、朱雀「これは暫し」とて、朱雀「今一つを」とて御覽すれば、これは俊蔭が京より筑紫へ出で立ち、唐土へ渡りたりける間よりはじめて、京に歸りまうて来て女の上を言ひそめて、言ひつと折々に歌あり。これが面白く悲しきことは彼には優れり。其の巻にしも取

〔語釋〕
 (二)年の暮の儀式

(四)こゝに仲忠が居れどもこれは後々の後見もせさすべき人なれば懼るべきに非ず

(七)翻經

〔考異〕
 (一)など一ナシ

(三)と一ナシ

(五)ゆく先一御ゆく先

(六)おはして一おはし給ひて

りあたりて、聞召して、朱雀「これは内侍のかみの見るべき事どもにこそあめれ。見たりや」と宣ふ。大將、仲忠「さも侍らず。これは見せ侍らむ」とて取り換ふれば、朱雀「なほ見はてよ」とて御覽するに、面白く悲しきこと限なし。又ことに取り換ふる巻は、蓮華の花園にて、天人かけり給ひし時、讀み集めたることども、其のよし記せるなり。上めで給ふこと限なし。朱雀「夜明けぬべし。長き夜をしも盡すべくもなき事どもなめり。今は、これ等は唯に見む。集ども、日記どもなどをなむ、讀ませて聞くべき。それは、佛名すぐしてせむ。此の朝臣、いと苦しと思ひためり」と仰せられて、東宮に聞え給ふ。朱雀「其の事となければ、對面することいと難し。かよる序に、聞えむと思ふことどもあり。此の朝臣こそあめれ、それはゆく先の御後見すべき人なめれば。月頃聞けば、上にも物し給はず。と言ふなるを、猶上におはして例の作法に、政事あらせてこそさふらはせ給はめ。思す人あらば、夜はまうのほらせ、晝は上局賜ひなどしてこそ。例に違ひて聞ゆ

〔語釋〕
 (一)嵯峨院が
 (二)承香殿は
 (三)参る様に
 (四)承香殿に
 (五)あて宮をいふ
 (六)あて宮
 (七)あて宮
 (八)あて宮
 (九)あて宮
 (一〇)あて宮
 (一一)あて宮
 (一二)あて宮
 (一三)あて宮
 (一四)あて宮
 (一五)あて宮

〔考異〕
 (一)中に承香殿の宮の
 (二)中に人の申すは四の宮
 (三)中に四の宮と申す人
 (四)天下に―その
 (五)荒々しき―荒ましき
 (六)まかり侍るめるもの
 (七)まかり侍るめるもの
 (八)まかり侍るめるもの
 (九)まかり侍るめるもの
 (一〇)まかり侍るめるもの
 (一一)まかり侍るめるもの
 (一二)まかり侍るめるもの
 (一三)まかり侍るめるもの
 (一四)まかり侍るめるもの
 (一五)まかり侍るめるもの

れば。其が中に承香殿の宮のいたく歎かるゝ様に聞ゆるは、などかはいと然しも。院の聞召す所もあり、御年高くなりぬれば、御世今いくばくもあらじを。其が中にも、院のいとらうたくし給ふ宮なり。天下に、心になはずとも、少し心とどめてこそ」と聞え給へば、東宮「それは、さ思ひ給ふることなり。先つ頃も、「わたし給へ」と聞え、彼處にもまうでて侍りしかども、聞ゆるにも随ひ給はず、いと荒々しき御氣色のあれば、月頃かしこまりて、物も聞えず侍り」上、朱雀「それも宣ふ様有り」と聞くや「宮、東宮「まかり侍るめるものを、宜しからず思すなり。それはじめ、「彼處になむ今宵出で給ふべき」と聞えしを、さてなむ絶えたるを、如何なるにか侍らむ、よからず思して、此の人彼處に侍るとて、御氣色悪しければ、勘事ゆるさるゝまでなむ。志をば失ひ侍らねば、ついでには自ら聞召してむ」上、朱雀「後はやらへものにもなし給ふとも、院のおはします世に、かよると聞召すなむ、いといとほしきやうなることどもを思したるにあらむ、上も宮も、御髪

〔語釋〕
 (一)自分が産をしに下り
 (二)時よりも

〔考異〕
 (一)世を知り―世保ち
 (二)わきても―わいても
 (三)これ朝拜―これついでに朝拜

おろしてむとし給ふなり。世を知り給ふべきこと近くなりぬるを、平かに、謗られなくて知り給へ。人の國にも、最愛の妻持たるにぞ謗取りたるめる。然言はるる人持たまへれば、戒め聞ゆるなり。わきても、此處には良き女のかぎり集へたれど、え褒められずなりぬるや」宮、東宮「彼處にこそ侍るめれ。言葉も惜まずののしることは、外には得侍らじ」と聞え給ふ程に、明けはなれぬ。上、世の中に名高くて傳はりくる御帯あまたある中に、良しと思すを取り出でさせ給ひて、大將に、朱雀「これ朝拜などあらむ折、物せられよ」とて賜ふ。大將舞踏し給ふ。明けぬれば、まかで給ひなむとす。上、朱雀「佛名すぐして、必ず今二三日物せられよ。年のはじめには、得讀むまじき文なめるを。仁壽殿は、今年は参るまじきにやあらむ。自らの上に彼様の時よりも、いと久しかめるは、もし其處にのどめさせて物せらるゝか。まめやかには、唆して参らせられよ。昔は斯くもあらざりしかど、末の世には、女の侮るにこそ」と宣へば、大將かしこまりて承り給

〔語釋〕
〔一〕あて宮への傳言をたのみちきて

〔二〕御懷胎の囁

〔四〕あて宮入内以來東宮の妃妾たちは皆生がひなしと悲しむ中て

〔考異〕

〔三〕例ならぬ：思う給へる一例のやうなる世にめでたき事なりとも何かは

〔五〕いらへーらて

ふ。此の御書どもは、皆封つけさせて、御厨子に納められぬ。東宮かへり給へり。殿上人、學士など率き居て、大將も藤壺まで御送し給ふ。孫王の君に御消息申し置き給ひて、梨壺に詣で給ふ。宮は藤壺に入り臥し給ひぬ。

大將の君、梨壺に對面し給へり。仲忠「日頃さふらひ侍りつれど、聞えざりつるかな」梨壺「何時も上にとのみ承りつれば、これよりも得聞えざりつる」大將、仲忠「いとつらく思し隔てたりけること。先に参りたりしかど、なか宣はざりけむ」梨壺「何事ぞや。聞えぬこと無きものを」大將、仲忠「ある様おはしけるものを。こればかりは、殿の御爲にも、仲忠等が爲にも、面目なることなむ侍らぬ。例ならぬ御様のこと承りて、めでたき事になむ思う給へる。かく皆人の不用になりぬと言ひ騒ぐ世に、如何に。さばれ、かゝる聞えのあるのみなむ、嬉しきこと侍るべき」いらへ、梨壺「怪しの間はず語りや。よきこと、さふらひつきて何かはとてこそ」大將、仲忠「何時ばかりよりかは」君、梨壺「相撲の節の頃、暑氣にやなど思

ひし程よりにやあらむ」大將、仲忠「いと久しくなりにけるを、殿には聞召したら、むや」いらへ、梨壺「いかでか。聞えばこそはあらめ。時のなく恥かしければ、此處なる人にだに、數多には知らせぬものを。いかでか聞き給ひつらむ」大將、仲忠「一夜、五の宮の奏し給ひしをなむ」君、梨壺「五の宮の御心ぞいと怪しきや。かく徒らにてありとにやあらむ。我はしも憎まじ」など宣ひしを、此の頃音もし給はぬは、斯う聞き給ひてなりけり」大將、仲忠「世の中のあだ人となり騒がれ給ひて、世をば蔑に思ひて、御前にもつよむことなく、萬のことを奏し給ふや。なほ能く心つよしみてさふらひ給へ。あくめのみ有り」と宣へば、梨壺「一所により奉りて、胸のみなむつづれ侍る。大殿の君一所のみこそ、數多の人の名は立て給ふめれ」大將、仲忠「院の御方はまうのほり給はずとか」いらへ、梨壺「此の春いみじき御いさかひありて、御衣引き破られ、萬の所搔き損はれ給ひて後は、まうのほらせ奉り給はざなり。されど、斯くてのみは世にも。昔、時におはせし

〔語釋〕

〔一〕兼雅

〔五〕五の宮が

〔七〕昭陽殿一人の爲に

〔八〕昭陽殿

〔九〕四宮

〔考異〕
〔二〕しらへーらて

〔三〕こそは「は」ナシ

〔四〕給ひつらむ給ふらむ

〔六〕あくめあてめ

〔一〇〕しらへーらて

〔一一〕まうーまた

藏

開(中)

一三九

〔語釋〕
(一)梨壺が東宮に
(二)仲忠

(四)女一宮

●仲忠退出。仁壽殿女御に帝の仰を傳ふ。恩賜の帯を正頼に示す。正頼帯の來歴を語る。今宮男子を産む。仲忠の母に招かる。

〔考異〕

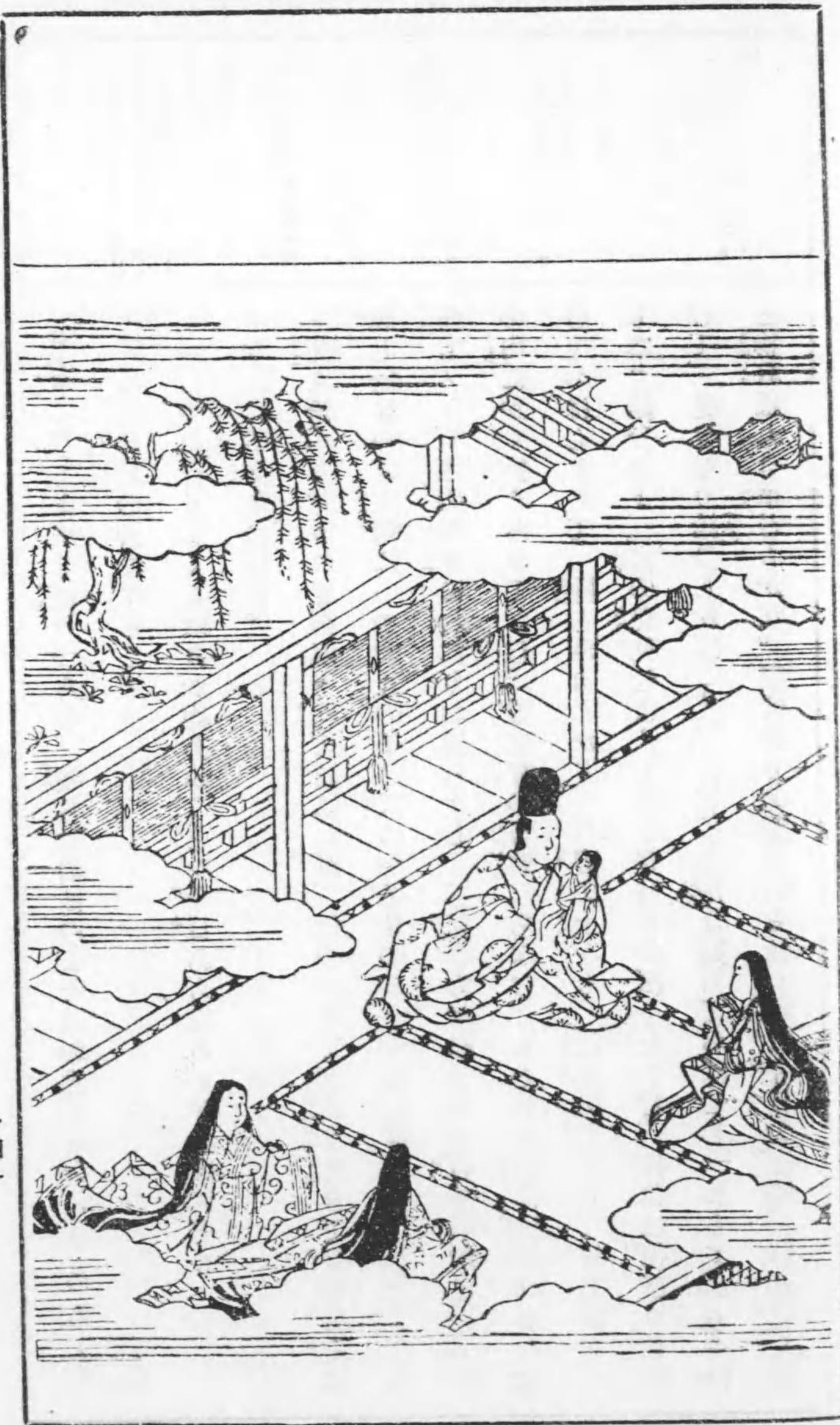
(二)なる一ナシ

(五)こなど一こを

人なれば、宮に對面賜はる時も、「哀と思へ聞ゆれど、心憂ければ」などぞ宣ふなる。大將、仲忠「やんごとなき所もや、引き破られ給ひつらむ。さてはまして如何ならむ」とて、仲忠「今一二日過ぐして參らむ」とてまかで給ひぬ。

〔畫詞〕 此處は梨壺。

かくて大將の君まかで給ひて、一の宮の御方へ參りて見給へば、畫の御座所にも、御帳のうちにも、宮おはしませず。怪しと思ひて、中務の君に、仲忠「いづくにぞ」と宣へば、中務「西の御方に、御ゆるする參る」と聞ゆれば、あさましと思ひて、仲忠「などか。まかで侍るとは聞召しつらむを、今日しもおほろけに、久しくすまされぬ御髮の様に。すまし乾さむ程、命短からむ人は、え對面賜はらじかし。さて犬は」と宣ふ。仲忠「それも彼方に」と聞ゆ。仲忠「大輔呼び給へ」とて召したれば、大宮抱きて出で來たり。おとど、抱き取りて見給へば、こなど丸かしたる様に肥えて見知り顔に物語す。いとうつくしと思ひ、宮の御許に御文奉り給ふ。



〔語釋〕
(一)髪を神にかけて「天の原ふみとよろかし賜る神の思ふ中をばさくものかは」の歌によりてよめるか

(四)仁壽殿をも女一宮をも

〔考異〕

(二)中だにも一なににか

(三)来べき一ぬべき一さふらふべき

(五)させ給ひ一ナシ

(六)給ひしかば一給ひしが

仲忠辛うじてまかで侍りつるを、渡らせ給はぬこそ。おほぞらのたきあるものを、今日の御ゆるこそ。

中だにもさくとはきかぬあふことを今日あらはるとかみは何ぞも
(二)(三)そなたにや参り来べき。
(三)

と聞え給へり。されど御返も聞え給はねば、むつかりて、犬宮抱きて晝の御座に臥し給ひぬ。太輔に、仲忠「此の子は人にや見せつる」と宣へば、太輔「さも侍らず。誰もく、西の御方にわたりおはしまして、一見奉らせ給はむと有りしかど、御帳の内にかく抱き奉りてなむ。唯東宮の若君たちなむ、おとどの君に抱かれ奉り給ひておはしまして、隠し奉りしかど、内裏の上をも、此方の上をも、打ちかなぐり奉り給ひつよ、「宮の兒見せよ」と宣ひしかば、上なむ、打たれ侘びさせ給ひて、見せ奉り給ひしかば、うつくしみて、抱き持ちておはせし」おとど、仲忠「いと物狂ほしき事どもかな。斯ばかりの程のことは、昨日今日の様に、いと能く覺

〔語釋〕
(一)此様にして居るものを

(六)擗、擗

〔考異〕

(二)たゞして一たゞみて一たがひて一たえかいて

(三)句はして一「て」ナシ

(四)もとど一もとまの

(五)斯う一かく

(七)つき給ひなむ一つきなむ

ゆるものを。男君たちにかよるわざをこそ。若君はいとよく隠し給へ。斯くしておはせむをば、何わざをかし給ふべき」太輔「御髪にかよりて、二所ながら泣きののしり給ひしかば、いかでかは」と聞ゆれば、仲忠「すべておろかなる業こそは」と物しと思したり。

宮つとめてより暮るよまで御髪すます。御床高くして、お許人たゞして参る。すまし果てて、高き御厨子の上に御褥敷きて、乾し給ふ。女御の君の御前にあたりて、廂に横様に立てたる御厨子なり。母屋の御簾を上げて、御帳立てたり。宮の御前には、御火桶するて、火おこして、薫物どもくべて焼き匂はして、御髪あぶりのごひ集まりて仕うまつる。仲忠「此方にわたり給ひて乾させ給へ」とおとど聞え給へば女御の君、仁壽「斯う宣ふなるを、彼方にて乾し給へかし」宮、女「何か、今乾しはてて」と宣ふ。右近の乳母がいふ、「乾し果てさせ給ひてこそ。渡らせ給へらば、唯大殿籠りなば、御髪にたわつき給ひなむ。御産屋の其の日の中にだに、

(四) 武が宮たちを生きたる時はそれを捨てて直に内裏へ歸りたれば

(六) 犬宮をば

(七) 急ぎて内裏へ歸らんとも思はず

(考異)

(一) 戸もし一戸をおし

(二) 疾く一とろ

(三) 見ると宣へる一見るときはこゆるとのことぞいかにかして宣へる

(五) 知り一見

入り臥し給ひし御心は、御髪ばかりには避り給ひなむや」宮、女「何事を。物な言ひそ」と宣ふほどに大將の君、直衣著て、中の戸おしあけて、女御の御前につ
いる給ふ程に、右の大殿もおはしたり。宮あらはなれば、御屏風取り出でて立つ
れば、仲忠「何か、いとよかめるものを。さて疾く乾させ給へ。彼方にも、御厨子
は多く侍るものを」などとして女御の君に聞え給ふ、仲忠「今朝仰せごと侍りつるを、
疾く聞えさせむと思ふ給へつれど、みだり心地のいと怪しく侍りつれば、ためら
ひ侍るとてなむ。上しかくなむ宣はせつるは、然ば仲忠が乳母せさせ奉るとな
む仰せ給へる」女御の君、仁賢「さこそ言へ、見ると聞ゆる所、如何に斯くは宣へ
る。此の犬を見て、えあるまじけれ。宮たちをば知り奉らで、やがて参りぬれば、
ともかくも知らぬを、これは初より見、口入れなどし侍りつれば、えふり捨てては。
其が中に、物の榮ありて見よけにもしなさぬ宮仕なれば、急がしくも思はず」父
おとど、正頼「などか然は思はず。正頼が子どもの中には、其處のみこそ幸はお

(語釋)

(四) 「ものを」歟

(五) 東宮

(考異)

(一) 立て一ナシ

(二) 走りうち群れて一走り所々にうち群れて

(三) 知り一譲り

はすれ。此の宮たちを、そこばく、瑕かたはなく生し立て奉り、様々に言ふか
ひなからず、出で走りうち群れておはしますを見奉れば、女子もち奉りたる心地
こそすれ」仁賢「また此の犬こそをかくて見奉り給は、天下の後の位も何かはせむ。
來し方行く末も、また類ものし給ふべき人かは。物思し知らずもありけるかな」
大將「打笑ひて、仲忠「かたはらいたくも仰せらるよかな。それ等を、ものの榮なく
思さるよにこそ。彼方には、犬にくはれたるだに見捨てられたるところは、常に勘
當せらるなれ。天下知り給ふべきこと近くなりたる様に仰せられつるものかな」
おとど、正頼「朱雀院修理しはてつめれば、然もあらむ」大將、仲忠「日頃は、宮も
上になむおはしつる。月頃見奉らざりつる程に、いと清らになり給へる」おとど、
正頼「我國の王には餘り給へる人なり」大將、仲忠「いとど辛き役をなむ。東宮は
いと氣高く、心憎くて、つと守り給ふ、五の宮はいと物はなやかに、何事を見
つけむと思したる御氣色にて見給ふ。御書を、とさまかうさまに讀ませ給ふを、

〔語釋〕
〔二〕藤原實賴

〔三〕「山籠りにしかば」なるべし。一本「山籠り給しにかば」

〔四〕父千薩が。此處は忠こそその巻の事を語る也

〔五〕朱雀院御即位の際

〔考異〕

〔一〕然は侍れど一ナシ

〔六〕御返一御返事

仕うまつりつるは、いとこそ難う侍りつれ。然は侍れど、重物をこそ賜はりて侍る。おとど、正頼何にかあらむ。仲忠御帶なり。おとど、正頼いで見給はむ。と宣ふ。取りに遣はしたれば、螺鈿の帶の箱に、袋に入れて、御包に包みて持て参れり。おとど、引き出で見給へば、眞信公の石の帶、いとかしこきなり。驚き給ひて、正頼これはまた世に無き物なり。これを賜はり給ふばかりに、仕うまつり感ぜしめ給へるこそ、いと恐ろしけれ。これは、小野宮の大臣の御帶なり。是によりてなむ、多くの事ありし。それによりてなむ、眞言院の律師山籠りしにかば、小野に籠り居給ひて、今ははた領すべき人も侍らず。とて院に奉り給ひしを、内裏の御位に居給ひし時わたり奉り給ひてしなり。かしこき御寶になむせさせ給へる。數多さふらひつらめども、これが様にはえあらし」と宣ふ。大將、仲忠「これは、藤壺の御徳に賜はりて侍り。宮の御文奉り給へりける御返を御覽じて、何事か聞え侍りむ、いみじく思ほし入りたる御氣色を、怪しと見奉りしほどに、

〔語釋〕
〔三〕今宮

〔考異〕
〔一〕賜ひつるなり賜へるなり

〔二〕しくは―しうは―しうらひ

〔四〕とて―と

〔五〕男子なり―をとこと

御書仕うまつりたがへて、上の笑はせ給ひしかば、かしこきに、誦せさせ給ひし句をなむ、わななくく、物も覺えず誦じあけて侍りける。それに「祿何よからむ」など仰せられて賜ひつるなり。しくは、仕うまつりては、重き祿賜はるものなりけり。おとど、正頼それを例にしたらむ人は、如何あるべからむ」と宣ふ。女御君、我が御前、宮たちの御前どもの御臺どもを参らせ給ふ。大將は、まだ物も参らざりけり。おとど取りはやし給ひて、御酒など少しまるるほどに、源中納言の北の方、子産み給ふとて、いたく煩らひ給ふとて騒ぐ。おとど、正頼内侍のすけ、彼處にものせよ。心知らひたる人なくて悪しからむ」と宣へば、「早く晝召ありつれば参り給ひぬ」と聞ゆ。おとど、正頼立ちながら訪はむ」とておはしぬ。大將の君、訪はまほしう思へど、苦しうて物し給はず。かゝる程に産み給ひてけり。男子なり。女御の君、「御髪は乾給ひぬや。はやわたり給へ」とて奥へ入り給へば、大將、御

〔語釋〕
(三)抵抗

(四)詰澄

(五)仲澄

〔考異〕
(一)押し開けて一ひきあけて

(二)なるにきのけうきたる一なるきのけつきたる一なるきいけつきたる

屏風押し開けて見給へば、宮は濃きうちきの御衣に、あからかなるにきのけうきたる織物の細長引きかさね奉りて、白き御衣引きかけて、御髪は少し濡りて、四尺の御厨子より多く打ち延へて、瑩しかけたると見ゆ。小き御臺して、御湯漬くだもの参りたり。大將、仲忠「あな見苦しの御すまひや。彼方にて乾し給へ。一人はいと侍りにくし」とてかき抱き下して、率て奉り給ひて、やがて御帳の中に入り臥し給ひぬ。仲忠「なか、御文奉れ給へど此處にても彼處にても御返は賜はらぬ」とて日頃の有りつる御物語きこえ給ふ。宮はたの言ひし事どもなど聞え給へば、女「内裏にならひて、此處なる時も彼方に常にあめれば、見もすらむかし。顔も心もをかしきものと見つるを、憎くも物を見ける」大將、仲忠「さて父主は」宮、女「それは然も見えぬものを」大將、仲忠「あなかま。御伯父たちは、皆然る心なきものなり。一人は徒らにもなされぬめりき。誰にかあらむ、さばかり物を思ふめりしはや」宮「うち笑ひ給ひて、女「怪しき濡衣なりや。異筋にこそ見ゆめりし

〔語釋〕
(一)明日又御髪を洗ひ直さねばならぬ

(二)誤あるべし、一本「よもこそは」とも

(四)物音をさする也

(五)誤あるべし、一本「なからむ」を「なからむ」とも

〔考異〕
(三)晝一ナシ

か「いらへ、仲忠「上の御妹の君ならむやは。こと宮たちはいと小さくこそおはしけめ」などとて大殿籠りぬれば、右近の乳母うちむつかる。右近「さればこそ聞えさせつれ。明日も御ゆるするは参りぬべかめり。さがなく御殿籠りぬれば、おほろけに参りにくき御髪を」と聞ゆれば女御の君、仁壽「あなかまや。夜晝御前に侍はれければ、打休まむとこそは。何かは、御髪のをたりも何も、人の見奉り給はむに、よもこそともかくもし給はむ。更に」と宣ふ。又の日晝になるまで出で給はず。御物参りて、御臺など鳴らせど、聞き入れ給はず。し煩ひて、中務の君、「御臺参る」と聞ゆれば、仲忠「いと眠たく苦し。小き盤に少し分けていませ」と宣へば、中の盤に御分け、別に少し分けて、しもの御あはせなど持て参れり。先づ宮に少し召させて、御おろし少し参りて、大殿籠りぬ。又の晝つ方まで出で給はず。内侍のかんの殿より御文あり、俊隆女などか久しく。かねて宣ひしことを、さらむ時と思ひまうけたる事なるら

〔語釋〕
 (一)「こそい」は「こそは」なるべし
 (二)涼におくる料なり

〔考異〕
 (三)出だしー引出だし
 (四)にもー「も」ナシ
 (六)水をー水の
 (八)見給ふー見え給ふ

〔考異〕
 (三)出だしー引出だし
 (四)にもー「も」ナシ
 (六)水をー水の
 (八)見給ふー見え給ふ

〔考異〕
 (三)出だしー引出だし
 (四)にもー「も」ナシ
 (六)水をー水の
 (八)見給ふー見え給ふ

む、今日こそいとなむ思ふ。ものし給ひて見給へ。
 とあり。おとど、仲忠「誠や然ることありかし。あな苦しや。いかでまうでむ」と
 て、仲忠「唯今参りて。さらなれば聞えさせぬ」とて奉り給ひぬ。仲忠「さてもあら
 じ。また外様へ」など聞えて出で給ひぬ。

三條殿にまうで給へれば、産養のこともいと清らにて、子持の前のものどもな
 ど皆具して、あしこに出だしたらむにももどかしからずせられたり。洲濱のわき、
 水の側に鶴立てり。其の鶴のもとに、葦手にて、黄金の毛にて打ちたり、
 こよひより流るゝ水をおのが世にいくたび澄むと見まし鶴の子

とあり。萬の物具して、取り出でて見せ奉り給ひ、物などまゐる。父おとどいた
 う興じて見給ふ。大將、仲忠「日頃内裏にさふらひ侍りて、夜晝御善仕うまつり侍
 りて、一日なむまかで侍りし。やがてさふらはむとせしかど、あくる日までさふ
 らひて、みだり心地のいと悪しく侍りしかば、其のなごりにや侍らむ、昨日今日

〔語釋〕
 (一)從來昔に聞きし御帶
 なり
 (二)祐澄
 (五)皆仲忠に賜はると評
 判す
 (七)橋千蔭
 (八)父に奉るべし

〔考異〕
 (三)ちるまでーちつまで
 (四)これをーナシ
 (六)こそはー「は」ナシ
 (九)唐土ーたう
 (一〇)まじうーまじく

起きあがられ侍らざりつるを、御消息の侍りつればなむ。さるは御覽せさすべき
 物も侍り、聞えさすべき事も多く侍る」父おとど、兼雅「何書か仕うまつられつる」
 いらへ、仲忠「故治部卿の主の御集などの侍りけるを、何かは文書などをさへ秘し
 侍らむとて、御覽せむとありしかば、持て参りて侍りしを、やがて仕うまつれ」
 と仰せられしかばなむ。さて、斯かる物をなむ賜ひて侍る」とて帯を見せ奉り給
 ふ。兼雅「これは、然聞く御帶なり。いと忝く賜はせためるは、一日頭中將の
 「世の人の言ふ様なむ。帝のやんごとなくし給ふ物は、皆其處に賜はりぬ。御女
 の中になくし給ふも、弄びもののいろまで、これをとと思したるは皆なむ、と
 言ふ」と有りしは、然も言ひつべき事にこそはありけれ」大將、仲忠「故右のおと
 どの御帶となむ。これは御前にさふらひ侍りなむ、よき御帶侍らざめるを。仲忠
 は、故治部卿の主の唐土より持て渡り給へりける、未だ革もつけで石にて侍る、こ
 れも劣るまじう侍るを、調せさせてさし侍らむ」父おとど、兼雅「何か、忝く御

〔語釋〕
(一) 梨壺が東宮の御顔を
だに見る事なきに懐胎す
る筈はなし

(三) 東宮

(四) 密夫などを設けたる
か

(五) 誤脱あるべし

〔考異〕
(一) ことなりーことや

志 あらむものを。なほ節會などにさして御覽せさせ給へ。此處には然らずとも」
大將、仲忠「然らば、彼の侍るを調ぜさせて奉らむ、いとかしこき角どもなど侍り
けりや。さる物どもを籠め置かれて、ほとく怪しきことも」おとど、兼雅「更に
言はぬことなり」大將、仲忠「いと珍らしきことの侍るは、聞召したらむや」御い
らへ、兼雅「何事にかあらむ」大將、仲忠「さだすぎたる事になむ。梨壺の御事なり」
おとど、兼雅「御顔をだに見奉らで、年頃になりぬるを、何でふさることか」大將、
「それが怪しさに、一日まかで侍りしまよに、やがてまうで侍りしに、問ひ
聞えしかば、「何かは、良きこと聞きつきて」となむ宣ひし」父おとど大きに驚き
給ひて、兼雅「何時からある事にかあらむ。宮は知るしめしてや。もし異様なるわ
ざしたるか」大將、仲忠「いとまがくしき事。如何は知るしめさどらむ。人より
は時々まうのほり給ふなるものを。七月ばかりよりと聞き侍りし」父おとど、猶
兼雅「いと興有ることかな。昔頼み有る程にさかり有りて、今然あましかば、猶
(五)

〔語釋〕
(一) 朱雀が東宮を内裏に
(二) 斯かる幸ある人をつ
まらぬ我等まで懸想せし
事よ

(三) あて宮の懐胎せられ
し由

(四) あて宮一人の爲に

(五) 女四宮

(六) 「仲忠にも」歎

(七) 嵯峨院の女三宮、兼
雅の思ひもの、梨壺の母

忘れ奉るにてこそ。かくのよしる世の中に、ともあれかくもあれ、然あんなるに、
怪しく思ひの外なること」大將、仲忠「内裏にさふらひし頃、宮も上にかよる御氣
色御覽せむとにやありけむ、留め奉り給ひて、二日ばかりおはしますめりきかし。
ありしよりもいと警策になりまさり給ひにためり。國知り給ふべきことも近けに
なむ」おとど、兼雅「藤壺いみじき人なめりかし。唯今の后にこそは。坊がねを、
一人にもあらず、二人まで、玉を磨きて持給へる。かう幸人を、然ともなき我
等まで、言ひ煩はしよかな」大將、仲忠「またも梨壺の様になむ。それは後よりと
なむ承る」父おとど、兼雅「あたら明王がねの、多くの人歎かせ給ふにぞあめる。
人一人によりて、父母同胞と具して思ひ歎くは、幾許の人の歎きぞは。そが
中にも、院の御方いかに思すらむ」大將、仲忠「内裏にもいとかしこく歎かせ給ふ
めり。其の事によりては、あぢきなく、殿にも仲忠等も、いと苦しき仰せごとな
む。なほ彼の宮とぶらひ聞えさせ給へ。それによりても、いとほしく思されたり
(七)

〔語釋〕
(一) 倭女三宮の住居として
あてがひたる處に

(二) 共儘女三宮の物にし
て仕舞ひては悪からんが

(三) 梨壺をさよ

〔考異〕
(一) まさじものをおはし
まさぬとき—まさずとき

(四) 恨みみては—かぎり
ては

き。けに院の御世、幾許もおはしまさじものを、おはしまさぬとき、さなど聞か
せ奉り給へ。それは、彼處にまうでさせ給はむ、何の著きことも侍らじ。此處は
斯く廣く侍るめり。唯仲忠侍るべしとて、つくらせ給へる所におはしまさせ給へ
かし」兼雅「いかで、此處は此の御料に奉りたる所に、人の物し給はむこと、本意
たがひたる様に。年頃いみじう悲しかりし、志、又人なくて心安くてあらむをだ
にこそ」仲忠「それは、御心寄せさせ給はどこそは。かく聞ゆるにつけて、などか、
やがて奉り給はどこそあらめ、廣き心に、時々かよはせ給はむに、何でふことか
あらむ。昔若くおはしましけむ世に、憚なかりけむことにつけて、仲忠等が物
の心も知らぬを恨みみては、如何ばかりかは悲しび給ひし」と聞ゆるまよに涙は
雨の如くにこほる。父おとど、母北の方もいみじう泣き給ふ。仲忠「況や、年頃ま
で物し給ひける人の、宮仕し給はむ御女など持ち給ひて、今かくておはするは、何
心か思すらむ。なほ誰々も、此の事許し給へ」と申し給ふ。北の方、倭女「何か、此

〔語釋〕
(一) 假令我が兼雅に棄て
られても
(二) 何時何日に引取るべ
しと
(六) 仲忠に

〔考異〕
(三) 御文—御文を

(四) 持て—もちて

(五) まかなひて—まかな
ひつゝ

(七) 見せ給へば取りて見
給ふ—見せ給ふ見れば

處には、年頃かくて物し給ふに御志は見つるを、今は忘れ給ふとも、思ふべく
もあらず。まして其處にかく聞え給はむことは、よき事になむ」と聞え給へばお
とど、兼雅「此處には知らず。二所の御中に、宜しかるべく定め給へ」大將、仲忠「其
の日ばかり御迎せむと、御文書きて賜へ。持て参りて、委しく聞えむ」おとど、
兼雅「なほまうで申されよかし。此處には何事をかは」大將、仲忠「いと便なきこ
と。いかでか御文なくては」とて硯紙など、取りまかなひて奉り給へば、兼雅「何
事をか書くべき」とて、久しく思ひつゝ書き給ふ。兼雅「いさや、斯様にぞ。物覺え
ずや」とて見せ給へば取りて見給ふ。
兼雅「年頃は聞えさする事も侍らず。いかでなりにけるにかと思ひ給ふる、怪しく
くなむ。如何なるにか侍りつらむ、昔の様にあらす、まかり歩きもせず、
物憂くなりたるは、無得になりもて侍るにや侍りつらむ。老いほれたるとこ
だに思ひ定めぬ。されば其のわたりにもえ参らず。そが中にも、これかれ物

(語釋)
(一)俊藤女は萬更知らぬ
中てもなければ

(考異)
(一)恥かしさに一恥かし
きれ

(三)思ひ一思う

(四)いとほしく一いとを
かしく

(五)思ひ一思う

(六)せさせ一参り

せらるゝ所なれば、憎しと見給はむ所もあらむが恥かしさに、さし別きても
え聞えず。御覽ぜざりし人にも侍らぬを、此のいとむつかしけなる所に渡り
おはしましなむや。さ侍りぬべくば、其の日ばかり御迎に参り來む。さても
怪しくこそ。

餘所ながらおほくの年も隔てけりころもうらみし時はいつぞも

それをさへなむ。ことごとくには、此の朝臣聞えさせ承れよとなむ。

などあり。大將、仲思いとよく侍るめり」とておし巻きて取りて、仲思、今日はえ

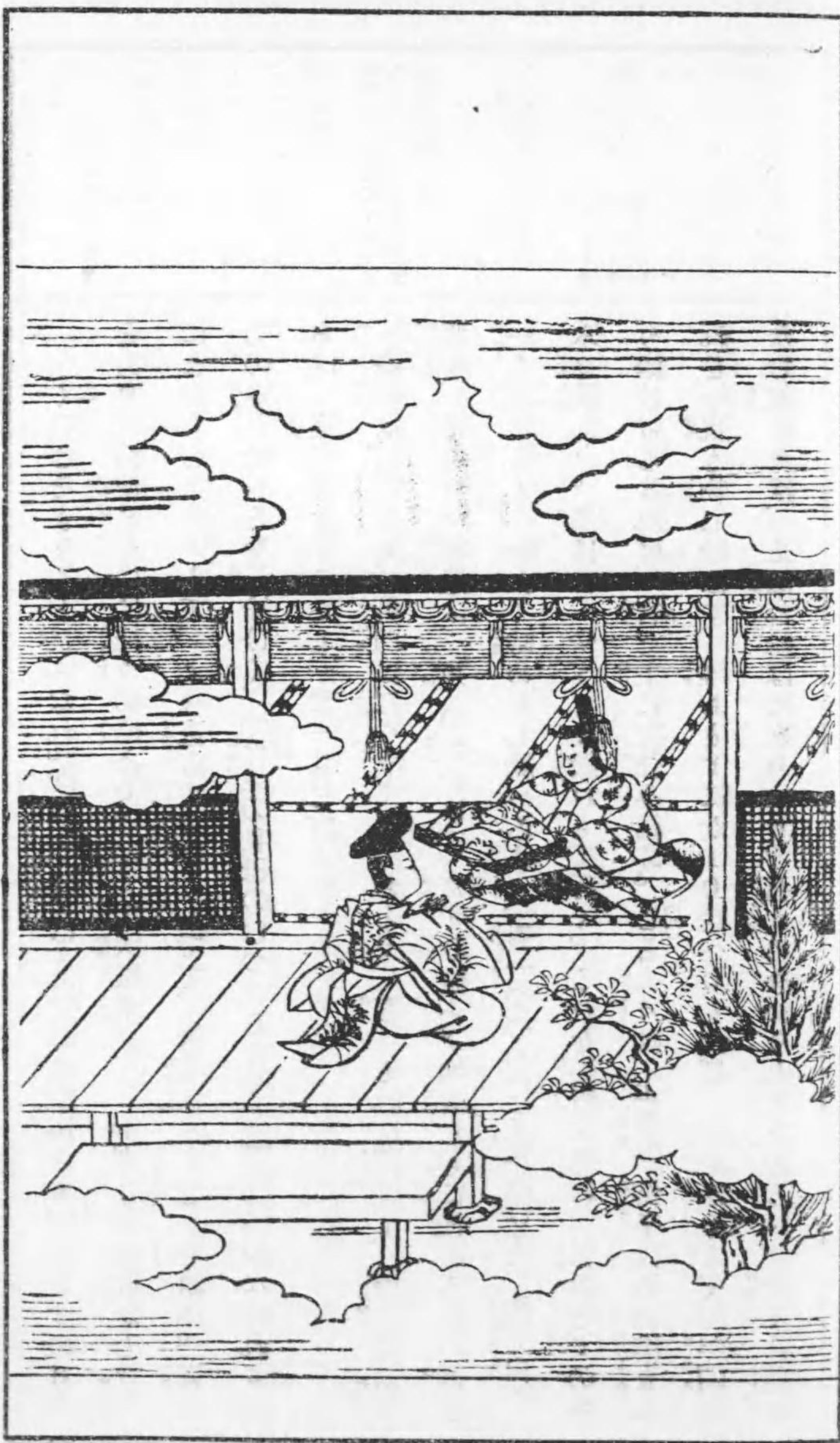
参り侍らぬ。明日参らむ。此の事、とかく思ひ給ふるも、いとほしく思ひ給ふる

事の侍りしかな」とて日暮れぬれば、彼の源中納言殿に、家司の中に心有るを召

して、奉れ給ふ。御消息あれば、彼の暮にと宣ひし人にとてなと申せよ、とぞ有

りける。大將、歸り給ひぬ。

其の夜は梳髪せさせ湯殿などせさせ給ふ程に、中納言殿の御消息聞ゆ、



〔語釋〕
 (一)「右近の乳母」なる
 (二)女三宮の邸
 (三)女三宮
 (四)女三宮、梨壺の母
 (五)他の兼雅の妾
 (六)仲忠、女三宮の邸へ父の使にゆく。女官に菓實を投げつけらる。
 (七)今日日は「は」ナシ
 (八)他對：住みける―他對どもにすみしは一つ腹にうめりし子ときめきたりし人對一つを二人にてすむ
 (九)年頃：日ごろの

くひこそまうくと言ふなれ。かねてこそはとなむ。名取川とも聞えさすめり。
 (一)とあり。御使どもには様々の祿あり。かくて大殿籠りて、仲忠「今日は恥かき所にまからむする」とて、よき直衣裝束取り出でて、御薰物どもせさせ給ふ。宮たちの走り給へるを見給ひて、「丹後の乳母のむつかるめりし御髪は、損なはれざめるは、怪しくもかこちしかな」など宣ふ。
 (二)一條殿は二町なり。御門は二つ立てり。おとど、宮、それに隨ひて、西東の對渡殿、皆あり。寢殿は、東の對かけて、宮すみ給ふ。他對どもに住めるは、御子一人産めると、いたく時めかし給へる人々、對一つづつにご住みける。池面白く、木立興あり。然は言へやうく毀れもて行く。これを梨壺の君に、父おとどの奉り給ひけるなれば、宮ぞ主にて住み給ふ。こと人々は、上達部、御子たちの御女なれど、親も物し給はず、唯おとどにかより給へりしかば、今斯かりとて、年頃家なむ無ければ、え散れ給はぬなりけり。召人めきたりし人々あるは、次々に隨ひ

〔語釋〕
 (一)盗人とは俊隆女をい
 (二)未詳
 (三)兼雅の妾たち也
 (四)俊隆女
 (五)兼雅が
 (六)御座褥など敷きて―御座などまゐりて

てまかでにけり。かよるに大將、東の二二の對、南のおとどの前より、丹後掾に御文持たせて、宮の御方に参り給ふほどに、方々立ち竝みて見つと、人々の言ふ様、「わが君を佗びさせ奉る盗人の族は、あたの戲に戯れて、とはうの誦經文捧け持ちて、惑ひ來るぞ」と集りて、或は手をすりて立ち居拜む。或は萬のまがまがしき事言はぬなし。主どもは、「あなかまや。かくめでたき子持たらむ人をば、いかどは疎にはし給はむ。すべて、宿世の盡きたればにこそあらめ」とて打泣き給ふもあり、見めで給ふもあり。かく言ひ騒ぐも知らで、いと靜かに歩みて、御供に人いと多くて、寢殿の御階のもとに立ち給へれば、よき童四人ばかり、大人十人ばかりありて、「右大將の君こそおはしたれ」と宮に聞ゆれば、女三「あな覺えず。なでふ路惑ひぞ」と言はせ給へれば、仲忠「大殿の御使にて、とり申すべきこと侍りて」と申させ給へば、南の廂に御座褥など敷きて、よき童出で来て、「此方に入らせ給へ」とあれば、入り給ひぬ。大將、仲忠「屢々と思ひ給ふれど、騒がし

〔語釋〕
(一)兼雅の傳言をいふ也

(四)春海曰、妻めかしきの意也

〔考異〕
(二)ばかりに―ばかりと

(三)給へる―給ひつる

(五)こそ―ナシ

く侍りつよなむ。今日は「此の御文、人して奉れば、おほめかせもぞし給ふ。し
るく御覽すばかりに、持たせて参れ」と侍りつればなむ」とて参らせ給ふ。宮、
女三「けにかよる御使なくば、え思ひ出づまじくこそは」とて見給ひて、女三「あな
怪しや。まことにて書き給へるにやあらむ」と宣へば大將、仲忠「いとゆよしき事
になむ。なでふ空心にてかは。「人々あまた物し給ふを、昔の事はたえ侍らじ。さ
し別きては心よからぬ事こそ侍れ。なほ渡りおはしませ」となむ。彼處には人も
侍らず、唯仲忠等が母一人、めかいたる女にて、宿守には」と聞え給ふ。女三「其の
めかいたらむ一所こそは、さわやかならむ數多よりも、いと恥かしうこそは。さ
ても時々見奉りし時も、ひがことせられしを、如何なる事になむ」大將、仲忠「さ
も侍らず。年頃此の御前をば、常に歎き聞えさせ給ふ。それを思ほしおこして、
聞えさせ給ふなり」宮、女三「世の中は斯くてありぬべし。唯院の「面伏なるもの
は、死なぬこそ心愛けれ」と宣はすなるを聞くこそいみじう悲しうは」とて泣き

〔語釋〕
(一)俊隆女の如き申分なき北の方の現在居る處へ行くてもなしと思へども兎にも角にも御詞に従ふべしといふ意歟

(三)御返事を乞へば

(六)兼雅

〔考異〕

(二)今あらむ―とあらむ

(四)飲ませなどす―飲ます

(五)いと―折敷

(七)やらぬ―はてぬ―がたき

給ひて、女三「何かは、心強う聞えても、何のたけきことかは。思ひ出でたりとだ
に、院に聞召さるばかりにこそ。悪しくもあれ善くもあれ、然もと人に見え聞え
にし人忘れられたるばかりは、いみじき事なむなかりける。賢き人のもてたらひた
る今あらむをば、何にかはと思へど、唯言ひなされむをこそは」と宣へば大將、
仲忠「いと嬉しく、参り來たる効有りて、かく仰せらるゝ事。今二十五日ばかり
に御迎に参り來む」と聞え給ひて、御返申し給へば、女三「何か、斯うなむ物し給
ひつると宣へ」とあれば、仲忠「いかでか、空参したりともこそ。唯しるしばかり
にても」など聞え給ふ程に、御供の人々は、宮の家司ども、政所に呼び入れて、
みな様々に酒飲ませなどす。大將には、よき菓物、乾物などいと清らにして、御
湯漬、御酒などまゐる。まかなひには、おとどの召使ひ給ひし人の、よき若人な
りし、なほ衰へやらぬ、右近と言ふなむ、出で來て仕うまつりける。大將、仲忠「こ
れや、彼處に忘れず、あり難き人と物し給ふならむ」宮、女三「いでや、此處には、

〔語釋〕
(一)古今の「見る人もな
くてちりにし奥山の紅葉
は夜の錦なりけり」を言
ひ替へたる歟

〔考異〕
(二)待ち取るこそ―待ち
取るなるこそ

よきも悪しきも、さ思ひ出でらるゝ者あらじや」大將、仲忠「今はこゝにも忘れ聞
えじ」とて土器さし給ふ。宮、女三「いと珍らしく見え給へる」とて御几帳のもとに
寄り給ひて、土器度々すよめ給ふ。大將、仲忠「御返なくば、えまかり歸らじ。此
處にこそさふらふべかめれ」と聞え給へば、女三「あな煩はし」とて、
女三「珍らしきは、現心にもあらじと思へど、うたてある御使にてなむ。いで
や、

恨みけむほどは知られで唐衣袖ぬれわたる年ぞ經にける

と書きて、折りて挿されたりし紅葉の、枯れ困じたるに付けて出だされたり。大
將、仲忠「なくてはちりにし故郷の」と言ひて立ち給へば、南のおとどより、柑子を
一つ投げて、大將を打つ人あり。仲忠「待ち取るこそ」と取りつ。さて出で給へ
ば、東の一二の對より、橘と大いなる栗と投げ出だしたり。大將「取り給へば、一
の對より、年三十ばかりなる人の、いとあてやかに愛敬づきたる聲にて、「誰にか

〔語釋〕
(一)「浮れ人こそ」歟、一
本「うかれそと」

復命。葉實の中の文、
兼雅の述懐。女三宮等を
迎ふべき準備

〔考異〕
(二)しるし―しるく

(三)宣ひつる―宣へる

(四)はやさて―をとて

(五)し侍りつ―して侍り
つ

(六)一子―ひとり子

は」と言ふ。大將、仲忠「うかれうどこそしるしなれ」とて出で給ひぬ。

〔畫詞〕これは一條殿。

かくて三條殿に歸り給ひて、宮の御文奉りて、宣ひつる様かうくなど申し給
へば、おとど、兼雅「哀にも宣ふなるかな。昔の様に侍らむだに、御面伏にこそ
あれ。今はまして何のかひも有らじはや。さて宮は毀れなどやしたる。如何様に
か住み給へる」仲忠「奥は見給はず。あらはなる限は、異なることも侍らず。政所
の家司の男どもなど、あまた侍り。下人などあまた侍りて、御倉開けて、物を納め
おろしなどし侍りつ。おはします所も、目やすくしつらはれて、童、おとな數多
侍りつ」父おとど、兼雅「彼は財の王ぞや。そのかみ一子にて、その祖父の財を、
さながら領じたり。よき庄いと多く持たまへる人ぞ。よき調度、こまかなる寶物
は、彼處にこそあらめ」と宣ふ。大將、仲忠「不便なる所にまうでて、かしこく打
たれ侍りつるかな。かよる礫どもして、方々にぞ打たせ給へるに、困じてなむ侍

(語釋)
(二)かく多くの寵姫たちを指きて今まで我一人を守り居けるよと

(考異)
(一)怪しく怪しう

る」とて取り出でて奉り給へば、兼雅怪しくもありけるかな」とて栗を見給へば、中を割りて、實を取りて、檜皮色の色紙に、(一)かく書きて入れたり、ゆくとても跡をとどめし路なれどふみすぐる世を見るが悲しさ

とあり。物も宣はで、橘を見給へば、それも實を取りて、黄ばみたる色紙に、書きて入れたり。

いにしへの忘れがたさに住みなれし宿をばえこそ離れざりけれ
柑子を見給へば、赤ばみたる色紙に、書きて入れたり、

結びおきて我がたらちねは別れにきいかにせよとて忘れ果てしぞ

とあるを見給ひて、涙雨の如くに降らし給ふ。北の方、あはれ様々に、かく憎からず思ひける人々をおきて、(二)斯くありける、と見給ふも悲しければ、うち泣き給ふ。大將の君益なき物ども、(三)取り出でけるかな、はしたなし、と思ひ給へり。おとど久しく思ひみそみ給ひて、兼雅此の柑子投げ出だしつらむ所は、故式部卿の

(語釋)
(一)以下中の君との關係を語る也

(三)俊藤女の方にのみ居る様にたりしかば

(考異)

(二)あだしくは言はるれどあさしくは言はるなれど

(四)思ひ給ふらむ思ふらむ

(五)の御子：語り取りしナシ

(六)更衣のいますがり更衣などいますめり

(七)御娘：生ひ出でしにやあらむ一ひめみこの腹なり梅壺の御息所といひしひみじかりし色好なりしを語りひたりしぞ

宮の中の君なり。(二)父宮の召して宣ひし様、「我なむ世に久しくあるまじき。此處にらうたしと思ふものなむある。あだしくは言はるれど、然りともと思ひてなむ」とて賜びたりし人なり。(三)十三にて見そめて幾許もなく、宮かくれ給ひにき。その後、程もなくぞ、(四)此處には來にしかば、けに如何に思ひ給ふらむ。栗出だしけむは、仲頼の少將の妹なり。いとよく、人の妻にてもありぬべかりし人ぞ。遊は少將にも優りたり。すべてせぬ業なく、勞ありし人なり。容貌も氣近く、愛敬づきてぞありし。橘の所は、千蔭のおとどの御妹の御子腹なり。梅壺の御息所とぞ言ひし。いみじき色好なりしを、語り取りしなり。それが年は、我にこよなく、兄にぞおはせし。其の西わたりには、もとの更衣のいますがり。その更衣は、宰相中將の御娘なりしが、琵琶なむ上手におはせし。(六)それに兒の一人出でまうでたりしが、(七)如何に生ひ出でしにやあらむ。又もありや。算へ盡すべくもあらず。この中の君の返り事はせむ」と宣へば、仲忠皆こそせさせ給はめ。取り

(八語釋)
(一)柑子のなり口を

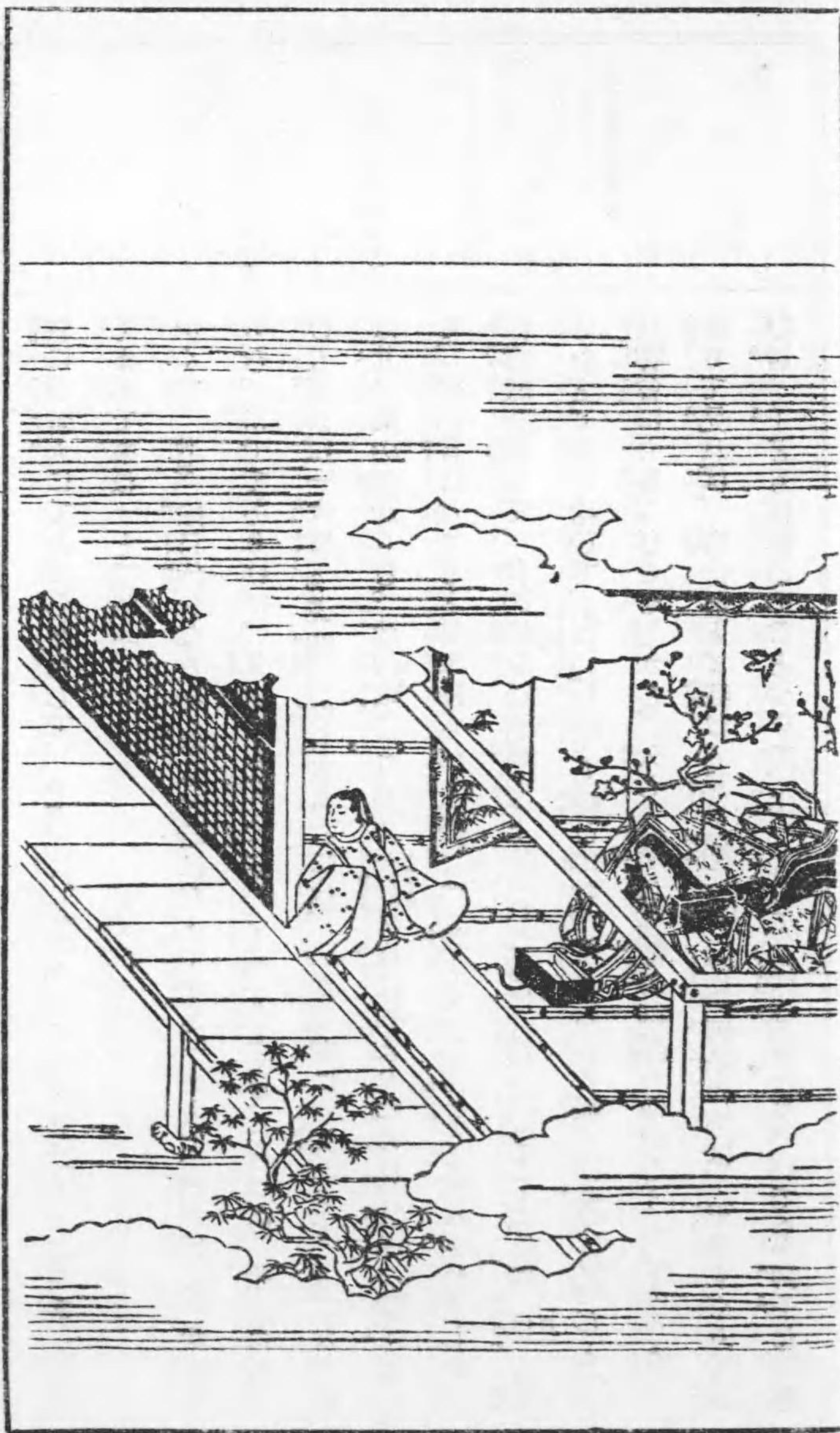
(二)口もとまで

(異考)
(三)あすれはてーあすれ
ずして

侍りしものを、御覽せさせぬ様にこそ」おとど、兼雅「納殿にあらむ、大柑子の中に、大きに疵なからむ、三つ取りて持て來」とて、臍のもとを、壺に雕りおはす。兼雅「何を入れむ」と宣へば、小やかなるかつらの箱を取り出でて、北の方奉り給へり。開けて見給へば金あり。それを移しつゝ入れ給ふ。はたまで一壺入れて、蓋合せて、黄ばみたる薄様一かさねに包みたり。一つには、かう書きて入れ給ふ、兼雅契りおきし昔の人もわすれはて君をば訪はぬ我があらぬかと書きて入れたり。栗の所には、

兼雅宿をいでてあとも枕も定めねば文やるかたもそこはかとなし
今一つには、

兼雅出で入りし宿をかたみと眺めつゝすむを哀るときかぬ日ぞなき
とて入れつゝ、印つけて、兼雅「これは南のおとどに、これは、それは」と言ひつゝ、兼雅「さらばこれ物せさせ給へ」とて奉り給へば大將 上に使ひ給ふ童の、御



供に小舎人にてありしを召して、仲忠「これ其處々に」と宣ひて、仲忠「さし置き
てまうで來ね」とて賜ふ。

〔語釋〕
(一)己が官位の昇ちぬを
かこつ也

(二)我身の衰へたるを形
容していふ

(三)正頼

(四)此度の除目も

かくて、仲忠「除目侍かなるを、参らせ給はむとやする」おとど、兼雅「何しにかは参
らむ。出でてありけば、其處にも面伏にて、人の人とも見たらねば、生きたるか
ひも無きに」大將、仲忠「闕の侍らざらむには、いかでかは」父おとど、兼雅「なか
は其の闕の無からむ。此の頃こそ、かく金釘の様に固まりためれ、其處を御子にし
て、中納言になさるとて擧げられし闕には、親とてある己をこそなされましか。
仁壽殿を思して、其の親をひき越してなされたるは、然るべきことかは。自ら右
のおとど参り給ひて、心に任せてし給ひてむ。殊なること無くば交るひせじとて、
新嘗會にも参らじとせしかど、久しう参らで、帝の御顔もゆかしうもぞあるとて、
参りて見れば、右のおとど我はと思ひ顔にて、孫の御子たちは、玉をすぐりて並
び居、子どもは雲るのごとつきて、土をくひて、跪きあへり。いでや、御子たちを

〔語釋〕
(一)あて官をいふなるべ
し
(二)梨壺
(四)仲忠を子として持て
るは幸福ならずや
(五)官位をいふ
(八)人の尊敬するものを
けなすはよからぬ人のす
る事なり
(二二)くぼつき給へりや
の意

〔考異〕
(三)外のことは吐き給
ふ―物も宣はであらしく
しうかくあくごくをば宣
ふ
(六)女子―子―ナシ
(七)如何様なる事もい
づるやうも
(九)ものを―を―ナシ
(二〇)言へば―いとへば
(二一)宣ふる―宣ふな

思へば、宿世心憂く、いかなる人くほつきたる女子もたらむとぞ見ゆるや。又今
一つのかほありて、蜂巢の如く産みひろぐめり。天の下の御子たちは、此のくほ
どもに産みはてられ給ふめり。此の度も、男子をこそ産まめ。此の十二月に同じ
ことの様なるわざしたんなる者は、女の童のかじけたるをこそ産まめ。幸のなき
者は、如何はある」北の方、俊蔭女などか外のことは宣はぬ人の、まがくしう斯
く悪毒は吐き給ふ。昔思ひ出でて、心地のむづかしきか。彼處を子にて持給へる
は、などかはある。まだ腰かどまり給はざめれば、人と等しくなり給ふ世もあり
なむ。女子たちしはづし給ふとも、男子の筋にも如何様なる事もありなむはや。
いとつたて、世の人の思ひ付きたるものをも、怪しからぬものこそたはやすく言
ふなれ。さやうなる人は、ことにしも言はざるものを、立ちかへり言へばおい
らかに宣ふるかな」おとど、兼雅「さて、其處はつき給へりや」とてひきまさぐり
給へば、俊蔭女「うたて戯れ給へる」とてうちむつかりて、後、向き給へる御髪、瑩

〔語釋〕
(一)俊隆女以外の女を捨てたるをいふ

(二)女三宮

(三)「よめる」は「まめに」の誤なるべし

(四)あて宮の許に

〔考異〕
(五)人若し一人

しかけたる如くして、九尺ばかりあるを、繰り出で給へれば、一御座ひろごりていとめでたし。兼雅「この御後手のひろごりかよるに見つきてこそは、我は聖になりたれ。よき人を家に多くする、つかふ人のよきを集めて、宮をば盗みもて来て、さるものにてする奉りて、人の妻などの許にも到らぬ限なくありきて、皆憎まれてこそありしか。今様の人は、怪しうよめるこそあれ、まろは、かしこき天が下の帝の御女を持たりとも、其のおとうとの御たち、其のあたりの人の妻は、女御まで残してましや。罪の淺きにやあらむ」と宣へば大將、仲忠「いとうたてある事。獨り侍りし時、いかでと思ひ給へし人をだに、よきを侍りしかど、然もあらずなりにしものを」おとど、兼雅「それこそ、いと我が如くなけれ。今もなどか然せざらむ。まかで物せられむ時、空酔をして、唯入りに入るべきぞかし。人若し騒がば、いたく酔ひにけりや。此處は何所ぞ。中の大殿にはあらずや」と唯酔ひに酔ふばかりぞかし」北の方、俊隆女いと悪しき事多くし給ひけるかな。若き人は、親

〔語釋〕
(一)仲忠が行を亂さば
(二)「いとよ女しあらむかし」なるべし、一本「あふふしあらむかし」
(三)あて宮と今宮とは早速取るがよし
(四)「給へる」なるべし
(六)實正
(八)實正の父季明
(九)藤英
(一〇)辭表
(一一)季明より

〔考異〕
(五)さめればさめたるを
(七)あめたるをさめたるを
(考異)
(一一)氣色よし

かく宣ふとも、其處は早う立ち給ひね。な聞き給ひそ」おとど、兼雅「男は、身を顧み人の思はむことを知りなば、良き妻は得てむや。文通はして聽されむ時と言はむには、何わざをかせむ。隙を見てふと入りぬればこそ。まして彼處の亂れてありかむは、をう女しあらむかし。此の宮と、源中納言の妻とは、早うこそ」など宣ふ。大將、仲忠「いと怪しきこと。さらば、彼の日御車どもなど設けさせてさふらはむ。絲毛なむ、彼の宮に内裏よりつくらせて奉り給へり。まだ乗り給はざめれば、民部卿の御方になむ、新しき絲毛の車造りてあめるを、先つ頃より、太政大臣惱み給ふとて、彼の殿のうちはへて物せらるれば、御物忌などにあらばなむ、消息を物せむ」父おとど、兼雅「如何様にか煩らひ給ふらむ。とぶらひ奉るべくこそありけれ」大將、仲忠「右大辨の昨日申されしは、御表二度は奉れ給ひつる。一日召ありしかば参りたりしに、作らせ給ひしは、病重くなりたる氣色などの様になむ作らせ給ふ」と申すは、重く煩らひ給ふにやあらむ。え彼處に侍らざば、源中

(語釋)
 (一)車が
 (二)仲忠が己れがよす子にならんとて
 (四)「紀伊守」の「紀」衍文なるべし
 (五)「は」の「は」衍文なるべし

(考異)
 (一)かしーナレ

涼の家の産養

納言の御方にあまた侍り。すべて幾つばかりかは「おとど、兼雅」いさや十ばかりこそよからめ」大將、仲忠「御前のことなど、かねて仰せられよかし。彼處にも宣はむ。御座所しつらはせ給ふこと行はせ給へ」おとど、兼雅「調度など、清らなりし所を、よきも無かめりや」と宣ふ。大將歸り給ひぬ。おとど、兼雅「をかしき事かな。己宿徳に言はれむとて、漫なる其處の御敵ひき出でむと言ふかな。さ言ふ様こそあらめと思へば、否とも言はぬぞかし」と宣へど、下心には、悪しとも思さざりけり。

畫詞 ことは三條殿。

かくて源中納言殿の産屋の、七日の夜になりぬれば、紀伊守に饗應の事どもを、男がた、女がた、御座所しつらふこと仕うまつる。御簾には、淺黄にして、緑の綺を端にはさしたり。南の廂に、めぐりて懸けたる壁代には、白き綾を擣ち登じたり。疊には唐の綿をこもに、紫の裏付けて、唐の錦の端さし、白きあやを席に

(考異)
 (一)箸は：色どれりーはひは銀をうちは黒う色どれり
 (二)ちはしつーおはして

(三)松風ー秋風

(四)野分ーわきて

(五)直衣ーナレ

したり。褥、上席は例のごと。簀子にも斯くしたり。淺香の卓、銀の樣器、黄金の土器、火桶には、沈を檜皮色に色どりて、内には黄金の塗物をしたり。箸は銀を丸くし色どれり。おこし炭は、鳥の卵。かくて殿の君たち皆おはしつ。上達部は上に、君たちは簀子におはす。他人はまだおはせず。中納言の君、大將にかく聞え給ふ、

涼松風をはらめる君もえてしがなうまれたる子のあえ物にせむ
 いかでく。

と聞え給へり。大將、仲忠「かく宣はぬ先にまうでむと思ひつるものを」とて、斯く返事に、
 仲忠「秋風をあゆとやしれる君が子は千歳をまつ野分とぞきく
 唯今参りつるものを、あえものと宣へば物憂くこそ。
 とて奉り給ひて、仲忠「彼處はさすがに人目多く、恥かしき所ぞ」とて直衣裝束清

らにして物し給ふ。中納言喜びて、下りて迎へて入り給ひぬ。前には、物の師唄うちて、かたにあり。近衛づかさの者ども、皆あり。尉四人、散樂四人、松明ともしたり。

藏開(下)

梗

● 涼の家の産養の續き。● 仲忠夫婦に内侍のすけの噂話。忠俊夫婦仲違の噂。● 兼雅仲忠女三宮以下を三條に迎ふ。● 正頼あて宮の迎に参内す。東宮あて宮の退出を許さず。● 除目。忠澄近澄等昇進。東宮あて宮を抑留す。● 仲忠節料の米炭等を仲頼の妹に贈る。● 兼雅式部卿宮の中君に衣食の料を贈る。● 仲忠兼雅と物語。家交換の約束。宮あこ祐澄等の噂。● 大宮七の君の夫と仲違せるを戒む。● 新年の拜賀。仲忠梨壺を訪ふ。正頼以下位階昇進。● 犬宮の百箇日の産養。仲忠東宮の御子たちに玩物を奉る。● 仲忠約東の家を兼雅に引渡す。● 兼雅中君を三條の東の家に迎ふ。中君を俊蔭女に托す。● 兼雅女三宮を訪ふ。● 一條に獲れる兼雅の妾たちをそれ／＼分散す。● 兼雅仲忠一條の空屋敷を訪ふ。● 梨壺退出。兼雅仲忠迎に参る。

概

かゝる程に平中納言、藤大納言、藤宰相などおはしたり。物まゐり、御土器たびたびになりて、みな人あそび給ひ、詩ども講じのよしする。かゝれど右大將、源中納言は、あそびもし給はず、つとむかひて物語をし給ふ。中納言、涼人の心ばかりくちをしき物こそなけれ。涼は此處にかくて侍らむと思はざりき。藤壺を宮に奉

● 源の家の産養の續き。

(一) 正明、忠俊、清正

(二) 仲忠、涼

(語釋)
 (四)今宮と婚せしむべき由
 (七)婚禮して見て相手の今宮が憎き女ならば一夜で御免蒙るべし
 (二二)東宮よりも度々今宮を召されしかば
 (考異)
 (一)申さまし—せまし
 (二)さわぎしが—が—ナシ
 (三)本意をこそ遂げめ—うこそ待ちめれ
 (五)聞えし—きくし
 (六)さふらはむ—さふらはせむ
 (八)一夜—一夜々々
 (九)二夜—二夜々々
 (二〇)かくては侍らましや—かうては侍らましや
 (一一)よりてこそおとどはいたく—よりておとどは心たく
 (二二)けれ—けり

り給ひし時、思ひしやうは、如何様にせむ、法師にやなりなまし、死にやしなまし、滋野の帥のやうに訴をや申さまし、となむ思ひさわぎしが、又とりかへし思ひし様は、いづれも物狂ほし、本意をこそ遂げめ、と思ひて、年頃つれなくまかりありきしに、かよる事聞えしかば、いと妬く、何でふこともさふらはむ、憎くば一夜まからむ、らうたくば二夜はまからむ、我をばたどなる田舎人と思ひて、かくし給ふ、となむ思ひし。さる程にかよる事有りしかば、思ふごと二夜はまかりにき。内裏に召しよ夜は、更に參らじ、やがて歇みなむと思ひて、更くる夜までは侍りしかど、然せむ事のいと哀にうたてかりしかばなむ、え侍らで參りにし。さてだに侍りつきにしかば、斯く今まで、今宵も此處にて君だちに對面する。京人の勞あるなりせば、かくては侍らましや」大將、仲忠、それは仰せられたることなれど、其處によりてこそ、おとどはいたく思し煩らひけれ。宮もたびく仰せらるよめりしかば、かよる宜旨ありと申し給ふめりしかど、強て召し取りてこそ。

(語釋)
 (一)涼は今宮に不足なりしならんが他人は涼の今宮の聲になりしを道理と思へり
 (二)あて宮
 (三)今宮
 (五)あて宮
 (七)神判を聞くの意歎
 (一一)「わらはか」なるべし
 (考異)
 (四)かゝる—かゝりける
 (六)御様—「御」ナシ
 (八)さだきくは然もや—さたききはさりや
 (九)いら—いさや
 (二〇)誰ぞ—誰にか

されば、御心地にこそ飽かず思されけめ、人は理とぞ思ふや。さてもかの君は、容貌によりてこそ、誰もく思ひしか。この君も、おとり給はざるは、小くより大殿も宮も思ほしかしづきたりけるを、かよる事のありければ、いとほしがりてこそはありけれ。同じ人の御子の、彼は先づ生ひ出で、これは後に生ひ出で給へるにこそあれ。かたちは劣り給はざるを、何か思す」中納言、然だにあればこそ斯くても侍れ。今は何方かまからむ。天下にいふとも、かの君の御様なる人は有りなむや。容貌のみやは、萬の事をこそはさだきくは然もや」大將、仲忠、さても有る様を宣へ」涼、かの君の御様は、まろぞよく見取りたるかな。髪うるはしく、色白く、目鼻こそは付きたためれ」大將、仲忠、然のみやは。さて心は無しや」いらへ涼「それは知らず」大將、仲忠、いかでか今宵はある」とてわらひ給ふ。仲忠「まこと、こよに見しやうなる童のありしは、誰ぞ」中納言、涼「いさ數多あれば知らず。いづれそが中に、承香殿の女御の御許なりしこそあれ」大將、仲忠、もし、このわれ

- (一)「これこそ」は童の名
- (二)「など」とて「なるべし

らか、中將なりし時、灌佛の童に出だされたりしは」いらへ、(一)「それぞかし。これこそとぞ言ひし」大將、仲忠「われらが、一日こよにまかりし時、扇を鳴らして「夕さり來」といひしかば、いと馴れたりしと見しは、然なりけり」いらへ、(二)「童は、藤壺のあこきこそあれ。外にはたど今なし。あこきは、兵衛の君の弟にや」仲忠「あこきは、木工の君の弟や。さいつ頃内裏に侍りしにも、あこきをぞ語らひて侍りし」などて遊もし給はず。(三)

大將、仲忠「などて君は、琴は弾き給はで、人をば呼びもて来て、すどろ物語の役は」いらへ、(四)「年頃思ひつる事を言はむ人もなかりつる。今日今宵思ひ出づるまよに聞ゆるぞかし。琴は聞く人もあらじ」仲忠「くち惜しくとも、弾きにこそ弾き給はめ。聞きには聞くを」中納言、(五)「さや。其處のやうに人に知らるばかりはいかか。さて書などをこそ、自ら習はどや。よろづの遊はえ學ばじ」大將、仲忠「子ばかりかなしき物やは有りける。君は思ひ給ふや」いらへ、(六)「いまだ穢ければ見ず」

- (一)「これこそ」は童の名
- (二)「など」とて「なるべし
- (三)「など」とて「なるべし
- (四)「し給はず」は「せず
- (五)「琴は」は「は」ナシ
- (六)「有りける」ある

- (一)「生れ落つると早速
- (二)「鞍敷
- (三)「観あるべし

大將、仲忠「いふかひなき事する君かな。まろらが子は、すなはちより懐にこそ入れ居たれ」中納言、(一)「それ女ならば。我等が子は親に優るなし。男は、我に劣らむには何にかはせむ。女ならば、琴をも習はし、をかしき物をも取らせて、花やかなる交らひもやするところ思はめ。まろが許に、女のくらしこそ侍れ」大將、仲忠「賜へ。それ益無かなり。まろが子に取らせむ」いらへ、(二)「まろが子の妻になし給へ。さながら取らせむ」大將、仲忠「いとまがくしき事するうち出でなむ。さても我等ぞ童の心地しつるに、皆子を設けつるよ。まことや用意はしてきや」いらへ、(三)「晦の夜こそは。まことは方々ものし給へば、内へも入らず」大將、仲忠「源氏といふ所、痴れたる事する。我は、人の御親とも知らず、おはするに、たど入りに入り臥しにき」中納言、(四)「帝の御女えたれば、誰かは御前には入り臥すらむ。何かは、さは祓へられて、鬼も神も、急ぎては逐ひやるべき」大將、仲忠「我をのこは、實法にはあらぬものぞ」いらへ、(五)「妻を思はぬか。思はざらむ時、今まであらむ

- (一)「まろら」は「ら」ナシ
- (二)「まこと」は「まこと」
- (三)「まこと」は「まこと」
- (四)「まこと」は「まこと」
- (五)「まこと」は「まこと」

〔語釋〕
(一)仲頼
(三)未詳、誤あらんか
(九)正頼

や。棄ててまし」大將、仲忠「あはれ吹上にて、我らがあやしき事を、せぬわざ
わざをせしやは。我らはかく上達部のはじめにて有り、かの少將もかくてあらば、
いま頭などにもなりなむ。そのかみ上臈にもあり、御覺もありし人の、哀にて山
に籠られたる。久しくえこそ訪らはね。訪らひ給ふや」中納言、涼「涼は、時々と
ぶらひ侍り。さいつ頃、綿の衣ども縫はせて、かいさう餅など調じておくり給へ
りき」大將、仲忠「年かへりて、花の盛にいざ給へ。頭の中將などして、文など作ら
む。昔の古き所うしなはぬこそ、生きたる効はあれ。殿上の今はいとさうぐし
きに、御遊の折などいとさうぐしや。世の中のはかなきに、今は思ふやうは、人
の聞かまほしくし給ふ物の音を、手を惜みて、今日も死なば、何のかひかは。萬
のするわざ、年老いぬれば、みな劣り忘れなむ。おり立ちてあそびて、帝にも親
にも、聞かせ奉らむとす」中納言、涼「いとみじき事有るべき世の中にも有るか
な。まろにも聞かせ給へ」大將、仲忠「君にもせよかし」といふ程に御消息大殿より
(九)

〔考異〕
(二)籠られ―籠り
(四)など調じて―などし
(五)花の―の―ナシ
(六)頭の―良の―つら
みの
(七)御遊―御みあそび
(八)はしく―はしう

〔語釋〕
(二)人いと―人々歎

〔考異〕
(一)御返り―御返事

(三)君の―中納言君の

あり。
正頼まうで來むするを、みだり脚の氣あがりて、東西知らずなむ。そこに男ども
侍らむ。御身のかはりには雜役もせさせ給へ。
とあり。御返り、
(二)涼かしこまりて承りぬ。渡りおはしまさねば、人いとさうぐしけに。
など聞え給ふ。色紙をひき違へつと、碁代おほく包みて、御前ごとに参れり。大
將、仲忠「君の財は、みな今宵うち取りてむ」とて碁うち給へば、中納言、涼「まけ給
ひぬ」とて打ち給はず居給へば、むすび袋に入れて出だしたり。一度にいと多く
おし立てて打ち入れつ。大將御袋に一御袋おきつよみて、二包持給へり。負けた
る人、集まりて乞へば、仲忠「またこそ、負けたらむ時つかはめ」とて取らせず。こ
れらは黄金の錢なり。
かくて御酒度々になりぬ。ことに高き人々おはせねば、ある限の君たちは、脚を

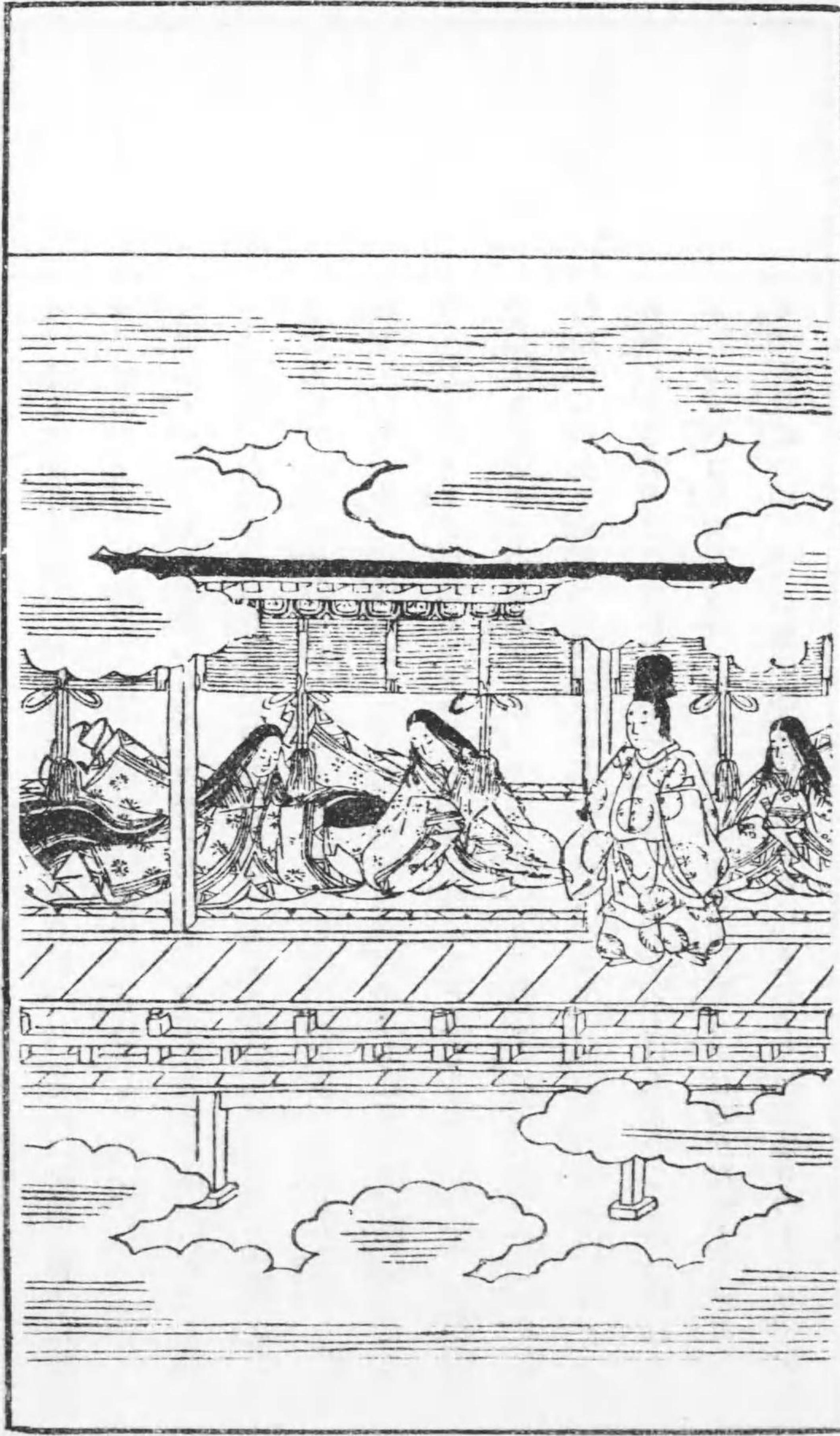
〔語釋〕
(一) 蕪菰などにて魚を巻きたるもの

〔考異〕

- (一) 火を「」を「ナシ
- (二) 紀伊守「種松
- (四) 荒巻「つさけとを」
- 枝につけたり「荒巻を」
- 枝につけたり「さくけを」
- 枝につけたり
- (五) 雉子「十捧二つを」
- につけたり「雉子と鯉十捧三つを」
- 一枝につけたり
- (六) 一捧に「一枝に

亂りてたはぶれ遊をし給ふ程に、夜半ばかりになりぬ。大將立ちて、東の簀子に立ちて、柱に倚り立ちて見給へば、御簾を二尺ばかり捲きあけて、おとな四十人ばかり、赤色、青色の唐衣、綾の摺裳、さまざまかさね著て、竝み居て、今宵の歌、詠み書き、あるはとありかよると言ひあへり。童十餘人はかり、青色の五重がさね、線ねうのうへのはかま、綾あやかいねりの袖、三重がさねのはかま、前まへごとに白しろき錢ぜにをおきて賜たまひつ。簀子には間まごとごとに燈籠とうろうかけたり。蘇枋すぼうの大おほなる櫃ひつに、銀しろかねの箸はしをへて、火ひをおこしつよ、所々にするたり。東の渡殿わたごのには、すみ物など、柵たなにかきするたり。

しばしあれば、紀伊守きののからく、國くにのつかさたちのらうどもひき率ひらて物奉ものたまる。荒巻あらまき一つ、さけとを一枝につけたり。鯉十捧こいじふもて二つを一枝につけたり。雉子十捧けしじふもて二つを一枝につけたり。鳩はと一捧ひともて二つを一捧ひともてにしたなり。銀しろかねの餌袋えぶくろ二つ、蜜あまと千歳汁ちとせぢゆと入れたり。東ひんがしの渡殿わたごのに、持もてつらねて竝なみ立たてり。又紀伊守またきののからくの北きたの方かたの御みもとより衝重つひがさね三



(語釋)
(二)正頼忠雅

(考異)
(一)いみじくといひ
じう

(三)しうへーしう

(四)めるをーめるは

(五)参りにけむやー参り
きたむや

(六)かのーナレ

つ。こしたかつき四つ、口結ひたる壺四つ奉り給へり。それは御前の簀子に並め
 すゑたり。あけて見れば、鯉、壺焼の鮑、海松、甘海苔など見ゆ。
 大將の君俄にさし出で給へり。人々おどろけば、仲忠「我と君とは、いみじく契り
 たる中ぞ。かたみに内許さむとぞ言ひたる」とて入り給へば、母屋の御簾の前に、
 かたぐの御産養の物ども参りすゑたり。大殿、左大臣、種松など奉りたる
 物どもなり。中に、種松が、二なし。母屋の御簾のうちにぞ、産屋装束したるし
 うへどもいと多く居たる。大將、仲忠「今は斯くおとなしくなり給ひて、子かき抱
 き給ふらむこそ。あな恥かしや」大殿の北の方、奥の方にて、大宮「そこは見なら
 ひ給ふらむを」大將、仲忠「物恥すと聞かれたるを、何かこのごろのならば、
 兵衛つかさよりは参りにけむや」北の方、大宮「かのしほちよりこそおひけれ」大
 將、仲忠「近き衛ならでは、などてかは。よき所に参り來けるかな」とて衝重なる
 菓物を見給へば、銀の皿の四寸ばかりなるに、それより高く盛りつゝあり。かよ

る程に、内より土器出ださせ給ふとて、
 年を経てふたとびあらむかよる日のかはらけ幾世君にさよまし
 とあれば大將、

仲忠「うまれいづる世々の土器まつ程にまた一たびの兒を見せなむ
 とて又、仲忠「御聲しつるはさののわたりにや」とあれば、「酒飲まざらむ人咎めむと
 ぞ」口々に宣ふほどに、南の方に、宮はたが言ふやう、宮はた「大將殿こそ、この父君の
 物盗みし侍る。この御物みな取る」とのよしれば大將、仲忠「盗する親ははやうこ
 そ打てや」といらへ給へば、内より土器度々強ひ給ふ。

仲忠「盃のめぐりあひつゝ萬世をかぞへて君に幾世知らせむ
 などて内にさし入れ給ふ。内には君だち並み居て、と言ひかく言ひ、強ひらるれ
 ば、仲忠「いと煩はしき所にも」とて立ち給ひなむとすれば、式部卿の宮の御方、
 世に名だたる琵琶、源中納言の持給へるを、いさよかかき鳴らしてさし出で給ふ。

(考異)
(一)ふたぐびーひとたび

(二)またーまづ

(三)しつるはさののわ
たりやーしつかさののわ
たりつかさにや

(五)親ははやうこそ打て
やー親とはよくぞうつや

(七)名だたるー名だかき
(八)いさよかーナレ

(語種)
(二)はかまの腰に

大將「ともかくも言はで、かき鳴らし給ひて、仲忠「これは、この名だたる物なりけりな」とて一日うなるども諺ひし歌を、いとおもしろき音にかい弾きて、仲忠「いづらや。この折にこそ、かの扇拍子は」とて少しかい弾きて立ち給へば、兵衛の君といふ人、路にふたがり居て、兵衛「かよる所に入りおはしまして、まさに歸らせ給ひなむや」とてひき留むれば、仲忠「あな煩はしや。群猿の心地こそすれ」いらへ、兵衛「御舎人どもぞかし」大將「仲忠「うたてある隨身にこそは」と宣ふ程に、内より綾かいねりのいと黒らかなる一かさね、薄色の織物のほそなが一かさね、三重かさねのはかま一くだり、えも言はず清らにてさし出で給へれば、中將の君といふ人、取りてかづけ奉りつ。大將「御たちの歌かきつけつる硯のもとに立ち寄りて、筆をとりて、懷紙にかく書きて、腰に結び付く、

(考異)
(一)かきつけつる一かきける

仲忠「千歳經むよはひをこよにいくかへりきてこそそみむ鶴の毛衣かくて高欄のもとにこれこそのおしかよりて居たる所に出で給ひて、仲忠「一日は

(語釋)
(一)もちひたる衣を與へて

(二)「山ぶしも野ふしもかくて試みつ今は舎人が闕ぞゆかしき」
(三)藤大納言忠俊こそ上藤なれど

(五)正頼の子ども三人
(六)仲澄
(七)近澄

(考異)
(四)するに一する所に

知らぬ人なればこそ。今よりだに知る人にを」とてすべし取らせて、其方の御階よりおりて、みそかに出で給へば、中納言見つけて、南の階より、跣足にて下りおはして、追ひ付きて、涼「何ぞ君の、内に入りて、舎人の閨の法師のやうにては逃げ給ふぞ」とて引きもて来て、涼「うとき所に知らぬ人のやうに。上藤もことにおはせず、大納言殿こそ。それも疎からぬ御中なれば、起き臥し昔語も、ゆく先の契もせむとするに、てうぶくまろが様にては」大將「仲忠「をいたす心や有ると。まことは、これこそに物は言はむとてまかり入りたりつれば、召し入れて懲ぜられつるに困じて、まかり逃げつるぞや」とて、これかれつくしとりやかへし

まことに居竝み給へり。
おとどの上達部三所、大將、中納言殿と物語し給ふほどに、故侍従の御弟の大夫なりしは、内藏頭にて、藏人にぞものしたまふ。故侍従には容貌も心もまさりたる、類なき色好にぞありける。土器とりて出で給へり。大將「仲忠「此の君見奉

〔語釋〕
(一)「など」と「なるべし」

(二)仲頼

(三)「得る」は「得給」なるべし

(四)「棄つる」の下「と」あるべし

(五)「中納言は酔ひにたるか」なるべし

〔考異〕

(六)「よりて」よづいて

(七)「と口々」とて口々に

(八)「碁に」攤に

(九)「はたまるさきさくるを」まらさきさくるを

れば、別わかいても萬よろづの事忘こぼるゝにぞ」などて、仲思ちんし「内裏うちに、「御佛名おつみやうなむ過すして参まゐれ」と仰おほせられしを、え参まゐり侍はべらぬかな。折せりあらば、その由よし、「いたはる所侍そこらにりてなむ、え参まゐらざめる」と奏そうし給たまへ」とて、仲思ちんし「水尾みづのの行人おこなひびの、かやうの折せりをかしかりしはや」中納言ちうなごん、涼かぜこの藤壺ふじつぼすこしの罪つみは得えるらむやは。昔むかしより、人佗ひとわびさせむとなり給たまへる御身みかな。涼すずしらは面おもてやはある。身みを棄すつる棄すてぬとにこそあめれ」大將たいしやう、仲思ちんし「は酔よひにたるか。など斯かくは言いふ」いらへ、涼かぜ「酔よひはぬ時ときも言いぐさなれば、みな人見ひとみ馴なれにたらむ。吾わがが君きみも、言こと賢さかしうや」大將たいしやう、仲思ちんし「そよ。さかしら言いふおろかにと言いへばぞかし」平中納言へいぢうなごん、正明せいめいとほくてるよりて思おもふぞよ」と言いへば、「さてはえこそ」と口々くちくいふを、御同胞おんどうぱたち、内うちにも外そとにも、いと聞きにくしと思おもへり。宰相さいしやう中將ちうしやう、祐澄すけずみ「今夜こよひは祐澄すけずみはしたなき目をこそ見給みたまへれ。碁ごに負まけせまりて、はたまるさきさくるをとて碁代ごてを借かりつれば、のよしりつるに、佗わびにてなむ侍はべりつる。この碁代ごてといふ物もの、すこし盜ぬすませて侍はべればこそ、いと多く斯か

うて侍はべれ」とて多くつよみて持もち給たまへり。仲思ちんし「かれは心高こころたかき人ひとぞや。怪あやしうこそ

〔語釋〕
(四)「賜はらむ」歟

(五)兼雅

〔考異〕
(一)「いみじき」みじかき

(二)「見せざらむ」みをさ

(三)「など」と

(六)「立ちたるか」立ちたる御事ごことか

は。いみじき契ちりなれしたるものを」祐澄すけずみ「如何いかなる御契ごちりをか」大將たいしやう「見せざらむとこそは」いらへ、祐澄すけずみ「羨うらやましくも侍はべる事ことかな」など言いふほどに、曉あかつきになりぬ。土か器けたちかへり参まゐる。内うちよりかづけ物もの、君きみたち取りつどきて出いで給たまへり。中納言ちうなごん取りつどきかづけ給たまふ。織物おりもの、あか色の唐衣からさね、綾あやかいねりの綾あや、摺裳すもも、三重みへがさねのはかま、兒ちごの衣襦きぬひつぎ襟えりそへたり。上人うへびとには織物おりもののほそなが、あはせのはかまなど様さまなり。かよる程ほどに西にしの方かた、中納言ちうなごんの伯母おほはは君きみの御許ごもとより、織物おりもののうちぎ一ひとかさね、唐綾からあやのかいねり、あはせのはかまなど、上達部かんだらめ殿上人てんじやうびとなどにも出いだし給たまへり。立ち給たまはむとする程ほどに、大將たいしやう、仲思ちんし「まことや、聞きえむとしつる事は、明日あす御車賜ごくるたまへけむ」中納言ちうなごん、涼かぜ「なにの御料ごりやうにぞ」仲思ちんし「女三によの宮みや、三條みよに迎むかへ奉たてまつる料りやうなり」人々ひとびといみじく悦よろこびおどろき給たまふ。涼かぜ「我が世よに、痛いたはしくかたはらいたかりつり事ことの、目めやすき事ことかな。是これはいかでぞ。殿どのの御心ごこころと思おもし立ちたるか。御催ごよほしか」大

〔語釋〕

(一)兼雅が言ひ出したれば也

(二)「わ」は「にっ」の誤にて「奉り侍らむに付きても」なるべし

(三)假令退出するに於て

(四)不益もや一不用にも

(五)藤壺の方の御用の間もかくまじ

(六)志せし一志の

〔考異〕

(一)「つて」は「御手」なるべし

(二)以下これこそ心の

(三)「も」も「も」ナシ

(四)給へる一ナシ

(五)つくづく一つづく

將、仲思、他人の知るべき事ならばこそ。然せむとあれば、「いとよく侍るなり」と人々あつまりて悦び給ひて、涼車奉り侍らむ。わきても、藤壺の明日まかでさせむとあめれば、それが入るべき様になむ。大將、仲思、それはまかり出で給はじ。然るものなりとも、曉がたにぞ辛うじて。それも不益もやよには無き。晝つ方に奉られて、その御用にもあたりなむ。「いとよかなり」とこれかれも宜ふ程に、紀伊守、客人の上達部にと志せしものあれど、えも出だしやらで皆歸り給ひぬ。これこそ、かのかづけ給へる物を持ちて思ふやう、こればかり賜はむとにやあらむとて、つくづく見るに、腰の方に文結ひ付けられたり。見れば、仲思人しれずわたりそめにし名取川なほ見まほしやつけよ何處と内裏わたりこそ忘れがたけれ。これは寒けなる居すまひなり。とあるを見てこの文をいと嬉しと思ふ。かくのよしつてもちたる人も無きものを、内裏わたりの人、いかでか見むとこそすれ、これ一行にても持ちたる人は心

〔語釋〕

(一)方々へ遣はず也

(二)私が此方にてのみ長居するは此方にて大事にさるゝ故ならんと仲思に思はるゝが恥かし

(三)犬宮

(四)片輪な處でもあるか

〔考異〕

(一)すみ物も一すみ物に

(二)日 は「は」ナシ

(三)こそ思へ一こそ思へ

にくくせしものを、と思ひて隠しつ。織物のほそながを引きへぎて、兵衛の君に取らせ、中將の君に一重取らせて、残はとりて入りぬ。かくて昨夜の御前の物ども引く。すみ物も添へて、荒卷十枝と、魚鳥と二つたかつき一つづつ、大將、大將殿、藤壺の女御の君の御もとへ、奉れ給ふ。内侍のすけ、歸りなむとて、犬宮の御湯殿に参らむ、と大殿に聞えてしを、かくて侍ればものしと思すらむ。おほろけならで悲しくし給へば、いかに日頃は、御湯殿をうしろめたく思すらむ。中納言殿の北の方、今宮、こよにも心知らひたる人もなければ、御口入れ給へとこそ思へ。すけ、時々かよひて参り來む。さばかりある御心に、御方いとよく勞はらせ給へばならむ、と思さむいと恥かしく侍り。北の方、今宮、けに然ぞあらむ。など宣ふ。大殿の北の方、大宮、この兒のいかどある、いぶかしさに、先つ頃おとどの内裏に物し給ひしころ、見に物したりしかど、更に見せ給はず。何しかは、かたはやつきたる。すけ、あなまがくし。たど父お

〔語釋〕
〔二〕大殿の北方（一）なるべし

〔五〕仲忠

〔六〕女一宮

〔考異〕
〔一〕おはすめれ―おはすれ

〔三〕あるも―あるも

〔四〕宣ふ―宣ひし

とど、今少し小くして氣近きにごそおはすめれ。日に二度三度はありし御文に「人に見せ奉り給ふな」とのみありしかばこそ侍りけめ。藤壺の御方よりも、生ひまさり給ひなむかし」大殿「いでや、容貌あるも、言ひ騒げばあまりに聞きにくしや」など宣ふ。内侍のすけに、御衣櫃に女の装束一くだり、夜の装束一くだり、絹三十匹、綿など入れて取らせ給ふ。

〔畫詞〕

こよは源中納言殿。

かくて大將殿は、晝の御座所に、犬宮いできて臥し給へり。宮もかたはらに御殿籠り給へり。源中納言殿より奉り給へる物どもは、絲を薬にて、白き組を荒巻にて、きぬ一匹を魚にて、それを五葉の造り枝につけつと十枝、鯛鯉は、生きてはたらく様にて、同じ造り枝につけたり。雉子の腹には、黒方を丸かし入れ、骸をば銀にて造れり。鳩は黄金、その腹には黄金入れたり。小鳥には、黒方を丸かしたり。折櫃は銀、鯉は沈、壺焼の鮑は黒方、海松、青海苔は絲、甘海苔は綿

〔語釋〕
〔一〕「かけ物」歟

〔二〕「あづけてしかば」歟

〔三〕「宣へる」なるべし

を染めてしたり。壺には綾、衝重にはすはうの物入れたり。洲濱を見給へに中納言殿の御手にて、涼ゆく水のすむかけきみにかふるまで汀の鶴は生ひも立たなむとあり。

〔畫詞〕

こよは源中納言殿。臺盤所におもと人たち居て物食ふ。碁代もみなあ

り。みな分けつよ。

かくて源中納言殿より大將殿に、昨夜のち物錢いま一餌袋、白き添へて、涼いに行く先長く思しまうくめる物を、なか忘れさせ給ひにける。心きたなき上達部も侍るものを。

と中納言の御消息にて有り。御返り、

仲忠人にかきあづけてかは色こそかはれ、いかど。

となむ宣へり。